

の赤兵を殺し一萬餘圓を鹵獲す之に對し尼市より派遣せられたるウスリト哥薩克騎兵約百二十はグロデゴフ到着後叛亂を起し白色バルチザンに投ず別に約五十の白黨はグロデゴフ南方に在るボルタフカ附近の哨所を夜襲し武器其他を奪ふ。而してバルチザンは一月二十一日夜グロデゴフの赤軍と交戦して之を撃退し大に勢力を得再びボルタフカを夜襲せしも成功せず。露支國境地方に於て勢力の恢復に努力す。ハンカ湖附近にも相當勢力ある白黨あり。

其の他各地方に於て農民の蹶起と白黨の漸次勢力を得る者ありて反政府派の活動次第に其の勢を成さんとす。此の時に當り適當なる指導者ありて相互の連絡を保ち且つ農民を結合して起つ時は勞農政府の威壓敢て難しと爲さざるべく反政運動は單に一方の騷擾を以て目すべきにあらざるべし。而して惡政苛税及び猶太人の横暴に反抗せんとする者實に其の主なる原因なりとす。其の將來想ふべし。

加ふるに土耳其斯坦方面の叛亂益々擴大し其の勢猛烈にして大正十三年の晩春殆ん

ど同地方全部に亘り更にポカラ、セミレチエンスク、及びコレミヤ地方も亦不穩となり勞農政府は高加索地方及ウラル方面より歩兵三個師團の増援隊を派遣して之が鎮壓に努力し叛軍は土耳其斯坦に於ける勞農政府の首腦者全部と共產黨中央執行委員とを捕虜としポカラ附近に於ては退却中の赤軍に對し住民の武器を執て起つ者頗る多く爲に戦闘激烈となり赤軍は殆んど四面楚歌の境遇に立ちて甚だしく苦しむたり。

第十二 奈翁の性格と其の家庭教育

奈翁の性格を知らんと欲んせば先づコルシカ人の性格を知らざるべからず。コルシカ人の性格を知らんと欲せば先づコルシカ島の風光を明かにするを要す。

風光明媚の地は古來偉人英傑を出すこと多し。コルシカは地中海の一孤島にして蒼波清くして天に連り峨々たる峰巒四方に綿亘し、其の間海拔八千呎内外の秀嶺を有し頂には四時殆んど皚々たる白雪を戴き無數の河は源を其の裡に發して溪谷の間に奔流

し幽翠なる湖水は碧青の色を湛へ各地に温泉の湧出するを見る。而して海より来る軟風は炎熱を滅じ四圍の洋流は冬寒を和げ濃霧なく烈霜なく氣候最も爽快なり。

斯の如き間に育成せられたるコルシカ人は天性概して快活機敏にして特に辯舌に長じ戦時にありては頗る勇敢なるも平時に於ては極めて順良なり。又強烈なる感情と剛毅なる精神に富み人の主長となるに缺くべからざる性情を具へたり。而して謹嚴質素にして寡慾毫も驕奢華美の風を有せず。然れども事に激し易く傲慢にして放恣一たび恨を抱けば必ず之に報ひざれば已まず。蓋し復讐は其の子弟教育に於ける第一義なりしが如し。是れ他國の壓制に苦しみ常に不幸不満憊むことなく遂に斯の如くなるに至らしめたるものなるべし。

コルシカ人は往古のスバルタ人の如く簡易の生活に慣れ粗衣粗食に甘んじ奢侈は懦弱淫靡の風を招くと爲し極力之を排斥し男子は狩獵を好み勇壯なる戦闘談を喜び女子は終日勞働に従事し中流以上の婦女子と雖朝夕外より用水を吸み來るを常とし男女共

に愛情に深く虚偽不正を忌むこと蛇蝎の如く隨て詐偽窃盜の如きは極めて稀なり。

奈翁コルシカの血を享け幼少の時より夙に剛慢にして意志飽迄強く自己の欲する所必ず之を遂行せずんば已まざるの概を有せり。稍々長ずるに及んで强悍の氣益々加はり餓鬼大將として猛威を振ひ四隣の兒童を風靡せり。奈翁幼時を回想し人に語りて曰く、予は幼時甚だしく剛腹執拗にして我が意の儘に振舞ひ喧嘩と悪戯を好み履々人を毆打し人を傷け我が兄の如きは常に予に打擲せられ特に苦しめられたる一人なり。然るに奈翁の母は父の寛大なるに反し頗る嚴格にして毫も子女の放恣悪行を看過假借することなく奈翁の如きも其の嚴格を恐れて常に母の言に服従せり。後年奈翁人に語りて曰く、我が母優しくして嚴格特に予の我儘を矯正せんが爲非常に苦心し予の行動は善惡の如何を問はず其の監視を免るゝ能はざりしなり。而して苟も善行爲あれば褒賞せられ惡行めれば忽ち叱責せられ毫も假借する所なく些少の缺點も必ず之を矯正し善良完全の人たらしめずんば已まざらんとして終始努力せりと。奈翁皇帝となりし時

侍臣に語りて曰く、予の成功と大業とは全く母の善良なる教訓と誠實なる模範とに負ふ所多し。予の今日あるは實に母の努力と注意との賜なり。我が敬愛する母は勇氣に富み才智に秀て品性高く自恃心強く女性的よりも寧ろ男性的なりしを以て予が識見の高まれるは主として幼時に於ける母の感化なり。故に予は子女の成長時に於ける人物の如何は全く母の感化に起因することを確信すと。是れ奈の女子教育の國家に至大なる關係を有するを看破し元老院に提議して始めて佛國に女子師範學校を創立せしめたる所以なるべし。

人の長するに及んで悔悟の情に堪へざるもの多きは其の幼少青春の時代なりと。乃ち父母の教訓を守らず。上長を敬せずして常に其の我儘を通さんとし父母の我を懲らし兄姉の我を矯めんとするの眞情を察せずして情に激しく暴言反抗を敢てす。之か爲家庭の怡樂を破りたること幾何なるや知るべからざるなり。故に長じて悔いざらんことを欲せば先づ其の我意を抑制して教を守り純良の性情を養はんことには意を致す

を要す。父母誰か其の子を愛せざるものあらんや。長兄諸姉誰か其の弟妹を愛せざるものあらんや夫れ之を察せず。其の教を守る能はざるものは天才ありと雖却て禽獸に劣る豈に思はざるべけんや。

奈翁は學生時に於て非凡の勉強を爲せり隨て學友の嬉々として遊戯に耽る間に於て孜孜として苦學せり。是れ全校幾千百人の中より選抜せられて巴里士官學校に入學を命ぜらるるに至れる所以なり。奈翁は士官學校に於ても勤勉精勵にして他の生徒の如く浮華輕薄ならず。嘗て其の深く交はる同室の友病氣の爲缺課するや此の親友の全快する迄殆んど三晝夜之を介抱して自室に閉居し一回も外出せざりしが如きは如何に其の友情に厚きかを知るに足るべし。

元來巴里士官學校は富裕なる貴族の子弟多く其の風懦弱にして浮華てに流れ剛健實の美風なし隨て給費生として入學したる奈翁を輕侮すること少からず。奈翁能く之を忍び濫りに争闘することなかりしも堅く其の信する所を守り毫も阿附せず。彼れ一

日其の學友を戒しめて曰く。君は予の如き不品行の人々と交際しつゝあり。予は君をして品行方正の人たらしめたるも彼等は君を墮落せしむるに至るべし。君果して彼等と交るか或は予と交るか直に男らしく決斷せよと然れども學友逡巡して決せず。奈翁再び注意を促したるも效なし。是に於て脆然として曰く。君予の忠言を侮蔑して予との交誼を棄てたり。以來決して予と語る勿れと斷然絶交して再び語を交へず。奈翁既に此の勇氣を有す彼れ豈に時流を追ふ者ならんや。奈翁十七歳の時自殺を主題として一文を草す其の要旨左の如し。

予は空想と沈思とに耽らんが爲に室に歸れり。今如何なる方面に就て考ふべきか先づ死に就て考ふべし。我が日は明け始めたるを以て我尙長く生きんと欲す故國を去りてより既に六七年然かも今や四ヶ月の後再び知己親族を見るの後我れ如何でか樂しからざらんや。我が幼年時代を追懷すれば軟和の情緒胸に起りて我は幸福の頂上に達するの思あり。然るに何等の狂痴か我をして死を願はしむるぞ是れ疑もなく

此の世に於て何を爲すべきかの思想是なり。我れ死せざるべからずとせば自殺するも可なるべし。我は既に十六歳を過ぎ人の俗見を尊敬し自然に其の行程を終る迄靜に忍び待たざるべからざるか。我れ不幸を知り初め何等の快樂をも有せざるに何故に前途に望なき生命を保たざるべからざるか。我は故國に於て如何の光景を見るか彼等は如何に怯懦卑賤下劣なるか。我が同胞は鐵鎖に苦しめらるゝも恐怖して壓制者の手に接吻す。彼等は徳望を有する英雄に依りて鼓舞せられ暴成者と奢侈と奸邪の汚吏とに反抗して戦ひたる往日の武勇なるコルシカ人にあらず。往時は高貴なる自重の觀念を以て誇り公事の爲め其の日を過し夜は其の勞苦を忘れて家庭の樂を有したるも今や自由を失ひ幸福なる日は夢の如く消亡せり。佛人は我等の重んじたる一切の事物を奪ひ尙且我等の性格をも墮落せしめたり。現狀斯の如く挽回殆んど不可能なり。我れ故郷に歸るの日如何なる態度を持すべきか。勝れたる憂國者は其の祖國亡ぶるや、即ち死せざるべからず若し我が同胞の救済が唯一人の死に依りて決

行し得るとせば我は直に赴きて劍を暴政者の胸に貫き我が故國の爲に復讐すべし。生存は我に取りて最も苦痛なり。蓋し我は何等の快樂をも有せず一切の事物は悉く我に取りて苦痛の種子なるを以てなり云々。

奈翁は常に祖國の滅亡を憤りコルシカ人の不甲斐なきを慨し遂に人生を悲觀して生存の苦痛を叫ぶに至れるものにして此の論は一に愛國の熱情より迸り出でたるものとす。

奇翁巴里に在るの日十八歳にして愛國論を草す。其の大要左の如し。

吾人若し現代を古のスパルタ及び羅馬の時代と比較せんか。今は榮譽を愛し古は國家を愛したるものと謂はざるべからず。此の相反する感情は到底兩者をして比較し得ざらしむ。凡そ華奢に耽ける人民にして愛國心に必要なる精力を失ふに至りたるものあるは事實なるも是れ現代の状態にあらずや。今や愛國心を重んずる人民は極めて少く愛國を以て單に幻想的なりと爲す者多し。借問す。ブルータスの崇高な

る行動を生みたる感情は果して幻想的なりしや。世界史に著名の地位を占むる偉大なる愛國者の動機は何ぞや。其の愛國心を組成する根本的感念は何ぞや。吾心をして君主國の歴史を繙かしめよ。必ずや吾人はヒリツプ、アレキサンダー、シヤールマン、コンデ、マキエヴェリ及び顯著なる多くの英傑の、功業を讀みて意氣の昂然たるを覺ゆべし。此等の偉人は其の英雄的行動に依りて國民の崇拜を得んことを謀れり。翻つてレオニダスと其三百人のスパルタ人に關して思を廻らせば吾人は果して如何なる感に打たる、か彼等は故國の危難を救はんが爲に猛進し近東の同盟軍と力戦苦闘し自由の擁護者として名譽の討死を遂げしにあらずや。スパルタに在てりは實に男子のみならず。婦人も亦非凡なりしなり。外觀の華美に眩惑し徒に界子の歡心を買はんとする現代の婦人は大に反省する所ありて可なり。スパルタの婦人は「噫テルモビレエよ汝は我が夫の墳墓を保てり。若し再び我が國を威嚇する暴君出でんか。我が子も亦潔く父の如く祖國に殉ずべし」と叫びたり。國を愛せずして唯榮

譽を愛する者は曷んど斯の如くなるを得んや。婦人と雖其の國を愛する點に於ては決して男子と異なる所あるべからず。

愛國者の壯舉を以て單に榮譽を愛せるが爲なりと爲す勿れ。最も功名心強きアゼンズ人、セミストクレス及びアリスチデスは熱烈なる愛國者なりしなり。シモンは其の不名譽なる。捕縛に苦しみ叫んで曰くアンゼスは常に彼の母にして彼の家郷なりと我が子に告げよと。アリスチデスの敵手たりしセミストクレスは故國アンゼスに容れられずして波斯に遁れ波斯王の優遇を受けたるも已れの私怨を報ひんが爲に波斯軍の司令官として故國に攻入らんよりは、寧ろ毒を飲んで死せんと言ひたるにはあらずや。

此等武勇なる特性をアマリア、オルレアン、コンデ及び故國を劫掠して恥ぢざるの多くの佛國人の行動に比較せよ前者は愛國の教訓に依りて養育せられたるも後者は榮譽の愛に依りて教養せらる。愛國心を以て虚無なりと爲す勿れ。未だ嘗て何物

も虚無より出でたることなし。偉大なるプラトンの學弟デオンは愛國心の炎々たる火に激せられて幸福なるアツチカを棄てたり。熱烈なる愛國心を有する彼は叫んで曰く。我が生命を防護しつゝある異邦人よ。願はくば我が同胞の血を流さしむること勿れと。自由は僅に最後の城砦に依りて保ちたるのみ。デオンは跪きて已れの生命を奪はんとすり忘恩者を見て彼は泣き涙は其の嚴肅なる目より流れたり。噫愛國心よ。汝は人心に對し如何に大なる力を有するか。太陽の濃霧を散ずる如く偉大なるデオン一たび出現して多數の暴君を消散せしめたり。彼は已れの血潮の流るゝを見て如何に喜びたりしか。彼の血潮は長なへにシラキュースの自由を封じたり。國を愛せずして唯榮譽のみを愛する者は奚ぞ斯の如き崇高の涙を流すことを得んや。單に不朽ならんとするの希望は個人的感情に過ぎずして常に傷つきたる自愛に變ず云々。

奇翁最も歴史を好む故に例證を之に取り立論非凡にして文辭雄健其の愛國心の崇高

なると榮譽心の卑しむべきと同日の論にあらざるを説く所實に敬服の外なし。而して當時社會の狀態我が國の現状に彷彿たり。今日の少年以て如何の感がある今日の青年果して如何の感を起すか。是れ予の知らんと欲する所なり。

奈翁少尉となり千七百八十八年七月頃勤勞稍々度を過ごし少からず健康を損ひ翌年一月の初又熱病に罹り人事不省に陥りたり。察するに其の神經衰弱も可なり甚だしかりしならんも幸にして回復するを得たり元來奇翁は蒲柳の質にして殊に少壯時代に在りては顔色常に蒼白を帯び身體枯瘦して而も病氣に惱むこと多かりしと雖世の薄志弱行の徒の如く徒に悲觀煩悶して勇往進取の元氣を缺くが如きことなく常に自憤自勵して百折不撓の勇氣を有し其の意志の堅固なるを鐵石の如し。彼の家郷に送れる書信に依れば病氣以來安眠すること少く食事は健康を顧慮して一日僅に一回に減じたりと云ふ。而して一方に於ては健康を回復する事細心注意し一方に於ては益々志氣を鼓舞して止む事なく心身の鍛鍊其の間に成り遂に風雲に乗じて大業を成就するに至れり。

故に奈翁の成功は全く刻苦精勵の賜ものにして徒に彼が天才ありしを以て偉なりと爲すは當を得たるものにあらざるなり。

奈翁は節儉を旨とし質素を重んじ爲し得る限り無益の出費を省きて之を貯蓄し有る場合之を活用せんとせり。是れ少年時代に於ける貧苦に鍊成せられたる賜なり。殊に奈翁の母は節儉を安りて質素の生活を營み子女をして其美德を養成せしめたり。而して奈翁の少尉任官後に於ける貧困なる生活は益々此の美風を涵養するに與りて力ありしを認む。

奈翁ジョセフィンと結婚後伊太利軍司令官となり塙軍を驅逐して伊太利の全權を掌握したるも依然として質素の生活を營む。ジョセフィン嘗て彼に向ひ良人は佛國の爲に幾百萬金を費すを意に介せざるに拘らず、自己の爲には僅少の金錢をも惜み給ふと言ひしに彼は然り予の功名心は甚だ強しと雖區々たる一身上の事は毫も眼中にあるなし予が眞の目的は佛國の福利を増進するに在るを以て答へたり。

奈翁皇帝となるや、其の調度費を二萬法と決定したるも餘りに僅少にして常に不足を生ぜり。獨り衣服のみならず食費を儉約し厩舎料を儉約せり或時旅行したるに馬車の速度極めて遅々たるを以て馭者に向ひ常の如くせよと命じたるも毫も其の效なし。奈翁目的地に達し主馬頭を問責したるに主馬頭即ち厩舎料を少しく増加せんことを請ふ。奈翁話頭を轉じて再び之を言はざりしと云ふ。

奈翁は公共に開する費用は毫も多額の費用を惜まらず殊に巴里を世界の大都市として美觀を加しめんが爲種々の建築を爲せるのみならず。宮廷の壯麗にして佛國の繁榮を外國に誇らんとせり。而かも其の一身に至りては極めて簡易質素の生活を營み其の戰場に出づるや、常に弊衣破帽に甘んじ兵士と同一の食物を食し甚だ粗野なる寢具に眠り宮廷に在りても威儀嚴容を示す必要がある場合の外殆んど中流社會の生活に甘んじ敢て驕奢の心を生じたる事なし。彼れ嘗て語りて曰く。朕は一頭の馬と千二百法の収入あれば愉快なる生活を營むことを得べしと。而して彼の食卓は質素なるマホガニー製

にして其の上に白布を掛け平素皇后と食を共にし時として文武高官學者美術家を招きて會食することあるも料理は質素なる數品にして食事は十五分乃至二十分にして終り單獨の場合には僅に數分にして終るを常とせり。元來彼は食事に無頓着にして好んで食せるものは焼肉と豆類に過ぎず。又酒類は嗜まざりしも時として少量の葡萄酒を用ひ珈琲は彼の最も好む所なりしを見る。

奈翁晚年侍臣に語りて曰く、朕は金錢に依りて自己を賣らんとしたることなし。タレラン、ダントン、等は自己の主義を枉げて利を得んことを計れり。バラトはヴェニス共和國の利益を計らんことを約して潜に同國公使より二百萬法を得たり。然れども是れ朕の最も厭ふ所なりと。蓋し彼の大目的たる佛國の國威を永遠に發揚せんとする高潔なる理想の前には、金錢の如きは殆んど眼中に入らざるべきは當然なりとす。奈翁は母の感化を受け熱烈なる天主教徒なりしが如し。彼れ自ら宗教的信仰の發生に關し語りて曰く、

人の此の世に来るや、其の由つて来る所自らの本體而して何所に適歸すべきかに就いて疑問を抱く、而して此の不可思議の感を懐くは抑々人間が信念の道程に入る最初の第一歩にして人の宗教の前に立つは唯自然の傾向と謂ふべきのみ。予の精神の徑路も亦斯の如くにして完教を信じたるなり。

又曰く。

予は無神論者にあらず。然れども予は理性を無視せる宗教虚偽と偽善とを含める宗教を信ずること能はず。

彼れ宗教の効果を説いて曰く、

宗教は心靈の休息所なり、希望なり。不幸を救済する錨なり。人若し艱難に際して尙神を思ひ希望を來世に繋ぎ其の祝福を信じ得るとせば宗教の力も亦偉大ならずや。

奈翁の少壯時代に於ける信仰は屢々動搖し遂には一時之を無視するに至りたるも口

ベスピールの凋落を見るに及び轉た人生の無情にして頼み難きを悟り人生は忽ち消え易き淡き夢に過ぎずと再び信仰を復活するに至れり。而して佛國は其の革命以來國民の宗教心大に衰へ其の風俗甚たしく頽廢し道德地を掃はんとするを慨し侍臣に語りて曰く、

國家は宗教を有せずして如何でか其の秩序を維持するを得んや。社會には財産の差異なき能はず。然るに其の有無を通じて各其の地位に安んぜしめんとせば唯之を宗教の力に待たざるべからず。飽食の爲に疾病となれる者の傍に餓死せんとする者あるも神の攝理なりと觀ずれば。敢て不平を起さず是れ世界に貧富あるは神の意志なるを信ずるを以てなり。

彼れ晩年に於て悲境に沈む。故に益々宗教心を深うするに至れり。彼れセントヘレナに於て語つて曰く、

宇宙に於ける一切の事物は神の實在を證明す。神の存在は決して疑ふべからず予

の權勢を得るや、直に宗教を回復せり。是れ宗教は道德を保持し風俗を善良ならしめ人間生活根本義を教ふるものなりと思惟せしを以てなり。人の不安は宗教を信ぜざるに依つて生ず予は何所より來り何處に行き而して何が故に存在しつゝあるか。自ら之を知らずと雖而かも宗教的信念は無限の慰籍を與ふる天の恩惠なることを知る。

第十三 米國に於ける排日の由來と我が國民の

自覺

近時米國に於ける排日熱頗る強盛にして近くは殆んど絶對に日本人の入國を禁止するが如き無謀なる新移民法案遂に上下院を通過し我が國民の憤慨激昂は固より東洋民族間の一大問題となれり。今其の由て來る所を左に明かにせん。

米國に於ける日本人の移住は既に慶應年間に初りたるも其の數極めて少く明治三年に於て僅に五十名を算したるのみ、然に同十五年に至り米國政府の制定せる支那人排

斥法施行せられて以來大に勞働者の缺乏を告げ、邦人の渡來を勸誘すること切なりしが爲同二十三年に至り在米邦人の數は二萬有餘人に達せり。然るに此の時各頃方面より米國に移住する者漸次増加し勞力足り人口も亦充足せるを以て移住者の種類を撰擇すべしとの議論大に其の勢を得。遂に明治二十四年に至り移民法制定せられ不健康の者貧困の者及び公共の負擔となる虞ある者醜業關係者契約勞働者等の入と拒絶を規定し邦人中入國を拒絶せらるゝ者續出し我が政府も亦旅券發給の取締を爲すに至れり。是れ對米移民問題の濫觴なりとす。

其の後邦人渡米者の逐年増加するに伴ひ邦人の在留最も多き加州方面に於て排日の氣運次第に發生したるも明治三十年には在米邦人の數一萬三千を算しアイダホ州内に多少邦人排斥の運動起りたるのみを以て三十一年末邦人の入國を禁止し又は之を制限すべき法案制定の件加州議會に提出せられたるも其の通過を見るに至らずして止みたり。是れ米國に於ける政治的排日運動の嚆矢とす然に邦人の數は依然増加し排日熱愈

々昂上せるを以て我が當局は種々の緩和策を講じたりと雖本邦政府の此の渡米の制禁も年を経て弛緩したると布哇より米大陸へ轉航する者激増せるとに依り明治四十二年頃には實に七萬三千餘人の多きに達したり。加ふるに明治三十九年四月桑港附近激震の後排日運動更に氣勢を高め遂に同年十月に至り日清韓人學童を東洋人小學校に轉校せしむべきを議決し其の結果我が學童は公立各小學校より驅逐せられたり。是に於て帝國政府は直に抗議を提出し大統領ルーズベルト大に好意を表して加州に對し教書を發し之が停止を要求せり。

是に於てか加州方面の米人の激昂甚だしく排日的勢益々昂氣進したるを以て大統領は加州代表者と屢々會商を重ね日本學童隔離令撤廢を要求すると共に布哇より轉航する者の入國を禁止すべき移民條例改正案を議會に提出し更に本邦に對し勞働者の渡米制限に關する商議を開催すべきを諭示して學童問題を解決し前記改正條例案議會通過の當日日本學童復校許可を宣言し茲に圓滿なる解決を見るに至れり。然れども桑港を

中心とする排日熱は依然熾烈なりしを以て商議を重ねたる結果明治四十年十二月我が當局は所謂紳士協約なる覺書を米國政府に交付し再渡米者在米者の父母妻子學生商人等を除くの外新なる勞働者の渡米を全然禁止すべきことを約するに至れり。

斯の如く帝國政府が内外の形勢に鑑み斷然自發的に移民制限を實行せるに拘らず太平洋沿岸諸洲に於ける排日熱は終熄することなく、明治四十一年桑港に排亞同盟會設立せられ排日運動の中心となり不斷の活動を爲せるも大統領ルーズベルトの熱誠なる斡旋と輿論とに依り幸にして歸化權なき外人の土地の所有並に日白人雜婚禁止の如き排日案の成立を見ずして大正二年を迎へたるも前記の土地所有禁止法案は正月遂に上下兩院を通過し其の實施を見るに至れり。之が爲邦人數次に亘り米國大審院に對し訴訟上告したるも土地有効にして合衆國憲法及び日米條約に違反せずと斷定して却下せられ收獲契約も亦敗訴に歸し之が爲在米邦人の農業經營は根本的の大打撃を受け僅に邦人關係の既設土地及び農業會社を保護存續せしめ之を中心として將來の發達を期し

又米國出生の日本人に農叢的教養を與へ之を農園に定着せしむるの方法を残すのみ。大正十年の調査に依れば邦人關係の土地及び農業會社の數は加州のみにして三百に上り其所有地四七、〇〇〇英町歩を算す。而して米國出生の兒童は大正十一年末の調査に於て概ね四萬八千人あるも加州に於て確實に市民權を行使し得る者は現在僅に三百に過ぎず加州オレゴン及びワシントン州に在る邦人は拾一萬七千九百人にして、其の經營する土地の面積は三十七萬八千七百三十英町歩なりとす。

要するに當初に於ては排日運動も直接利害關係を有する西部諸州に限られ中央政府及び一般有識者は國際關係と人道問題とを顧慮し本邦に對し常に多少の同情を有したるも歐洲大戰後其の國防的見地より移民問題を觀察するに及び邦人の同化に多大の困難を嘗めたる經驗に鑑み其の移住を嫌ふに至れるは勿論近時西部地方の異常なる發達は米國政界に於ける隱然たる一勢力を成し中央政府も之を度外視する能はずして排日運動を後援助長し反て彼等をして勢力扶植を企圖するに至らしめ排日熱は今や全米の

政治問題となるを致せり。隨て最近の新排日法案の如きは在米邦人の妻子も渡米する能はず學者の如きも一時的旅行にあらざれば之を許さざる如き暴戾横狂を極めたるものにして上下兩院を通過したるは驚くの外なし。今少しく其の此の如くに至れる所以の近因を明かにせん。

ワシントン通信の報する所に依れば加州排日派の巨頭フィートラン及びマクラッチーは二週間前にワシントンに到着し兩院議員の間に猛烈なる運動を開始して議員を勧誘し既に排日法案の兩院を通過するや、絶対に該法案の再審議を防止し且大統領をして同法案を拒否せしめざらんが爲其の運動を繼續せり。即ちフィートランは加州屈指の富豪なるを以て金に任せて兩院議員を歡待し豫防の網を張れり。元來排日は兩人の信條に出づるは勿論なるも亦一方に於ては此の機會を利用して再び上院議員たらんとするフィートランの準備運動なるもの、如く上院には多數の友人を有す。隨て此等の議員皆フィートランの手足となりて勧誘に努めたる爲運動以外に奏功して多數の上院議員は俄

然其の態度を一變して遂に容易に其の通過を見るに至れりと。而して兩人は大統領署名の後直に該法案を有效なしめんことを提議し此の法案通過後大統領の考慮の色あるや、狂態を以て大統領に迫り之を脅かしたりと傳へらる。人道國際關係其の他一切を犠牲にして其の横暴を遂げんとする、より其の人物を察すれば恐くは此の報道の妄にあらざるを信ぜざるを得ざるなり。而して曩には支那民黨の領袖及び唐紹儀の憤慨となり今又詩聖タゴールの悲憤罵倒となる。曰く

米國の移民排斥は啻に日本民族に對してのみならず全亞細亞民族に對する侮辱なり。獸的蠻行なり、非文明的なり、人道上より見て我々は之に耐へ忍ぶ能はざるなり。

固より然りとなす。而して米人は邦人の同化し難きを説く。邦人にして若し容易に同化せらるゝが如きことあらば、何ぞ能く異種の民族を同化して以て今日の如く結合鞏固なる一大大和民族の發達を來すことを得んや。然れども若し徳操に乏しく性格陋劣

なるものありて然りと爲さば是れ我が國民の大問題なり。故に吾人の眼に映ずる所に依り今其の一端を窺はん。洋服屋に新調を注文れば彼れ自ら何月何日には完成すべきを以てす。而して期日到るも來らず。之を催促すれば業務多忙の爲未だ完成するに至らざるを以て謝す。靴屋に修理を注文すれば何日迄には完了すべきを以てす。其の期日に受取らんとせば未だ着手せず非常に取り込みたるを以て謝し何日迄には間違なく完成すべきを約す。植木屋に庭の手入を頼めば彼れ自ら何日より着手すべきを約して去る。而して約束の日來らず。之を放置せば時として一週十日を違ふること稀れなりとせず。時計の修繕を頼むも然り若し夫れ催促せずして之を放置せば何日迄放置するや測り知るべからざるなり、故に信用を資本とすべき商人は殆んど之を信用する能はず町人は恰も人を欺き約束を守らず。再三催促せられて然る後漸く其の約を果すの狀況ならざるはなし是を以て平然出たら目を言ひ之を以て其の商賣の掛引と心得るが如し。何ぞ其の陋劣斯の如くなるや。頭を下げて辯解すれば以て事足ると爲すの心情

寧ろ憐むに堪へたり。予嘗て試みに期日は敢て當方より望まず何日頃迄に完成し得べきやを問ふ。而して其の答ふる所は依然として出放題にして矢張催促を受けざれば不可なりと爲すにあらざるやを疑はざるを得ざるなり。要するに妄りに人の意を迎合追従することは能く之を知るも其の職業に對しては頗る不忠實にして不勤勉なる之を今日帝都商賣の通弊とす。殊に魚屋八百屋の如きは長く出入するに至れば惡しき品物を高く賣り付く顧客は蓋し彼等の馬鹿にする所となり。世間知らずと侮どらるゝに過ぎず。

催促を要する國民にして而も我利を知るのみにして徳義心を缺き其の職業を重んぜずして唯金を儲ける手段と爲すに過ぎざるが如き狀況に於て果して社會は幸福を得繁榮を見るべきか。

或る時堂々たる著名の店舗に物の修繕を托せるに僅に五六日を以て爲し得べき事なるに拘らず多忙なるを以て正に一月を要すと云ふ。然れども忍んで其言ふ如くならし

む。而して期日を經過すること更に三日到れば乃ち帳簿を展べて連りに調査したる後未だ完成しあらざるを告ぐ。曰く着手して後以外に面倒なる所あり更に四日を要すと五六日の仕事に三十日以上を費やして果して商賣となるや否やは童子と雖之を知るに難からざる所なり。然るに堂々たる店舗にして人の迷惑を顧みざること斯の如し。予是に至りて愈々催促を要する國民なるかなとの歎を深うせざるを得ざりしなり。

予は元來催促を好まず。力めて宥恕の心を持ち恐くは多忙の爲若しくは事故の爲約束を果す能はざるべしと思考して相手の約束を果すに至るを待つを慣例とせるも近來益々甚だしき傾向ありて不自由不便に苦しむこと尠からざるが故に催促を要する國民は當然催促せざれば不可なるべしとの感想を抱くに至れり。曾て某家具店に於て椅子及屏風を求め更に長椅子を注文し大金を仕拂ふ。此の時物品は明日届くべしとの約言を爲せるを以て約の如くするならんと信じたるに之を履行せざること十日間に及ぶ。予人をして何が爲めなるやを問はしむ。多忙の故を以て謝し直に届くべきを約せりと

言ふも更に約を履まざること三日にして漸く履行するに至れり。隨て新調の長椅子の如きは自ら十日間を要すと提言したるに拘らず。三十日以上を費やして初めて完成せり。此等は誠に驚くの外なきも義務を感ぜざること斯の如きは恐くは世界に其の類を見ざる所なるべし。

予曾て獨逸人の店よりピアノを求め調律の後受領することを約す。偶々金圓の必要あり銀行より引出したる序を以て其の代價を支拂はんとせるに店主は物品を引き渡さざるに金圓を受くるは不當なりとなし之を受くるを肯んぜざりしことあり。然れども己に準備したるを以て敢て不可なきを告げ之を渡す。是に於て彼は調律を急ぎ早く其の義務を果さんことに努力し其の義務を果すに及び初めて欣然として大に自ら慰むるの状あるを見たり之を我が邦の義務を輕視して平然たるに比すれば豈に管に霄壤の差のみならんや。

曾て舊藩の士にして貿易商を營む者あり。律義を以て同業者の間に稱せらるゝと雖

其の人の語る所に依れば外人の間に伍しては昔の武士堅氣を以てするにあらざれば信用を博する能はざるものありと。今にして之を思へば其言は眞に正鴻を得たるものにして西歐紳士の人格は即ち我れの武士堅氣に外ならざるなり。隨て我が邦の商賣は概して小商人の人格を有し所謂大商賣の人格を有せざるもの極なて多しと爲す。外に排日に反抗して大に氣勢を揚ぐるは可なるも内に顧みて改善の途を講ずるなくんば何れの日か能く堂々世界に闊歩して耻ぢざるに至るの日あらんや。殊に米人の公然言を爲して支那人印度人アフガニスタン人ジャワ人等を以て文明の人と爲し獨り日本人を野蠻人視して憚らざるを見て徒に憤慨するは當らず。宜しく反省して以て國民の徳操を磨き人格の向上を期すべし。

第十四 日露戦役第一戦（鴨綠江）の世界に及ぼしたる感響と青年の覺悟

日露戦役に於ける鴨綠江の第一戦は實に日露戦役の運命を決定したるのみならず世

界各國をして初めて日本軍の強きを知り日本帝國の侮るべからざるを知り日本國民の卓越せるものあるを詳かならしめ世界の兒童否な世界の士民をして初めて東洋の一角に日本帝國あるを知らしめたり。隨て其の後の遼陽沙河の會戰黑溝台奉天の會戰の如きは戰蹟頗る大にして何れも世界大戰の中に加ふべきを論ずるも此等の會戰に於ける日本軍の勝利は恰も豫定の事實となれるに過ぎざる如く見做して鴨綠江戰の勝利に對する如き大なる感響を與へたることなし。隨て黒木大將黒木軍の名稱は大山大將滿洲軍の名稱より世界の人心に深き印象を残して兒童も亦之を知れりと云ふ。今青年が學籍を脱して社會に立つとせば其の第一の仕事に成功すると否とは實に重大なる影響を其の生涯に及ぼすこと恰も鴨綠江戰の勝利と異なるものなし故に其の業務の大小高卑の如きは敢て問ふを要せず。苟も其の業と定りたる以上は之を最も重要視して誠實熱心に奮勵努力して以て第一の成功を收むるを緊要とす。而して此の成功は已れに在りては自信心を増し果斷決行の勇氣を振作し外に對しては大に信任と囑望とを得べし。

是れ其の生涯に大なる影響を及ぼす所以なりとす。故に以下鴨綠江戰の世界に及ぼしたる感響を詳にして其の然る所以を示さん。

成吉思汗曰く兵士平日は其の靜肅なること牝牛の如くなるべく一旦戰場に臨めば則ち敵中に突進すること猶ほ飢鷹の食餌を攫むが如くなるべしと。人の其の業に當るも亦須く常に斯の如くなるべし。

淮南子曰く夫れ飛鳥の摯らんとするや、其の首を俛し、猛獸の攫まんとするや。其の爪を隠す虎豹其の爪を外にせずして噬む時は齒を現はさず。故に兵を用ふるの道之に示すに弱を以てし而して之に乗ずるに強を以てす之を爲すに歛を以てして之に應ずるに張を以てす。特に西せんと欲して之に示すに東を以てし先には忤ひて後には合ひ前には冥くして後には明かなり。鬼の跡なきが如く水の創なきが如し。故に嚮ふ所は行く所にあらず見る所は謀る所にあらず。舉措動靜能く識ることなし雷の撃つが如くにして備を爲すべからず。用ふる所再びせず故に勝つこと百全なるべしと。

日本軍既に鴨綠江畔に前進したりと雖深く兵力を秘し黙々として戦闘準備に餘念なく敵の眼に影ずる所一兵なし。而かも晝は隠れて準備に奮勵し夜は河川を偵察し地形を相し架橋に著手し渡河の設備を整ふ。而して敵の遠望して岩石樹木と爲す所の者は悉く是れ我が兵の假装にして一瞬と雖敵の監視を斷たざるなり。世界の人未だ日本軍を知らず。況んや無智の露兵に於てをや。

露軍は日本軍を輕蔑すること甚だしく晝は高所に立つて裕々四方を眺め河邊を彷徨し鰻河に下りて軍馬の水飼を爲し夜は警戒を疎かにして眠を貪り眼中殆んど日本軍なし。然れども我が黒木軍の將卒擧つて大に自信ありて陰忍眠れるが如く唯機の到來を待つのみ。當時義州に在りて黔定島に砲兵陣地を偵察し後方を處理し進入を計畫し戦を豫定し之が指令を講究して餘念なし。而して敵は我が斥候を認むるも之に對し其の砲兵陣地より亂射して其の位置を暴露す。之が爲我が軍の敵の情況を知ること敵よりも詳細を極む近衛兵の義州の高地に在りて敵を監視するもの戯に一步哨を假装して之

を高地に出す。對岸の敵兵之を認め好餌を得たりと爲し盛んに之を射撃するも動かざること盤石の如し。戒が兵敵の愚を笑うて以て興と爲す。我が兵の敏きこと概ね此の如し。

戦闘諸準備の完了するや。軍の砲兵は四月二十九日夕敵の遠望を許さる頃より運動を起して陣地に就き天明を待つ。四月三十日敵は毫も我が砲兵の準備を完うしたるを知らず。日三竿に登る頃其の陣地附近の高地に登り蟬集して展望し其の直後の天幕の位置より炊煙の揚るを見る彼等は未だ朝食をも爲さざるなり。猛虎の飛び掛からんとすることも知らざるなり。此の時我が工兵鐵舟を操りて鴨綠江本流を我が岸に歸らんとす。是れ我が砲兵聯隊を對岸に渡すに當り何れに上陸せしむべきやを偵察したるものにして鐵舟は我が砲兵の前面を横ぎり支流に入らんとしつゝあるなり。偶々敵の砲兵之を發見し例の如く朝の慰みとして直に之を射撃す。是に於て我が八十四門の野砲重砲突如として、射撃を開始し其の砲兵陣地は勿論高地蟬集の兵群及び其の後方の幕

營同時に霹靂の撃つが如く不意の襲撃を受け周章狼狽して遁逃し砲兵も亦忽ち沈黙して其の陣地砲火は殆んど破壊せられ歩兵は未だ戦はずして非常の損害を蒙り敵の陣地には隻影を認めざるに至れり。此の日各師團は前進の準備を整へ右翼第十二師團先づ鴨綠江を渡りて前進し近衛及び第二師團は夜に入り渡河を始め虎山附近を経て鑿河の線に前進し予の聯隊は本流を渡りて中江臺に陣地を變換して天明を待つ。

五月一日は黒木軍の總攻撃の日なり。然れども從軍の外國武官及び新聞記者は多く意に介せず。四五日の後にあらざれば日本軍の行動見るべきものあるに至らざるべしと公言し此の朝の如きは砲聲を耳にしつゝ尙寢床に横はれり。隨て其の義州附近の高地に登りて觀戦せんとしたる頃は我が軍一擧して敵の陣地を奪取し。九連城の高地に高く旭旗の翻る時にして義州附近には一兵を見ず。是に於てか豫想悉く當らず眞に日本軍の勇猛にして敏活なるに驚きたるのみならず敵火の下に前進するの狀恰も練兵場に於けると同様なりし情況を知るに及んで愈々其の感を深うし日本軍の勝利は驚愕

を以て世界の到る所に電報せられ黒木軍勝てりの聲は一時世界を震動すると共に黒木大將の名は驚望の的となり、日本帝國は初めて其の眞價を認めらるゝに至れり。故に當時外國從軍記者の世界に發表したる評論は最も興味あるのみならず。如何なることを世界に宣傳したるやを知るに便なるを以て之を左に掲げん。而して此の評論は當時軍に於て檢閲發送の際寫取したるものなるを以て頗る貴重なるものとす。

日露兩軍の力を比較すべき時は來れり。而して日軍竟に勝利を得て鴨綠江を渡過したるのみならず。其の將の器に於ても用兵の術に於ても將た士卒の膽力に於ても皆露兵の上にあることを證明したり。露兵は外觀總ての點に於て優れるが如く見えたるも最も重要な陣地を失ひ死傷及び俘虜として一千以上を失ひ又砲煩の半と小銃彈藥の多量とを失ひたるのみならず。就中其の威力を失ひて自旗を掲ぐるに至れり。是れ露軍の爲には不吉なる首途なりとす。

露國の陸軍は海軍の最初の敗衄に依りて失墜したる權勢を回復するに足るべきもの

と語り傳へられたる時、日本人は用心深くも陸軍は或は海軍より強からん。然れども露軍は我が陸軍と海軍と大差なきを發見すへしと評したるが、今や果然第一の試験に於て見事に勝ちたり。抑々其の最初は約一箇月前にして日本の騎兵斥候が韓國の西北境に於て露軍の退却を追撃し義州城外に哥薩克騎兵と小戦を交へたる時に在り。夫より露軍は江を越えて滿洲に退き直に此の地點に於て大戦の準備を爲す。而して鴨綠江に於て拒止するの可否は露の諸將軍の意見區々に分れたりとの説ありしも事實は此所を守り其の結果は即ち悲惨なり。

予は鴨綠江渡過が幾何の價值あるかを断定せんと欲する者にあらずして寧ろ此の戦に於ける重要な事項は兩軍の戦略及び實力を比較するに在りと爲す。而して形而下の結果は單に教訓に力付くる例解に止り其の價值固より教訓其物に及ぼす。即ち有ゆる總ての點に於て判決は露軍の敗に歸したるなり。鴨綠江は水淺く幅廣く迂回曲折せる川にして中流沙洲多く時に大なる島嶼を成す。流水滿々たる時義州に於ける兩岸

の廣さは約一哩の三分の二即ち千碼にして新式銃を以てせば能く彈丸の達する距離なり。義州より一直線に江を渡らんとせば中間に島なく對岸に虎頭と稱する高地あり。其の頂に規模頗る大なる要塞ありて義州に最も近き部分に各六門を備ふる四坐の砲臺あり。又後方九連城に向ひたる高き扁平の所にも殆んど同數の砲臺あり。此等の諸砲臺は必要の際義州全市を粉碎し得べきものにして又江の全幅及び兩岸三四哩の間を一掃し得べし。虎頭の下流約七哩に在る安東縣にも稍々小規模の要塞を有し之と九連城障地との間は壘を築き多くの歩兵を配備せり。

此の防禦主線の外露軍は鴨綠江の上流三四十哩の地より下流海に面する所に至る迄と其の西方大孤山近に至附る海岸とに沿うて哨兵線を張れり其の方面の露軍の總兵力は或は五萬以上なりと云ふも確かなる數は二萬以下なるべく之を廣大なる正面に分布するを以て某地を防禦せざるべからざる場合には兵力の薄弱を感じ相互の赴援又敏活なる能はず。誠に愚なりと謂ふべし而して日軍の攻撃すべき地點は五十個

所を下らざるも日軍は隨意の一點に力を集中し得るなり。

予は義州に於て奇異の出来事に遭遇せり。露軍は日軍の圏内に數名の支那人及び韓人の間諜を放ちたるに其内一は農夫となり。一は行商人となり其他種々の姿に扮して安東縣鳳凰城其の他の地より出發したるも一人として其の出發より目的地に至る迄日本の間諜に追躡せられざりしものはあらざりしなり。一人の盲乞食(假裝)ありとぼとぼ長途を辿りて義州より本街道を平壤に下り來りしが途中道連となりたる反物賣の行商人あり。毎夜同じ村に泊り平壤に至りしに行商人は憲兵に行き遇ふや軽く其の肩を敲きて乞食の方に目配はせしたり。然るに程なく前方より來れる二人の朝鮮勞働者は出遇頭に乞食に突き當り丁寧な罪を謝して乞食を扶け起したる瞬間乞食は既に日本の虜となり身邊を搜索したる結果藁靴の裡より數多の有用なる書類を發見せり。此の一例は露人が如何に探偵に拙なるかを示すものにして常に日本人に先越され日本人の彼等に於ける猶猫の鼠を弄び釣魚者の魚をなぶると同じく魚時に逃

るゝことあらんも釣魚者を捕へんことは不可能なり。

之れと同様黒木大將はカシタリンスキト將軍を弄びたり例之日軍は安東縣の下流を偵察し恰も此所より渡河せんとするものゝ如く裝ひたるに露軍忽ち右往左往に傳令を馳せ兵力を集めて待ち構へたるに何ぞ圖らん安東縣の上流二十哩梨子園の附近に於て日軍の小部隊既に渡河を始めたりとの報に接し其の方面に援兵を急派し該隊其の地に到るや日軍既に引き揚げて隻影なく徒に骨折損となれり。

(中略)

五月一日午前七時半露軍の歩兵兵は九連城背後の高地に退きたるが如し。黒木大將乃ち總追撃を命じ日軍は勇ましく突進せり是れ歐羅巴軍隊との最初の大戦にして各兵皆歐羅巴は何のその全世界を敵としても怖るゝものかはと決心色に出でたり。

日軍兵士の爲には恰惻なる諸將軍を有したるを幸とす。其の用兵の妙は露軍優に。即ち日軍の左翼は徐々として確實に露軍を掩撃し又其の右翼は敵の背後に出で

露軍の退露に迫り漸次追ひ詰めるたを以て露軍勇敢なりと雖如何とする能はず勢竭きて退却するは怯懦ならずとの傳説を有する露軍は今や之を實行するの時に際會せり此の時日軍の坂を攀登するの狀之を遠望すれば蟻の香餌を求めて集るが如し、露軍は鳳凰城街道に出てんが爲混亂を極めて遂に潰走となれり。又虎頭附近に残されたる歩兵は生存者を纏めて砲約二十門を曳きて退却せんとしたるも日軍に包圍せられ退路を遮斷せられたるを以て踏み止まり必死防戦し殆んど、三分の一は殫れ僅に三四百の者は日軍と白兵接戦せり。是れ實に第二のマジュバ丘英杜戦争の際英軍苦戦して大損害を蒙りたる古戦場にして天幕を裂きて造りたる白旗は遂に哥薩克の槍尖に掲げられたり。是に於て天に昇るの喜を以て勇み誇れる日さき日本の勇兵は軍歌を謠勝鬨を揚げて高く日章旗を翻し咽喉も裂けよとばかり萬歳の歡呼を連続したり。然れども復た嚴肅なる沈黙に返り大敵に對し殊死して戦ひたる敵の勇敢に敬意を表したり。露軍の勇猛誠に名譽とすべき價値あり。之を認めて稱讚に吝ならざ

りし日本人の大度又誠に名譽とすべし。露人の浮虜となれる者殊に重傷者の如きは極めて懇切なる取扱を受けて悉く満足せり。勇にして仁又剛にして義なるものはこれ日本兵の特色なり。

斯の如く外國人の筆に依りて世界に宣傳せられたる結果を實際に就て觀察するに有形無形上に極めて大なるものあるを見る。即ち我が政府は戦費に當てんが爲米國に於て借款を企て人を派遣せりと雖信用なく殆んど絶望の境遇に立てり。然るに鴨綠江戦勝の傳へらるゝや忽ちにして借款成立せるが如きは其の一例にして其の信用敬服を得たるは之を以て推知するに足る。

日露戦後米國の其の首都に萬國博覽會を促すや、特に我が國に照會して軍部の代表者を招待す。我が政府即ち黒木大將一行を派遣す中に鴨綠江戦に於て最右翼に活動せる第十二師團長木越中將等あり。一行の米國に到着するや、國賓として接待せられ非常の歡迎を受く。汽車に乗りて首都に赴かんとせる際の如きは各停車場附近は人を以

て埋められ老幼男女貴賤貧富を論ぜず。悉く停車場内に殺到し列車の停車するや。或は車内に押し入り或は窓より手を差し出し將軍黒木を連呼して握手を求め小兒勞働者の如きは殊に其の相貌を視握手を欲して急行列車を動かざらしめ且萬歳を連呼して天地を震動し列車漸くにして發すれば兒童尙車内に残り之が爲再び列車を停めて之を卸す等非常の混雜を極めたりと云ふ。而して黒木大將の名と共に黒木軍の名聲盛んなるを以て苟も黒木軍に屬したるものは羨望の的となりて米國人は恰も自國軍の將校の如く之と席を同らし之と語を交へたるを以て誇りとなせり。

戦役直後予の同僚南洋を視察す。固より公務を帶ぶ到る所に於て歡待を受くるや、外人必ず何軍に屬して戦ひたるやを問ふ。彼れ胸間の金鷄勳章を示し黒木軍に於て此の名譽を得たりと答ふるや直に起つて一同に紹介し大尉は黒木軍の勇者なり。之を祝せざるべからずと一座悉く起ち杯を舉げて乾杯し、夫れより談殆んど戦役に移りて熱心に實況を聞き稱讚の辭を盡して之を聞くことを得たるを喜ぶの状あるを例とせりと

云ふ。蓋し羨望敬慕の的となるものは成功にあらずして之を成し得たるの人に歸す其の相貌にあらずして其の人格を思ふ。故に鴨綠江第一戦の勝利は勝利其の者にあらずして直に其の人を想ひ延て我が國民の上に及ぶ。隨て國家の威望は固より國民の威信之が爲大に高まれるは火を視るよりも明かなりとす。然れども此の羨望は遂に嫉妬恐怖の基となり、今や敵意を含むもの獨り米國のみにあらざるべし。故に青年は第一の成功を慎重にすると同時に一たび成功を獲たる後は益々戒愼して人の忌憚に觸るゝを避け嫉妬憎惡を豫防し一意其の實力を養ひ熱誠憤勉して以て向上發展を期すべし。是れ修養の重要なる一關門なりとす。彼の奈翁の伊太利より巴里に歸還するや、其の粗屋に入りて世の注目を避け讀書を事として英氣を養ひ以て機の到るを待ちたる用意の周到なるものゝ如きは正に青年の好範たるものとす。之が爲には大なる理想を抱ひて思を將來に馳せ小成に甘んじし苟も驕慢の心を生ずるが如きことなからしめざるべからざるなり。

第十五 青年修養の道 其二

一。質素

儉素は家を治め國を治むるの要道なり。頼朝の志を得て幕府を鎌倉に置くや前者の覆轍に鑑み之を以て天下を治むるの方針と爲し家康も亦之に倣ふ。而して質素は明治大帝聖諭五條の一なるのみならず勤儉を國民に諭し給ふこと頗る切なりしを見る。

人儉素にして己れが分を守れば放逸奢侈に陥ることなし。産を治めて勤勉なれば遊惰に流るゝの患なし。貪りて辱を招かんよりは儉にして廉を守るに如かず小利に意を注がんよりは寧ろ小費を省くに如かざるなり。而して奢る者は心常に貧しく儉なる者は心常に富む。故に儉素は安康の基なるのみならず又仁惠の根源なり。富む者必ずしも仁なる能はざるも質素を守りて餘蓄を生ずれば富ますと雖能く之を施して仁なるを得貪なりと雖己れが分を守れば求むる所寡くして義を缺くに至らず。故に質素は早く

少年時代より之が慣習を養ひ以て第二の天性たらしむべし、ピクトルイマニールは伊太利帝國の創祖なり。質素自ら持して以て一國の範例となり其の軍服は制規に従ふと雖灰色の朝服と黒色の晩服各一著を調製し平日常に之を着用して其の弊破するに至る迄之を更ふることなかりしと云ふ。帝一夕灰色の服を着して劇場に赴きたるに偶々露國の内親王來るに遭ふ。帝即ち近臣に謂つて曰く、黒服を取寄するも面倒なり。内親王を訪問する間君の服を借用すべしと。而して之を着用するや、此にて伊太利皇帝と見ゆるかと微笑を含んで内親王の席に赴きたりと云ふ。

予數次宮中に於て 明治大帝に拜謁す。然るに陛下は最後まで最初に調製し給へたる黒絨肋骨の軍服を召され色は褪め肋骨の端は摩り切れたるを厭はせられず侍臣の新調を奏請する毎に之にて支障なしとて許し給はざりしを拜承し恐懼自ら省みて質素の實を缺くこと多きを痛感し常に反省自制を怠らざりしも宮中に於ては今尙大帝の遺法を守らせ給ひ各室の椅子等の褪色摩損せる者尙依然として更新せられざるを拜す。予

の中學時代に皇居成り京都に行幸の機於て拜觀を許さる。時正に明治二十三年と記臆す。大帝の御服は固より數年前に調進せられたるものにして各種の調度の如きは此の年に成りたるもの多かるべく正に三十四年を經過して其の舊態を改めさせ給はざる聖慮に至つては唯感泣するの外なし。然るに現今の社會の日に虚飾華美に流れ文弱の弊甚だしきを顧みる時は悲憤の情禁ずる能はざるなり。國家の期待と社會の輿望とを双肩に擔うて立つ所の青年は斷然俗流を脱して師表となり。人に貴ぶ所の者は相貌の間に存するにあらずして其精神其人格に在るを明かにせざるべからず。時流を逐うて泛々飄々たるは是れ男子の潔しとさせる所なり。況んや國家を負うて起つ奮闘的青年に於てをや。

獨逸の偉人ビスマルクも極めて質素なりしを見る。彼れ獨逸帝國をして大に盛んならしめ其の勢望の増進すると共に鐵血宰相ビスマルクの名は世界に轟き國王の信任と一國の輿望とを一身に集たるに拘らず毫も驕れる色なし彼のフリードリヒスルーの別

莊は千八百七十年佛國との大戰後賞功の一證として普王より賜りはたるものにして彼の別莊に起臥するや、驚くべき質素を守り世間の交際を謝絶し森林中を散歩して悠々消光するを常とせり。而して此の家屋は内外共に粗末を極め部屋の入口には番號を記したる戸ありて以前は旅宿なりし形迹を其の儘に存し其の書齋には佛國の繪入新聞より切り抜きたる畫像を懸け其の下には千八百十一年佛國と平和條約の豫約書に調印したる際の机を置く、又此の別莊は全く庭園なく門を入れれば即ち鬱々たる。森林にして其の中に粗末なる家屋ありしに過ぎざるなり。彼れ少壯の時家産傾き家計窮乏を告ぐるや、兄と共に自ら農業に従事して之を挽回す。英雄の思想誠に貴ぶべし。

二、恭 謙

貝原益軒説て曰く。君子は人に接するに禮讓を以てす。故に争ふ所なしと。實に然り。是を以て自ら謙すれば人愈々服し自ら誇れば必ず疑ふ。大學には一家讓なれば一國讓に興ると説く今若し一人恭謙にして禮を重んずれば一家禮を知りて恭謙の徳を養

ひ以て社會に及ぼすことを得べし。

又口は善惡の門にして一言人を誤り身を亡すの禍を招く故に慎まざるべからず。而して禮を重んじ恭謙自ら守りて一言苟もせざる時は人に敬せられ又自ら悔ゆることなし。現今の人多くは自ら誇りて以て己れを信ぜしめんとするも是れ却て其の躬を卑しうするものにして人の侮を受くるに過ぎざるなり。

歴山大帝は露の賢君にして自ら職工と爲りて工藝を輸入し自國の開明を圖りたるは人の能く知る所なり曾て獨り微行して民情を察せんとす。然れども粗末なる古軍服を著けたるを以て其の皇帝たるを知る者なし。皇帝小村に入る。路岐れて可なるやを知る能はざるを以て或る家の檐際に立ちたる人にカルガの方へ行くには何れの路を可とするやと馴れ馴れしく問はれたり。其の問はれたる人は立派なる軍服を著け烟管を口にし傲慢なる態度を以て皇帝の服装を見卑しき者が我に向つて馴れ馴れしく路を聞くは無禮至極なりと爲すものゝ如く恰も兵卒に號令する如く右へと答へて天を仰げり。

帝之を謝し且尙一つ御尋ねし度とて次の如き問答を爲せり。

將、何んだ

帝、貴官は陸軍で何で御座るか

シ、あてゝ見よ

テ、中尉で御座いますか

シ、それよりも上ぢや

テ、大尉で御座るか

シ、まだ上ぢや

テ、少佐

シ、らむ

と將校身を反らして首肯せり。帝は可笑さを忍んで此の偉き人に敬禮せり。然るに彼れ傲慢にして禮を知らず大に人を侮るが故に徐ろに口を開き愚弄して以て快を取ら

んとす。

シ、今度は乃公が聞かう其の方は何役ぢや

テ、あて、御覧んなさい

シ、中尉かね（愚弄せんが爲上より下に行く積りにて）

テ、上です（彼のあてははずれたり）

シ、大尉ですか（彼は之が止りと思ひつゝ）

テ、上ぢや（彼のあては盛々はずれたり）

シ、中佐で御座るか

テ、もう一度（是に於て少佐は口より烟管を脱せり）

シ、貴官は陸軍少將で御出でなさるか

テ、大分近づいた（少佐は帽を脱せり）

シ、左様なれば大將閣下で御座りましたか

テ、まだまだもう一度申せ（少佐は戦慄し不覺手より烟管を落したり）

シ、されば皇帝陛下にて御はしますか

テ、其の通り（少佐は皇帝の足下に伏し）

テ、陛下御ゆるし下さい

テ、悪しき事をせぬ者に何のゆるす事があらう其の方は唯朕に路を教へて呉れたま

でぢや禮を言ふぞ

と言ひ捨て、帝はカルガの方に歩を進ませられたり。而して少佐は痛切に其の傲慢の失態を感じたるべきも此等は傲慢を以て、威嚴を保つ所以なりと誤解するより生ずる過失にして下に對し人の多く陥り易き所なり。然れども禮を知り恭謙己を持する時は下に對しては懇切丁寧にして人をして益々敬慕の念を抱かしむ地位の高きに從ひ愈々然り。

三、仁愛と協和

人を見ること猶己れの如くする、是れ即ち仁愛にして孟子は仁者に敵なしと云へり故に協和は仁愛に依りて初めて之を得べし。而して骨肉の間に於ては慈愛となり敬悌となり和順となり親睦となる此の心を以て下に臨み上に盡すが故に信服となり恭敬となり敬慕となり協和となる同僚同輩の間に於ても亦同様なりとす。随て「人を見ること猶己れの如くす」との一語は吾人の修養に於て萬金の値も猶之に當るべからざるなり。

源義光勇猛にして智略あり。弓馬の道に長ず兄義家阿部貞任を陸奥に討つて戦ひ敗れたるを聞くや兄を思ふの情切にして禁ずる能はず。即ち之を援けんことを奏上せるも皇居警衛の任に當るを以て許されず。然れども戦敗の状を想ひ國患の大なるを慮り其の心止み難く遂に官を辭して陸奥に赴く。義家大に喜び恰も老父に遇ふか如しと言ひ是れより力を協せて征討に従事し功を奏し兄に従つて歸洛し其の志を全うせり。

又北條泰時父義時の死に依り執權となるや諸弟の望む如く父の遺領を頌ち自ら得る所を少くして諸弟を導き同心協和を得たるのみならず。此の心を以て天下を治めたる

が故に大平の化を致せり。是れ其の偉名の後世に遺れる所以なりとす。

加藤清正は勇猛にして仁愛に富む。彼の朝鮮征伐の時の如きは先鋒となりて戦ふ毎に勝ち其の威武に怖れて鬼上官と呼べるも寛仁大度にして民を憐み兵士の亂暴掠奪を嚴禁し愛撫保護到らざるなく其の檣にしたる王子の如きは殊に之を憐み勞はりたるを以て王子の清正を慕ふこと恰も親の如く秀吉の薨るに及んで歸朝せんとするや、王子泣ひて別を惜み國民も同じく其の徳を慕うて大に惜み敵も亦清正の軍に對しては毫も妨害を加へざりしを以て悠々として引き上げたるも小西黒田等の諸將の軍は敵の追撃を受けて頗る困難せり。是れ清正の徳の致す所なり。

千八百五年日耳曼の役奈翁既に埃都に進入したる後十二月一日更にタニユブ河を渡りて本營をブルトン附近に設け近く埃露の同盟軍と相對す。奈翁露將ベクスハウデン親王の率ゐる豫備軍の來着に先ち之を撃破せんと欲し一旦前進せるも再び元の陣地に退き防禦工事を施し敵を誘致せんとす。

露帝之を見て要害の地を去りて平原に下り徒に佛軍の好餌と爲らんとするの情況を認む奈翁之を見て歡喜の情禁ずる能はず叫んで曰く彼れの軍隊は二十四時間にして予の有とならんと。

夜既に更けて萬籟正に眠るの時奈翁は馬を驅りて前衛の情況を視んが爲發向す。兵士の眼を避けんことを欲したるも忽ち其の認むる所となり兵士篝火を掲げて歡聲一呼するや全隊一齊に起つて之に應じ彼の通過する所喝采の聲天地を震動するの概あり。當時兵士は之を以て奈翁の皇帝の位に即きたるを祝せんとしたるなり。中に一老兵あり衆を排して躍り出で奈翁に向ひ叫んで曰く陛下は一事を吾等に約すべし。即ち陛下は身を挺して砲火を冒すことなき是なりと奈翁莞爾として答へて曰く、約に従はん、爾等が予を要する迄予は豫備隊と共にあらんと。何たる愛情ぞや何たる温情ぞや。蓋し奈翁の赤誠慈愛は自から兵士をして其の徳に懷き彼を慕ひ彼を敬し彼を思ふの情を深うせしめ遂に茲に到らしめたるものにして軍隊之に於てか團結鞏固にして協同一致

す。此の軍隊を以て戦はゞ戦勝は欲せずして我が手に歸するは自然の勢なりとす故に上に立つて人を率ゐる者は此の心を以て己れの心となすを要す。

凡そ人は己れ人に接するに信義を以てすれば人も亦我に酬ゆるに敬忠を以てす。此の敬忠信義相投合すれば油然而として親愛を生じ親愛薰蒸すれば藹然として和氣を成す是に於てか上下の間恰も親子の如く同僚は兄弟と同じく秩序整然として立ち一家同體の協和隨て生ず要は仁愛の心を以て赤誠を盡すに在り。上長を敬して禮を致し同輩に交はるに友道を以てし下に莅むに慈愛と教導とを以てして之を保護する時は人心如何に腐敗し徳操如何に頹廢するも自から感化の功を顯はし、美風遂に成り怡々其の生を安んじ偲々熱精勤勉の勞を忘れしむるに至る。若し夫れ社會にして斯の如きを得ば何ぞ國家の衰退を憂ふるを要ぜん而して率先之に努むる所以の者は即ち修養の道にして又自ら一身を金玉ならしむる所以となる。是に於てか唯實行の一途あるのみ。

四、勤勉努力

活動は天理に適ひ勇進は天意に合し奮闘は吾人の天命なり。故に人各日常の業務に従ひ勤勉努力せざるべからず。然るに人多くは却て勉勵すべき業務の繁忙を怨む即ち學生は學業に従ひ日夜憤勉して意の如くならず。又社會に立つの青年は或は軍人となり或は官吏となり或は會社に働き或は鐵道電車に職を有し或は田圃に立ち或は店頭に座し或は車を挽き或は重荷を負うて行商し早曉より深更に至るまで慘憺たる單調の業務に服し日々之を繰り返して其の生涯を終らんとするの憾なき能はず。而して女子も亦煩雜なる家事に苦み育兒に勞し社交に疲る隨て青年男女は日常の業務を以て障礙と考へ常に裕餘なき境遇を歎じ煩累を脱して其の欲する如く讀書講究を擅にし以て其の品性を高め人格を向上し大に其の能力を増進するの自由を希はざるはなし。然れども是れ大なる誤にして偉人は皆此の勞務を忍んで初めて其の人格を向上したるを思はざるべからず。所謂社會なるものは最も貴重なる陶冶鍛鍊を與ふる大學にして青年の學籍を脱して社會に立つは則ち實學の門に入りたるなり。故に若し日常の勞務を厭ふ時

は人生最後の目的なる實學を好まずして再び机に倚り理論を講究するの學途に復せんことを望むと同様にして遂に人生を踏むの機なかるべし。

抑々青年の日常の勞務を厭ふ所以の者は他に原因ありて存す。即ち其の功を急くもの是なり。學途に在りて學びたる所のものは之を實際の境遇に適應せしめ其の日常の業務に活用して初めて學の目的を成すものなるを忘れ且つ其の勞務の學識に及ばざる遠きを思ふが故に不平不満の情勃然として禁ずる能はず。是れ其の最も貴重なる日常の業務を嫌ふの傾向を生ずる所以にして自然の勢なるも人生の目的は元來事業に存するにあらず。大功に在るにあらざるなり。又單に理想を以て人格を造り得べきものにあらずして理想は恰も脂油の機械に於けるが如きものとす。故に人生の最大目的より言へば官職は事業を計畫指導するものとなすべきにあらず。青年將校は士卒を教育薰化するを職とすべきにあらず。隨て店舗は品物を販賣する所にあらず。工場は物資を製作する所にあらずして實に人格を成し精神を發育せしむべき所なりとす。是を以て

人の厭ふ所の勞務雜役は皆其れ呈人訓化の甘泉芳香に外ならず。思つて茲に到れば日常煩雜の業務と卑しき勞役とは最も貴重にして衷心より之を愛し之を喜ばざるべからざるなり。人若し此の觀念を失はざれば勤勉努力の苦勞は愉快となり喜樂となり苟も之を忽にするを得ずして奮闘の勇憤自から生ぜん是れ求めずして功を成すに至る所以なるも力めて得る所の偉大の人格に對照せば功の光華は頗る微なりと謂はざるべからざるなり。

五、勞苦の功

二宮尊徳幼にして父母を喪ひ親族の家に寄食し晝は農事に勵み夜は字を習ひ書を讀む其の讀書を禁じ燈油を費すを許されざるに至るや、自ら河岸の瘠地を開拓して油菜を蒔き以て燈油の資となし繩を作り筵を織り家事を助けて深更に及び人の寢に就くや書を讀み自ら學び又暇あれば山に入りて薪を拾ひ又は他に雇はれて耘耕し遂に其の人格を成して名を後世に遺せり。是れ學に志すと同時に實學に就きたるものにして彼れ

若し貧困ならずして専ら學に勵むことを得たりとせば果して彼が如き偉大の人格を成し得たるや否やは遽かに之を知るべからざるなり。

予嘗て演習の途次長府の舊乃木邸を訪ふ。同邸は乃木大將幼時の情態を保存し家は二室にして一は狭き臺所なり。天井には屋根あるのみにして全く板を張らず而かも此の座敷は食堂居間寢室を兼ねたるものにして縁端を有せず。庭より直に室に入る。井戸の傍に一株の柿の木あり。大將の幼時よりありし者なりと云ふも幹細く餘り生育しあらず。是れ土地の惡しきに因るものとす。而して柿の木の外庭らしき所なく又岩石樹木を認めず。臺所の外方即ち家の北側の檐下に米搗臺を置き高き所に一冊の漢書を載す。是れ即ち幼時大將の米を搗きつゝ讀書したる當時を想はしむるものにして家極めて貧窮なりしが故に内に在りては米を搗かざるべからざりしなり。予此の景況を視大將の偉大なる人格は其の幼時よりの勞苦に依りて鍊成せられたるものを詳にせり。予大學に在りて騎兵隊附と爲り其の特別演習に参加す乃ち宇都宮を通過して鬼怒川

北岸に進出して夕刻此所に停止す此の日雨降り夜に入るや屢々猛烈を極む。露營地は騎兵の自衛に便なる河の中洲に在る松林なり。地濕潤にして踞する能はず風雨頭上を打ち四邊を荒すの暗夜篝火を圍んで佇立するのみ。稍々冷寒を覺えて人の語るなく外套の頭巾を被り沈黙して頗る陰鬱なるの時乃木將軍單身露營地を求めて來る將軍は演習の初より見學の爲同行せられたるなり。將軍青年將校の間に入り馬を民家に托し麥飯を味ひ來れるを告げ且つ曰く、平素庭に焚火を爲して徹夜するも露營の趣味は生ぜざるものにして我々の如きは演習の際寒風雨雪に筋骨を鍛へざれば有事の日御用に立たず幸に今夜は諸君と共に語りて徹宵せん諸君の如き壯者に伍して恐くは十年若返るならんと。莞爾として四顧す。之が爲俄に活氣を生じて種々の質問を發し將軍をして語らしめ非常の利益を得たり。

乃木將軍英國皇帝の戴冠式に參列し歐洲を巡視して歸る。部内歡迎會を開かんとし將軍の意中を問ふ。將軍乃ち歡迎會は好まざるも枝豆腐の懇談會なれば大に望む所なりと答ふ是に於て鹽をふりたる枝豆芋の串さしにて歡迎會は開かれ將軍は席上に於て盛んに虚名を排して勤儉實力を養はざるべからざるを説破せられたり蓋し其の意世の驕奢を戒しめ以て國家の隆昌に赴くを熱望せられたるに在るや明かなり。而して困苦缺乏に耐へ克ち勤勉努力其の業に勵むは將軍第二の天性にして素朴誠純は是れ將軍の面目なりとす。勞苦は人格の金剛砂なり吾人は須らく之に依るにあらざれば砥礪する能はざるを忘れざるを要す。

基督は母マリヤと共にナザレの孤村に在りて三十歳迄大工の業を營み専ら孝行を盡し其の間沈思冥想の工夫を鍊りて我が識見を定め乾坤の大を究め宇宙の高きを看破せり。

乃木大將は暇あれば那須野原の農園に到りて自ら耕耘に従事しピスマルクは其の夫人に語りたる如く殊に農事を好み菜田に遊び麥隴に歩むを無上の快樂と爲せり。

伊太利のフロレンスに生れたるニコロ、マキアヴェリは實に歐洲の韓非子とも

稱すべき政事家にして第十五世紀の世界に立ち斬新獨創論を吐き大喝一聲駿氣を振ひて電光を破り雄心を鼓して電影を斬り天下を制馭するの術略を説き自ら一國の重任を負ひ諸王諸侯の間に往來して其の抱負を行ふ。陰謀事件の運案を受け獄に投ぜられ其の友の辯明に依りて青天白日の身となれるも未だ官途に就く能はず。即ちフロレンスを去りて山莊に退き困苦窮乏に耐へ泰然として其の心を動かさず。晝間は或は獵徒に伴ひて鳥獸を獵し或は樵夫に隨ひて薪炭を採り或は釣屠車夫と伍し日暮家に還りては古今の歴史を繙き滿腔の熱血を灑ぎて王道論を著はし之をフロレンス公に上れり。

亞刺比亞の英傑マホメットは都城メツカに生る二歳にして父を喪ひ四歳にして母を喪ひ祖父に養はる。八歳にして祖父又死し其の長子の撫育を受け商賣を習ひ十二三歳にして通商に隨ひシリアに赴き二十歳の時民族の戦亂に際して軍に従ひ二十五歳の時メツカの一富商の寡婦の爲に雇はれて商事を司り拮据精勵すること數年公正にして私なく人の愛敬を受く寡婦大に其の人となりを喜び遂に之を夫と爲す。マホメット之が爲

俄かに富む。而してマホメット言語温和にして人と交はるや、極めて寛厚眞摯初め埃及猶太シリアの諸國を往來し艱難辛苦の間に各教の宗旨教規を解得し遂に新教を立て世を救濟するの志を抱き三十八歳にして密に家を出で、山嶽洞窟の中に潜匿し沈想黙思靜に萬物の形象を觀察し宇宙の眞理を究めて教書哥蘭經を著はし布教に着手し新教を廣め迫害困苦を忍んで其の志を遂げ進んで更に帝國を建設し亞刺比亞國始めて興り其の國民始めて顯はる誠に偉なりと謂ふべし。

記して茲に至れば勞苦は人の生涯に於て缺くべからざるを知るに足るべし。是れ其の剛健なる精神を失はず艱苦を意とせずして常に勇往邁進の元氣を維持せしむるに必要なるものなればなり。況んや修養鍛鍊の功を積まざる青年に於てをや。然れども予は妄りに青年を恐怖せしむることを欲せず。却て之を激勵せんことを欲するなり。唯其の取るべき道の障礙多きを豫期して大に勇憤猛進せんことを勸告せんと欲するなり。青年にして若し此の意氣を以て進まば嘗て峨々たる連峰の如く高く其の面前に聳

えたるものも漸く之に近づけば廣き高原にして峻坂峻路は坦々たる平道のみ。今人生を水流に譬ふれば其の初潺湲たる細流水淺くして岩に激し崖に堰かれ狂奔怒號せしと雖漸く其の下流に至れば洋々たる大河となりて艤艦を浮べ遂に大洋に入るに及んでは五大洲を呑むの概あり。此の雄壯の光景を見れば誰か奮進せざるものあらんや。青年須らく希望と勇氣と確信とを失はずして勤勉努力すべし。

第十六 國民皆兵の實と羅馬の興亡

一、國民の戦争と文明

フォン、デルゴルト其の國民皆兵論に論じて云く方今日に月に進歩するの科學工藝を直ちに高尚なる目的に用ひずして人々相殘害するが如き賤劣なる目的に使用するを深く遺憾とするの説は常に吾人の耳にする所なり。人或は言はん。各國の人民此の進歩に因つて文明開化に赴かずして益々野蠻益々慘酷となり。互に相殘滅せんことを思

考するの外他念なし實に嘆ずるに堪へたりと是れ實に皮相の論のみ人誰か殺伐を好まらんや。勢己むを得ざればなり夫れ一國の人民文明開化學問技藝富裕に依て今日の生活に華美を極め其の志愈々柔懦なれば兵亂の危きに瀕すること亦愈々大にして大に備ふるを専らとすること益々必要ならざるを得ざるなり。人或は之を駁して云はん。往昔より開化高潮の域に進み文明の光輝亦熾んなりと雖既に戦争を爲すに堪へざる國民ありと。然れども斯の如きは稀れに見る所にして未だ以て前述の論旨を説破するに足らず。抑々斯の如き國民の後に至りて衰替したるは其の社會の零落腐敗に原くものにして蔽ふべからざる事實なり。蓋し國民の勇氣は既に全く消失したるも其の智識尙存し僅に國脈を維持すと。雖奢侈に流れ逸樂に耽るを以て國民の愛國心憤發力及び徳操節義は地を拂つて盡き遂に國家の元氣全く亡失するに至り其の極國の滅亡を致せしに外ならず。而して斯の如きは古來甚だ稀れにして開化と武勇とは並び進むを通例とす。

現今文明の大國民は有事の日に當り國家の全力を用ふるが爲めに益々其の軍備を完

全にするは何れの場合に於ても當然の事なりとす。兩敵國の内閣相戦ふの時代は既に過ぎ去りたるを以て現今の戦争は容易に局を結ぶ能はず。何となれば一國の長たるもの或は一國中勢力ある者其の力既に全く盡くるも其の國民力を盡して復た策の施すべきなきに至るにあらざれば戦争は其の終局に至らざるを以てなり。見よ佛國民は千八百七十年に戦争を好まざりしと主張すと雖戦争を宣告せし帝政府の倒れたる時毫も人命財産を損失することを顧みず、戦争を續行することに斷決せしにあらざや。而して千八百七十年七月中宣戦の急速に過ぐる事に關し激烈なる駁論を爲せし者も九月に至りては忽ち翻つて諸軍を指揮し戦争の最も熱心なる鼓舞者となりしにあらざや。是れ此の戦争の全く國民の關係する所に歸したればなり。隨て當初の計畫に抗論せし者と雖其の國の興廢存亡に關する秋に方り宿志を捨て、國事に奔走すべき義務あることを感じ之を體認するは人情の然らしむる所なり。人誰か此の情を以て國民の美德と爲さるゝ者あらんや。

凡そ國家は國民の利害の關する所に從ひ和戦を決す。而して一朝戦端を開くや。其の戦の激烈なると否とは全く國民の感情如何に因る又現今の戦争は國民と國民の戦なるが故に敵を全滅するの概を以て國軍を運用するにあらざれば不可なり。是れ敵の政府を倒すにあらざして國民を屈服せざるべからざればなり。故に一國は一朝事あるの日に當り國民の全力を戦争に供するが爲平時より十分に其の軍備を整ふるは正當にして必要缺くべからざる所なりとす。隨て一國の人民戦争の惨害を懼れ徒に平和を希望するの情に驅られて軍備を消極的に止めんことを欲するは反て忽ち其の希望に反する結果を招くに至るを忘るべからざるなり。何となれば敵は必ずしも同一の制限を受くるの義務なきは皆人の信する所なるを以て我が翼に乗して大兵を向くるは毫も妨くる所にあらざればなり。故に國民の皆兵主義に則り進んで兵役の義務を果し以て有事の日に備へ一國は常に其の軍備を完全ならしめ以て其の國家の維持を保證し得るの實を擧げざるべからず。

斯の如き適證は我が國の上下過般の歐洲戰爭に依り親しく認知せる所にして近時盛んに國民の戰爭國家の總動員を提唱するに拘らず軍隊を視ること依然として舊態を改むるに至らず。妄に罵聲を放つて之を社會の外に孤立せしめ毫も喜憂を同じうするの實なきは唯口に伶俐にして未だ眞に醒めたるにあらず。故に吾人は先づ其の思想を改めて然る後國民の戰爭を提唱するの要あり。國民は平時其の嫌厭憎惡せる軍隊をして果して戰時國家の興敗を擔うで戰に従事せしめ得と信ずるが矛盾も此所に至りては極まれりと謂ふべし。蓋し斯の如きは未だ以て國民皆兵の精神を獲ざるものにして大に國民の覺醒を要する點なりとす。殊に年々軍隊に送る所の子弟は軍服を着用し兵營に起臥するに至るも依然として國民の子弟にして將校下士も亦社會の一員なり。必任義務兵役の制を採用する國にして軍隊獨り國民の籍を脱し社會の外に放擲せらるゝは未だ曾て耳にせざる所なりとす。國民は須らく眞に醒めざるべからざるなり。

回顧すれば日清の役三國于渉突如として起り戰勝の結果我が領土に歸すべかりし遼

東の野は空しく之を放棄せざるべからざるに至り三國反て其の利權を擴張して我が還附せる地を收む。是に於てか我が國民の憤慨其の極に達せるも如何ともする能はず。爾來十年沈鬱せる我が國民の正氣は露國の横暴に依りて發し國家の運命を賭せる日露戰爭に際し忽然として其の光彩を放ち人心大に激憤し愛國の心奮起し萎靡せんとせる國民の元氣爲に作興し勇豪剛毅忠誠堅忍は怯懦怠慢驕奢私慾に克ち沈衰せんとせる團結協力と熱烈なる愛國の精神とは共に蘇生し神州正大の氣は旭と共に極東日出の邊に灼然として昇り遂に乾坤を掩ふの概あらしめたり。而して平靜の日其の光り明滅の間に伏し依然として存するも之をして散逸沈衰に委せしめば何を以てか能く事の起るに當り其の光彩を放たしむることを得んや。是れ國民の一日も其の砥礪を忽にすべからざる所以なりとす。

徳川幕府二百餘年の夢破れて寛永六年六月三日米艦四隻の下田港に其の姿を現はすや、我が邦の上下色を失ひ幕府は日光門主芝増上寺日枝神社神田明神等へ世上靜謐の

禱祈を命じ人心轉た安からず。是に於てか開港鎖國の議論喧しく此の國步艱難の時に當り神風の起るべきを頼みて盛んに攘夷の説を主張したる如きは誠に笑ふに堪へたり。

明治天皇の御製

弓矢もて神の治めしくにひとは

ことなき世にも心ゆるぶな

國民の至誠天に通ずるにあらざれば神護の風は吹かざることを忘るべからず。

凡そ國家の隆替存亡は東西古今其の軌を一にせざるはなし。故に今羅馬の興亡を述べて以て我が鑑となさん。

二。羅馬の勃興

戰より興り戰の爲に其の隆盛を極むるに至れる羅馬は國民皆兵にして恰も常設の兵營の如き觀を有せり。住民の渴望する所は併呑統轄に在りて平時と戰時とを論せず常

に軍人たるの性格を備へたること尙我が建國の初の如し。

國の政治機關は軍の機關と同じくして市の諸制度は完備せる軍制の風を帯びたり。故に一朝出師の要ある時は急激の變遷なくして平和の状態より戰時の状態に轉し社會の機關も政治の機關も之が影響を受くることなし。詳言すれば國家總動員の準備常に安備しあるが故に極めて容易に戰時の状態に轉ずることを得るなり。之を一層具體的に評すれば、政治及び社會百般の施設は悉く之を國家總動員の場合を顧慮して戰時を基礎となせるの觀あり。故に有事の日に於て公民は公會所を去りて隊に就きコンシユルは元老院を出で、軍に従ひ軍は市の肖像となりて常に其の法律を守り其命令を遵するの覺悟を以て敢て依違することなし。軍を代表する大將は羅馬政府即ち國家を代表する元老院に對して無條件に服従せざるべからず。而して此の無條件の服従中に羅馬人の軍紀の至大至美なる大本を存するなり。

羅馬人の民事及び軍事上の節義の基礎を爲せるは實に此の無條件の服従なりとす。

公會所に在りては提出の法案を自由に討議し且自ら公吏を推舉する資格ある公民も高等有司の行爲に對して否認權を握れるトリボンも一たび軍隊に列するや、直に一兵士に變じ軍律を守り専ら指揮官の指令に服従するの意思あるのみ隨て服従は羅馬人至高の法律にして命令如何に服酷なるも人皆猶豫なく異議なく不平なく直に之を遵奉せり。故に不逞の徒を慍伏せしむる爲め往々苛酷なる例を示せり。即ち羅馬コルシユルオステイリユスマンシニユスを遣はしてニユマンヌ國を討たしむ。マンシニユス之を夷げて後和を講ず元老院其の條約を裁可せずして大將マンシニユスの其の命に背きしを咎め令して之を敵に交付す敵肯て受けず。マンシニユス即ち裸體面縛の儘羅馬軍の外營に在りて命を待つこと終日なりしと云ふが如き是なり。

又命令なくして戦ひ敵に勝つも罪科を免れず。即ちコンシユルフアピユスリュテイリヤニユス令に背きてサンニオム人と戦ひ大に之に勝つと雖ダイクトウルバピリユスキユルソル令して之を斬らしむ。是に於て市民及び元老院共に百方哀を請ひてキユル

ソルの意漸く解け此の名譽ある罪人は辛うじて其の罪を免かるゝを得たり。

コンシユルマンリユストルクワテエス令を下して單身敵と闘ふことを禁ず。其の子ラシオム敵の一騎兵に挑まれ闘ひて之を殺すや、マンリユス先づ其の勇を賞し而して後其の背きしを咎め其の面前に於て之を斬らしめたり。伊太利獨立戦争の際カンパニ一軍の一隊四千の兵命を受けずしてレシオム城を陥れ劫掠を恣にす。元老院即ち令して此の一隊の兵を羅馬に送りて之を嚴刑に處すること日に五十人づゝ而して之を哀悼することを禁ぜり。

軍紀は實に眞の服従に依りて振作するものにして斯の如く羅馬兵が上長に盲従するの結果私利を捨て己れを虚しうするの習慣を生じ之と同時に將は其の部下を信ずること極めて深きに至れり。シピオンラフリケン、カルタジユを討伐する爲め發するに臨み謂つて曰く、此處に在る兵衆吾が一令を下さば彼の高樓に登りて倒に墜落することすら敢て辭する者なしと。斯の如くなるにあらざれば軍の精銳期すべからず。是れ事

に臨んで同心協力を缺くことあり。之が爲其の鋭鋒の鈍るは免れざる所なればなり。

我が軍隊内務書は其の綱領の冒頭に斯の趣旨を明かにす。云く、

兵營は苦樂を共にし生死を同じうする軍人の家庭にして其の起居の間に於て軍紀に慣熟せしめ軍人精神を鍛鍊せしむるを以て主要なる目的とす。

軍人克く其の精神を鍛鍊す故に身心を君國に獻げ職分の存する所水火且つ辭せず義を重んじ節を尙び恥を知り名を惜み死生の間に従容したり。此の精神や我が國民の世々砥礪せし所の精粹にして國運の隆替戦争の勝敗一に其の消長に繋るものとす是を以て上官は演習勤務等の際は勿論坐臥寢食の際に於ても細心注意し部下をして其の鍛鍊に餘念なからしむべし。

軍紀は軍隊成立の大本なり。故に軍隊は必ず常に軍紀の振作を要す。將校と下士卒とを問はず時と所とを論ぜず。上官の命令に服従し法規を恪守し熱誠以て軍務に努力す。之を軍紀振作の實證とす。

服従は軍紀を維持するの要道たり。上官と部下との間に於て絶対に之を勵行し慣習遂に其の性を成すに至らしむるを要す。其の他軍人一般に其の階級及び新古の順序に従ひ服従の道を守り恭謙柔順以て全軍の秩序をして整然たらしめざるべからず蓋し服従は下級者の忠實なる義務心と崇高なる徳義心とに依り軍紀の必要を覺知したる觀念に基き上官の正當なる命令周到なる監督及び其の感化力と相待て能く其の目的を達し衷心より出で、形體に現はれ遂に彈丸雨飛の間に於て甘んじて身命を上官に致し一意其の指揮に従ふに至るものとす。外形の服従は此の際何等の價値なきことに留意し衷心誠實に之を行はしむることに付ては須臾も懈ることあるべからず。而して其の最良なる方法は上官先づ自ら諸法則を遵奉し禮儀を正しくし服従の道を守り以て模範を垂るゝにあることを忘るべからず。

見よ前記羅馬人か大將となりて罪を問はるゝや衷心より之に服して敢て不平なく面縛して外營に命をつ待こと終日なるが如き或は軍律を犯したる其の子を斬らしめて其

の罪を正し或は令に背きて敵に勝ち斬罪に處するの宣告を受けて直に之に服し毫も争はざるが如きは皆上長の軍紀を重んずるの精神を表明するものにして下に對しては即ち自ら服従の道を守り軍紀を重んじて以て模範を垂ることなる故に其の精神は上下を通じて一貫し遂に能く國民の慣習となり性格化するに至らしめたる所以なりとす。

職分の存する所水火を辭せず。上長の指令する所堅城熱池も敢て意とせず。義を重んじ節を尙び恥を知り名を惜み死生の間に従容するが如きは今や人にて單に軍紀服従を形容するが如き感を以て視ること多きも此の精神は實に我が國民の世々砥礪せし所の精粹にして之れあるが爲に、國威を墜さず之れあるが爲に國光八表に耀やき之れあるが爲に皇統無躬にして國家の萬歳を有する所以なりとす。豈管に軍隊將卒に於て必要缺くべからざるのみならんや。

羅馬兵が己れを虚しうして紀律を重んぜし證據歴々として見るべし。コンシユルマルキユスコリエス一軍に將として熟菓累累たる林檎樹下に宿し翌日陣を抜き去るに

及び一粟も失せざりしなり。又ハンニバル入寇の時伊太利全國窮乏甚しく國庫幾んど虚し羅馬兵嘗て給料を受けず金錢なきは勿論着るに衣なく食するに殆んど糧なし。而かも耗散の地に於て強敵に對し力戦久しきに及んで毫も屈せざりしを見る。而して將たるものも亦清廉克己躬を以て犠牲に供したる例乏しからず。彼のレギユリユスが國の爲に身を捨て、再びカルタージの縛に就きたるが如きビユリユスデシユスが軍氣沮喪せるを見て我が頭を軍神に獻すべきことを祭司に命じて單身敵軍に突入し奮戦して仆れしが如きレギユリユスカデモランの戦に身を捨て、別軍の將バヒエスに我軍の在るを知らしめ因て以て兩軍の覆滅を救ひしが如き等即ち是なり。

羅馬は連戦連敗の時形勢最も非なるに當りて絶えて失望することなかりき。即ち其の未だ幼稚なる頃ゴール人に侵されて覆滅旦夕に逼りしことあり。ヴェーと于戈を交ゆること十年傷痍未だ癒えざるに此の慄悍なる強胡とアリヤの野に戦ひ大に敗れ全軍殆んど殲く三日を経てゴール人進みて羅馬市に入り其の首城を圍む。羅馬人固守する

こと七月の久しきに及んで遂に降らず之が爲ゴール人急に圍を解いて去る。然れども羅馬人は永く此の難を記して忘れず後日ゴール人入寇する毎に元老院は國家の危急を宣告して苟も男子たるものは悉く于戈を執りて起つべきことを命じ國民常に擧つて困難に當れり。

其の後年を経ること百五十年ハンニバル西班牙を横ぎりヒレニ山を越えてゴールを略しアルプスの天嶮を踏破して伊太利の野に出づ羅馬軍之を迎へてセン河上に戦ひ大敗す。ハンニバル乃ち兵を進めてトレビオ河上トラシメ湖上及びカンヌに戦ひ羅馬の三軍を粉粹す。羅馬の壯丁之が爲に殲く敵直に城門に逼る國家の危きこと今や累卵の如し。

然れども元老院の如きは牢乎として怖れず危難逼るに従ひ愈々剛毅に愈々活潑に事を處し政治上の怨恨は總て之を忘れ少年老夫奴隸罪人を擧げて。軍隊を編成しカンヌに敗れて歸りし殘兵此はの新軍の殷鑑として之を處罰し給料を褫奪して遠くシミール

に放ちて戦に臨ましめず以て大に新軍の士氣を鼓舞し是夜甲冑を製作し老幼婦女皆勞役に就く元老院令を下して死者の忌服は其期を半減し又焦眉の急に際して尙綽々として餘裕あることを示さんが爲凡そ公けの祭祀儀式は例に依りて執行すべき事を命ず居ること數日ハンニバル使を遣はして捕虜の交換を議す。然れども元老院は、一百年以前エピールの王に與へじと同一に倨傲の答を與ふ。曰く羅馬國は外人一人たりとも伊太利の地に留まる間は敢て談判に應ぜずと何ぞ其の決心の牢乎たる斯の如くなるや。蓋し國民にして其の國家を重んずること深厚なる時は一人を残さざるに至るまで敵と戦ひ國家と其の運命を共にせんと欲するの外信念外他念なきが故に能く斯の如くなるを得せしめたるものとす。

是れ之を國民の精神國家の精粹と謂ふべきなり是に於て戦再び開かれ其の激烈なること前に倍す。唯政府の強硬と軍隊の愛國心と將帥の力戦とに依り羅馬遂に勢を挽回す。是れハンニバルの軍は心次第に加ふるに懸軍外地に在ること久しく惰氣自ら其の

間に生じて復た初めの勢を有せざればなり。之が爲ハンニバル遂に破れて猶ほ伊太利に留まる羅馬則ちピユブリユスシピオンを遣はして直に敵の本國を衝きザーマに戦ひて大に敵を破り遂にカルタジューを服す其の後五十年を経てピユブリユスの姪シピオンエミリエン其の城地を夷げて之を滅せり。

凡そ戦は攻勢に因らざれば勝を全うする能はざるなり。若し羅馬にして防守に甘んじ進んで敵の本國を攻撃することなかりせば必らずやハンニバル徐ろに再擧を畫し終に其の征服する所となりたるは疑ふべからざる所なり。故に國防に供するの軍は唯だ其領土を守るの兵力を以て足れりと爲すにあらず。必ずや進んで敵を攻撃し依て以て敵の野戦軍を撃破し再び我と對抗する能はざらしむるの威力を備ふるにあらずんば國防の目的を全うする能はざるなり。國家の興隆に伴ひ國家の武裝を完全にし強大なる武力を準備すること東西古今其の軌を一にするは蓋し之が爲なり。然るに世人之を解せずして武力を視ること野心の藏庫の如くなるが故に國家の強大を致すに於て必要缺

くべからざる武力を以て無用有害の如く考ふるは誤れるの甚たしきものとす。

今假りに日清の役我にして清國の暴狀を默過し或は日露の役に於て露國の暴戾を甘んじ唯だ彼れの來り寇するを待ちたりとせば彼は益々野暴を大にし島帝國與みし易しと爲して遂に兵を以て本洲に臨むは必然の勢なるのみならず。我が國土は到る所焦土と化し去るの不幸を免れざりしを思はざるべからず。彼の歐洲戦争の結果を見よ。市街は焦土と化し耕地は草原となり山稜丘岳は夷けて不毛の野と爲りたるもの比々皆然らざるはなし。鳥の鳴く所大なる市街も廣き村落も全く其の跡を止めざるの慘狀殆んど想像の及ばざる所なり。然るに唯戰の慘を思ふに止り其の斯の如きに至らしめたるに鑑みて我が國の去來を熟慮する所なかるべからざるなり。

斯の如くして羅馬は日に其の勢を増して勃興し當時人の知りたる世界は擧げて羅馬の勢力範圍に屬したりと雖其の軍隊に奴隸の釋放せられたる者數十年前外國より押送せられたる捕虜の苗裔等の傭兵を混ざるに至りシゼルヰキユス王の遺訓終に廢れて國

國民皆兵の實を失ひ軍隊の紀律次第に弛廢すると同時に國民も亦驕奢に耽り復た國家興隆の初を思はず國歩艱難なりし時を忘れ其の愛心國の消亡するに及んで羅馬帝國は塵土に塗れ夷狄の手裡に委ぬるに至れり豈に鑑みざるべけんや。

奢侈の國家社會に及ぼす弊害は實に恐るべしと爲す。今羅馬の興亡を叙するの終に於て少しく其習俗を記し以て吾人の資となさん。

羅馬人の衣服中最も著しきものはトガと稱する禮服とす。即ち純白なる軟毛を以て織り其狀半圓形に似たり初は之を狭く疊み腕に掛けたるも後には廣く之を垂れ胸部及び左腕を被ふ後世に至りては外出の際トガを用ひず外套を着用しトガは禮裝たり又貴人は左手の第四指に指環を穿つ其形大にして姓名を彫刻す。多くは之に大金を費すを例とせり。

婦人の服裝は上下三種より成り貴女の正裝は下着に短袖と帶とを附加し其裾には長き縁飾を垂下し足を覆ふ、ハルラと稱する外套は外出の時之を用ひ其の色概ね藍色に

して金色の星を散點す衣服の色は最も燦爛たるを貴ぶが故に婦人禮裝して集會する時は千紫萬紅人目に映射し頗る美觀を呈す。毛髮には薔薇の花環を戴き金製の針を以て之を緊束し頸及び腕は眞珠或は黄金を以て裝飾し一人萬金を費すを例とす。

古代の羅馬人は麩包及び野菜を食したるも四方を征略するに及んで漸く富榮を加へ上下皆奢侈に流れ羅馬儉素の風習地を掃ふに至れり。羅馬人は一日三食し一日中の主饌は晚餐にして好んで葡萄酒を飲み而して其の飽食すること驚くべく佳肴の種類多きは今日想像の及ばざる所たり。蓋し羅馬人は驕奢の結果遂に飽食するを以て人生の最大目的なりと爲すに至れり。多く獸肉を攝るも魚介鳥類を嗜み孔雀の如きは其も最も喜ぶ所なり恐くは之も亦驕奢を競ふ結果なるべし。

宴席に於ける飲料は殆んど葡萄酒に限られつゝアレナス産の酒は有名なる者にして鮮明なる琥珀色なり。又葡萄酒に蜂蜜を混和し或は香料を投じて温めたる者も之を用ふ而して其の平常より察すれば料理の珍を極め贅を盡せるは多言を要せずして明かな

りとす。

羅馬人は微温浴と蒸汽浴の法を設け往々一日七八度も入浴するものあり。帝政時代に至りては浴法最も奢侈に流れ華麗なる浴場を設けたり。

紀元七十六年ベシユピアス山噴火の際熱灰焼石の下覆没したるポンプイ府の發掘せられたる景況に依れば家屋内の重要な室は第一階に在り廊下には其の兩側に美麗なる彫像を排置し玄關は象牙、鼈甲、黄金を立て裝飾し闕は大理石を以て飾り喜迎の文字を表示す次に中央接待室ありて祖先の肖像を排置し又火爐を備へて家内の守護神を祭る其の奥に客房あり床には概して彩色したる大理石若くは玻璃を以て飾り壁には彫刻或は彩畫を施す天井には彩色を加へ窓の周圍には雲母石若くは玻璃を鏤彫す屋上に美麗なる庭園を設く而して机卓は往々紫色又は金色を施せる象牙を以て作れる者あり。

此等は素より上流富豪の住宅なるべしと雖如何に驕奢を極めたるやを窺ひ知るべし。

史上貴族と平和との軋轢及び貧富兩者の争鬪を傳ふること甚だ多く其の狀恰も我が邦現在の社會に似たるもの尠からず。是に於てか益々之を以て鑑例と爲すの必要あるを感ずること痛切なりと謂ふべし。

第十七 春の情緒と秋の感興

一、春の情緒

冬の寒さに堪へ兼ては春の暖を欲し花の色を思ふは是れ人情の常なり。冬の荒寥たるに引きかへて春の舒暢は何となく人の心を浮き立たしめ厚衣を脱して袷を被る頃となれば人争うて野邊に彷徨ひ空の晴れを喜び若葉の露を玉露とも見て嬉しかり早く花の咲きそむる時の到らんことを樂しむ。

水と空何れにふかし春の色

水の青き空の蒼き皆春の色と化し何れにふかしとも思はれず若き人は此の春の色に

誘はれて粧ひを凝し老いたる人も其の老を忘れ若草の伸び行く景色にうかされて梅の香に酔ふ。

庭の梅一輪咲て天下春

實に梅花の一輪は一陽來復を報して天下正に春となる青春の人の樂しきは恰も此の春の情に似たり。

足利義政驕奢を極め夫人と共に花頂山に花を見公卿將士悉く扈從し衣服調度の類華美を極めて黄金を以て箸を作りたりと云ふ。次で又大原野に花見を爲し遊興を盡し華麗人の目を奪ふ。義政花下に連歌會をなし發句を作りて曰く、

咲き満ちて花より外に色もなし

花の咲き満ちたるは是れ將に凋落の初なりとす。足利氏の全盛は誠に此の時に在りて其の衰運も亦此の時に萌したるは疑ふべからざるが如し。故に春の花は其の未だ爛熳たるに到らざる時を以て賞すべし、落花紛々たるに至りては寧ろ悲哀の情を増して

嬉しく樂しきものにあらず。故に寒を凌ぎて東風にほころぶ梅の時を以て眞に春の情を得たりと爲すべまか。桃櫻相次で其の艶麗を競ふに至りては春の色香濃に過ぎて飛花自から感傷を招くは其の免れざる所なりとす。

雪にも梅の冬籠り今は春べに匂ひきて吹けども梅の風枝を鳴らさぬ御代なりとは梅の百花に先つて開くの苦節を以て太平の御代を謳歌したる句なり鳴く鶯の春の曲も此の梅が枝に奏するを初と爲す。

櫻は短命なるも其の色淡く其の散り際の潔は之に及ぶものなし。故に我が邦にては古より此の花を感賞す年々歳々其の節を變ぜずして燦爛たるに至りては恰も武士の面目に似たるを以て殊に然りとす。隨て九重に咲けども花の八重櫻幾代の春を重ねらんと之を賞して己まざるなり。

春の景色は花を主とするが故に勢ひ感傷に情に陥り易し。殊に櫻の散り際に於ては謠曲西行櫻の句中にある如く花檻前に笑んで聲いまだ聞かず鳥林下に鳴いて涙盡きが

たし夫れ朝に落花を踏んで相伴つて出づ。夕には飛鳥に随つて一時に歸るの情動き易し買至春思を賦して曰く

草色青々柳色黄

桃花歷亂李花香

春風不爲吹愁去

春日偏能惹恨長

愁人の眼より見れば花柳の妍を争ひ風日の交麗なる適々以て傷心するに足らざるはなし。此の詩即ち此の意を描出す。草柳の色を生じ桃李の芬芳なる皆是れ春風の吹き來りて然らしむるもの面かも此の風は我が愁を吹き去ること能はず。之が爲遅々たる春日反て偏に恨を惹くの長さを覺ゆるなり。何ぞ其の流麗にして宛轉なるや。然れども春の錦の燦爛たるにあこがるゝ時は春宵一刻其の價實に千金晝より夜にかけて家路を忘れ花の夜影を月下に眺むる人もあるなり。斯るが故に花も月も春の眺めも其の人の心次第境遇の如何に依りて大なる相違あり。之を樂しむ者を幸となすべきや、之を悲しむ者を不幸と爲すべきか。

獨有宦遊人

偏驚物候新

雲霞出海曙

梅柳度江春

淑氣催黃鳥

晴光轉綠蘋

忽聞歌古調

歸思欲沾巾

雲霞海を出で曙光たちまち開け梅柳江を渡りて次第に春色を生ず。淑氣和融して黃鳥の睨皖たるを催し晴光澹沲として綠蘋の溶漾たるに轉す。正に是れ早春の物候一として游望の目を一新せざるものなし。而して此の風光に對して偏に心を驚かすものは唯獨り官遊の人即ち我と君が如きものあるのみ。是を以て忽ち君の古調を歌ふを聞きては歸思愈々動きて自ら禁する能はず爲めに暗涙の巾を沾さんと欲するに到れるなり此の如く春日の物候新らなるを望み。古調反て歸思を動かして悲哀の情を生ず。而かも是れ官遊の人妄に其の欲するに任せて歸るを許さざるなり。豈に樂を以て之を慰むることを得んや。之を樂む能はざるの人は果して幸か不幸か。

苔徑臨江竹

茅檐覆地花

別來類甲子

歸到忽春華　　倚杖看孤石　　傾壺就淺沙
遠鷗浮水靜　　輕燕受風斜　　世路雖多梗
吾生亦有涯　　此身醒復醉　　乘興即爲家

是れ杜甫の春日成都に歸るの賦なり。廣徳二年の春嚴武再び蜀を鎮して成都の亂將に平がんとす。故に杜も亦艸堂に歸り再び之に依る。

臨江の修簡綠に苔徑に蔭し覆地の落花紅を茅檐に點ず。是れ即ち所謂浣花艸堂なり曾て永く此所に居らんことを願うて兵塵の及ぶ所勢ひ難を避けざるを得ずして終に別れて梓閬の間に飄泊す。以來甲子頻に換り已に二年を徒費して今漸く歸り到れば忽ち復た春光の爛熳たるに遭ふ。艸堂の景亂を経しと雖依然として恙なし。乃ち杖に倚つて孤石の嶄巖たるを看酒壺を傾けて淺沙の明淨なるに就けば遠鷗は水に浮んで心靜かにして驚かず。輕燕は風を受けて態斜にして人に近づき舊主人の歸來を知るものに似たり。今蜀郡の亂漸く平らぐと雖世路の梗塞猶杜陵の故園に歸つて優游年を送らんこ

とは固より望むべきにあらず。然れども吾が生亦かぎりあり若し梗塞全く除くの日を待たば恐くは限りなからんのみ故に今蜀郡略々平ぎたるを幸とし他郷と雖聊か自ら安んじ醒醉興を遣り吾が意の適する所に隨うて家を爲さんと欲すと。甚だ樂しむものゝ如くたして其の意反て沈痛春光故園を思ふの情切なるに従ひ益々其の境遇を悲しむ。是れ醒め復た酔うて以て自ら慰むる所以なりとす。而して醒醉興を遣り自ら慰め得るは是れ杜の幸にして之をしも爲すこと能はずとせば果して如何。斯の如きの人に對しては春光は愈々其の心を感傷するに適ぎざるなり。又何の興が之れあらんや。

花の咲き亂れたるに浮かれ其の艶を喜ぶ者最れ多くは下流の徒のみ。否らざれば唯兒童のみなるべし。何となれば少しく心ある者は忽ち來るべき落花狼籍の態を連想して情の動くを禁ずる能はざればなり。故に之を樂しむ固より不可なるにあらざるも寧ろ飛花落葉を躍んで心を澄し行に勵むの賢なるに如かざるなり。殊に青春の人に在りて時は去つて再び來らざるが故に實を結ぶの時を慮り。己れの培養に力を致すを要す

光景宛として流水の如く人生恰も去舟に似たり。豈に一日も悠々たることを得んや。

明の萬節か幽居の詞に云く數里の莓苔一逕斜なり洞門深き所人家あり。東風昨夜知る多少吹き落す庭前滿樹の花と悲惨恨事何物か之に加ふべきものあらんや。

明治三十七年三月予は出征の爲所屬聯隊と共に鐵道に依り輸送せられて廣島に到る途中山陽鐵道沿線に於て菜の花の黄色盛りなるを目撃し初めて多忙より醒めたるが如き感を抱けり。

乃ち二月五日最先出征團隊に動員令を下されてより以來日夜劇務に逐はれて水の色も山の景色も畑の青くなり行く模様なども殆んど無關心に經過し毫も眼に映ぜざりしに偶々途中黄染の菜の花を認め氣候の暖くなりたる事に氣付き一時に夢より醒めたるが如き心持し何となく心の暢びのびしたるを覺えたり。然に三月下旬鎮南浦に上陸し日露兩國の戦争の運命を決すべき第一戦たる鴨綠江畔の戦を豫期するが故に日夜韓國の悪路を踏破して早く鴨綠江岸に到達せんことにのみ腐心し。風光花樹に思を及ぼすの

違なく四月三十日の砲撃開始より三十八年三月奉天會戦の終了する迄花の色香も翠緑の趣も全く之を忘却せり。然るに三月中旬鐵嶽東南方范河左岸の地に轉宿するに當り山麓に高さ二尺許りの桃の木の一株を發見す。花二三輪哀れに咲きたるものなるも忽然として荒寥たる滿洲の野に内地の花時を想ひ起せり。蓋し予の戦地に於て花を見花を想ひたるは實に此の時を初めとし又此の時を終りと爲す。

滿洲の野は浩蕩として兀突たる秃山其の間に交はり風光の賞すべきものなきも江河滔々として水の清きもの尠からず。清河范河等の如き即ち是なり故に之を想ひ張若虛の詞を學んば吾をして言はしめば次の如しとす。

春江の水は天に連つて平に江上の月は水の動くに随つて明かなり。惠風の吹く所細波颯々として萬里の外に來往するが故に春江にして月の明かならざるはなきなり。江天一色眞に纖塵あるなく皎々たる月は正に冲天に懸る。之を見るの人は年を経て空しきも月は窮りなく春望を保つ一片の白雲は天の一角に起り悠々として去る鴻雁も亦月

を掠めて其の姿を没す。夜沈々たるに及んで月は斜めに傾き遂に烟霧に隠れ滿江楊柳の影轉た暗し悵悵何ぞ限りあらんや。況んや征旅の人に於てをや。

乃木將軍第三軍を率ゐて旅順を圍まんとして先づ金州半島要衝の金州城を占領す。乃ち賦して曰く

山川草木轉荒涼

十里風腥新戰場

征馬不_レ前人不_レ語

金州城外立_三斜陽_一

遼東の野既に荒涼たり加ふるに金州城外の山川も草木も戰の爲轉た荒涼を増す。彌望十里風腥く吹き來る所是れ即ち新戰場にして光景悽槍たり激戰數日幾多の死傷を生じ軍は疲れ征馬も亦勞に惱み今や進むことを得ず是に於てか將軍無限の感慨に打たれて一語なく空しく金州城外に斜陽に立つて悵然たりと謂ふの意なり。

兒島高德の櫻樹に題したる十字の句は人の能く知る所なり。

天莫_レ空_三句踐_一

時非_レ無_三范蠡_一

後醍醐天皇の笠置に駐輦し給ふや、高德備前に在りて義兵を擧ぐ。然るに未だ事の成らざるに先ち笠置陥り楠自害せりとの風聞を得、大に力を失ふ。然るに賊徒天皇を隱岐の國に遷し奉ると聞きて一族を集め諭して曰く。志士仁人は生を求めて以て仁を害することなし。身を殺して以て仁を爲すことあり、昔、衛の懿公北狄の爲に殺さる其臣に弘演と云ふ者あり。之を見るに忍びず、自ら腹を掻き切つて懿公の肝を己の胸中に收め先君の恩を死後に報いて斃れたり。義を見てぜざるは勇なきなり今や天皇の遷幸に會す。途に要して君を奪ひ奉り大軍を起して忠を勵み縱令屍を戰場に曝すも名を子孫に傳ふべしと。一族皆之を賛す。即ち路次の難嶮に待て其の隙を窺ふべしと。備前と播磨との境にある船坂山の嶺に隱伏せるも臨幸遲きを以て人を走らしめて情況を探る。然るに警固の武士山陽道を経ずして播磨の今宿より山陰道に進み入りて遷幸し奉りたるが故に高德の計畫齟齬す。是に於て美作の杉坂最も可なるべしとて三石の山より道なき山の雪を凌ぎて杉坂に到る到れば即ち鳳輦既に院の庄に入らせ給ふ。高

徳遺憾限りなく其の所存なりとも上聞に達せんと欲し單身微服潜行して隙を窺ふと雖能はず、即ち夜窃かに天皇の御宿の庭に入り大なる櫻の木あるを見之を削りて十字の一句を記す御警固の士翌朝之を認め讀む能はずして上聞に達す。天皇詩意を悟り給ひ龍顔殊に麗はしく御快よく笑ませ給へたりと云ふ。

高德櫻樹に書するの圖に題するの詩二あり。一は齊藤一徳の踏み破る。千山萬岳の煙にして人の能く吟する所なるも菅茶山の詩人多く之を知らず故に今之を左に掲げん。

馬に騎りては賊を撃ち馬を下りては檄す

三郎の奇才は世に敵するものなし

夜虎豹を穿つて行在に達す

衛騎眠り熟して柝聲寂たり

慨然として樹を白けて幽憤を寫す

行雲動かす天も亦忿る

中興誰か旌す事を首むるの功

一門猶ほ懐く日を貫くの忠

金輿再び南して乾坤變ず

五字櫻花千古の恨

高德備後三郎と稱す。備前に起り義を唱へ馬に乗りては賊を撃ち馬を下りては檄を飛ばして士氣を振作す。其の才の奇なる世に比すべきものなし。變輿を奪はんとして目的を達せざるや、夜に乗じて虎豹の如き賊中に分け入り行在所に達す。夜は沈々として警護の賊兵眠り正に熟し夜を警しむる柝聲も寂として音なし。高德即ち櫻樹を削り十字の詩を書して胸中の憤を寫す。偶々此の夜墨の如く暗く空行く雲も停りて動かず天も亦怒りて高德の誠忠に感ずるものの如く天皇隱岐より逃れ出で給ひ中興の業成るに及びては一人として高德の第一に勤王の事を始めたる功を旌表する者なかりしも猶其の一族は日を貫ぬかん許りの忠義を懐き居たり唯惜むべきは天皇再び南に巡狩し

給ひ世の形勢一變し天皇は空しく吉野の行宮に崩御し給ふに及んでは彼の櫻樹に題せし一句は徒に千古の恨を遺す種となれりと云ふ意なり。然れども櫻のあらん限りは高德の忠を傳へて不朽なるべく櫻は我が邦に於て大和魂と離るべからざるものとなれり。

武夫の大和心を人とはじ

朝日に匂ふ山ざくら花

二、秋の感興

秋は變化の最も多き季節にして風趣に富む。秋風の立つ頃となれば人先づ殘暑の苦を忘れ竹の緑も常盤の色も何となく生々として輕風俗塵を拂ふの感あり。殊に星月澄み渡り流水の涓々たる間に其の玲瓏たる影を投じて激澁の情を増し興の盡くるを覺へざらしむ。

初秋や立つて先つ見る庭の竹

きのふには似て似ぬ空や天の河

離れ家は戸さすも早し秋の風

涼風吹いて夜露甘きが故に草花菊鳳仙花萩尾花の類競うて咲き亂れ愈々風趣を添へて秋の暮るゝを惜むの態あり。隨て古來詩歌の多きは此の時を以て超えたりと爲す。然れども次第に冬の季節迫るが故に感傷の情を増すに至り深更孤燈の下轉た愁思に堪へざらしむるものなくんばあらざるなり。故に風物蕭々として秋に變ずの句あり。

岑參顏眞卿を送るの詩あり。

顏眞卿監察御史を以て西域河隴の地を巡視す其の忠誠の氣耿々として千古を照す時正に涼秋九月一年中最も悲哉の時なり。此の時に當り長安の北遙かに蕭關を出で、道を塞外に取る北風栗烈として天山の草を吹斷す。其の勢の勁厲なるを知るべし。過客之に逢うて固より既に堪へず。況んや崑崙山南の月將に斜ならんとするに當り紫髯緑眼の胡人月に向つて得意の胡笳を吹き起す。誰か廻腸百結せざるものあらんや。今我れ

乃ら此の胡笳の怨聲を以て君が萬里の行を送らんとす是れを借りて以て無限離別の悲を表せんと欲すればなり（隴山は河隴の地真卿の將に赴かんとする處なり）秦山に登りて隴山の雲を望めば蒼茫として邊際なし君は直に萬里を辭せずして之に赴く邊城の裏夜々當に愁夢多かるべし時に於て乃ち彼の月に向ふの胡笳を聞く。復た當に情を爲し難きものあらん笳聲固より悲哀誰か之を聞くことを喜ぶものあらんや。然りと雖王事身に在り。君に望む所は能く難を辭せず險を憚らずして其の使命の大功を成し遂ぐるに在り。希くば悲笳の爲に勇氣を沮喪すること勿れ。我は寧ろ君の之を喜び聞かんことを望むと。秋色蕭々に對應して其の辭悲壯を極む而かも反て勇を鼓して王事に身を效さんことを勸むるに至りては尋常送別の辭にあらずして能く真卿の忠誠に照映すと謂ふべし。

龜田鵬齋江月を吟じて曰く

滿江明月滿天秋

一色江滿里流

半夜酒醒人不見

霜風蕭瑟荻蘆洲

江に滿つる明月の光と天に滿つる秋の氣とは爽快言はん方なく江水は天と同じく碧琅として萬里に流る誠に壯なりと謂ふべし。然れども夜半酒醒むる頃は行人絶えて霜の寒き風獨り寂しく荻蘆の洲を吹くあるのみ隨て秋光闇寂たるを免れざるなり。

杜甫秋興に托して其の思を述ぶ予甚だ之を喜び常に愛誦して措かざる所なり。

玉露既に零ち楓林凋落す。山峽の間肅氣森蕭として人に逼る江間の浪は湧きて風雲に接し塞上の陰森たる風雲は地に接して波浪に連る豈に悲壯ならずや。叢菊再び開くを見今や孤舟に艤して發せんと欲し猶事を以て淹留す。舟は此の地に繋ぐと雖心は寸時も未だ曾て故國に繋がずんばあらず。秋氣既に深うして到る所寒衣の備あり。我は即ち衣なく蕭然たる羈旅此の白帝城邊に日暮の砧聲を聞く情更に如何ぞや。

孤城砧斷へて日は虞淵に薄る萬里の孤臣首を京國に翹つ復た八表は黄昏し絶寨は慘澹たりと雖惟だ此の望闕の寸心南斗と其の芒色を共にするのみ猿鳴くこと三聲聞くも

の斷腸す況んや叢菊再び開いて猶ほ羈客となる如何でか涕泗を下さざらんや。嚴武節度使となり我れ往て之に依りしも事期せずして徒に虚度を爲す。唯孤舟一繫の心の徒に八月の乗槎に似たるのみ。眞に奉使に随伴せしにあらざるなり。京華に在りて朝に官する香爐の煙に薰染す何等の得意ぞ而して今は乃ち之に違背して徒に舟中に伏枕し惟だ城堞悲笳の隠々たるを聞く石上の月は己にして藤蘿を照らし己にして蘆荻に映じ而して没し而して日出づるなり。

千家の山郭（夔府の孤城）朝暉自ら冷靜なり曉光清朗にして我れ獨り江樓山翠の中に坐す日々此の如し我れ竟に歸るの期なきか。漁人の蘆花明月中に徜徉自適し家を携へて嘯歌するは羈栖の客の殆んど如かざる所にして燕も秋の清寒に遇ひ回翔して畏懼し終に辭歸するに至る漢の匡衡上疏して政治の得失を論じ擢でられて太夫となり累進して丞相に擧げらる我れ抗疏固より匡衡に譲らざるも一斥して復せず終に之が爲に京華を去る劉向數々封事を奏して用ひられざるも仍ほ顯榮に居り經書を典校す我れ意の

如くならずして天南に淹滞す。寧ろ深く愧ぢざるべけんや。獨り故人に如かざるのみにあらず。同學の少年は今皆要路に居り輕衣肥馬五陵の間に馳驅す。我れ何すれど江城に偃蹇して依然として此の寂寞を守るか。

身は僻遠の郷に在るも肯て君國の憂を整置せずして朝成の昏亂を擧げ又北は回紇を憂ひ西は吐蕃を患ふ故國平居の往事を追懷すれば洵に今昔の感に勝へざるものあり。

聞くならく長安謀國の臣譬へば奕碁の定算なきが如し。故に禍を百年の後に貽して其の悲に勝へず王侯の邸宅皆其の主を易ふ則ち竈下の厮養も倖進して新貴の位に居るなり。文武其の人にあらずして冠裳全く倒置し昔時と異なり。群小並び進んで新貴愈々繁く朝廷虚にして敵國驕る故に北には回紇の寇あり。西には吐蕃の敵あり。金鼓の聲震うて捷書未だ到らず遂に伊の威を貽す、抑々誰の咎ぞや吾れ正に秋江に飄泊して魚龍と共に蟄し朝局の日に非なるを傷み軍旅の益々急なるに驚く長安全盛の日を思へば豈に自失せざるを得んや。

慷慨悲憤秋光の寂寞に遇うて益々激越是に於て愁情慘を極むるもなき能はざるなり而して其の抱負豈に復た風雲月露の方の夢想する所ならんや。氣象雄偉にして宇宙を籠蓋するものと謂ふべし。

菅公の去年の今夜清涼に侍す。秋思の詩篇獨り斷腸とは是れ仲秋月明かなるの夜なるべく謙信の霜は軍營に満ちて秋氣清く數行の過雁月三更とは是れ晩秋の景なるべし梁川蛻巖琵琶湖に浮び詠じて曰く、湖北湖南暮色濃やかなり。篙を停め首を回らして孤松を問ふ。滄波兩岸秋風起る吹き送る叡山雲裏の鐘と孤松は即ち唐崎の松なり。

菊地溪琴仲秋月を賞するの詩に、君看よ金蓮銀燭の外滿江の月露は高人に屬すと、東坡赤壁の賦を作り夜便殿に召れて其の文才を嘉賞せられ金蓮銀燭を以て送られたるは最も光榮とする所なるも滿江の月露は高尚有心の人に屬し金蓮銀燭の及ばざるを喝破せるものとす。是れ敢て良夜月明の夜を空しうせず。舟遊の興如何と情緒そぞろに動く所以なり。

第十八 神機一轉の妙用

英雄時世を造るか、時世英雄を造るか、是れ人の疑を爲す所なるも予は斷じて英雄が時世を造るものと信じて疑はざるなり。天機常に存す。能く之を洞視して捕捉跳躍する者は是れ之を英雄俊傑と爲す、固より氣宇雄大膽力剛壯而かも人の視る能はざる所を觀破し神機一轉の妙あるにあらざれば不可なり。今日の英雄俊傑は昔時の如く單に國亂れて英傑を生ずるが如きの謂にあらざりて長安治平の時に當り機を潜むを觀破して之を捕へ其の實力を盡して次第に大を致し其の大志を遂げ其の理想を現實する者を謂ふ。故に大學者となるも可なり。大政事家となるも亦可なり。大實業家となり。大宗教家となるも又可なり。貧家に生れて刻苦精勵遂に其の志を成す是れ之を英雄傑士と爲す。

何を以て英雄時世を造ると爲すか。今試みに韓文公の龍雲を起し雲に乗るの論を引

用して先づ其の然る所以を説かん。

龍氣を嘘き雲を成す雲固より靈あるにあらず然るに龍此の氣に乗ずれば茫洋として玄間を窮め日月を薄うし光景を伏す。震電を感じ變化を神にす。下土を水し陵谷を汨す。雲も亦靈怪なる哉雲は龍の能く靈たらしむ所にして龍は雲の能く靈たらしむる所にあらざるなり。然るに龍雲を得ざれば以て其の靈を神にするなく其の憑依する所を失ふ。眞に異とせざるべからざるも其の憑依する所は乃ち其の自ら爲す所なりとす。易に曰く雲は龍に従ふ。既に龍と言へば雲之に従ふなりと。

以上の論に於て最も注意せざるべからざるは龍の外に雲あるにあらずして其の氣を吐いて自ら雲を成すの點にあり。既に自ら成す龍の外に豈に雲あらんや。然るに人多くは單に風雲に乗ずるを以て龍を視るが故に此の風雲恰も龍をして靈あらしむる如く觀せしむ。是れ時世英雄を造るの誤信を抱かしむる所以なり。而して龍の氣を吐いて雲を成さしむるもの人にありては實力なり、至誠なり度量なり、氣膽なり、忍耐なり

識見なり、濃情なり、純良なる精神なり、剛健なり、體力なり、之を是れ人の氣、人の靈と爲す。此の氣を吐き此の靈を動かす風を起し雲を成す何の難き事か之れあらん是を以て青年の世に立つや、自ら努めて以て其の素を養ひ自ら大に風雲を起し此の風雲に乗じて恰も龍の如くなるべし。徒に時世の來るを待ち或は時の非なるを嘆ずるは凡夫俗士の輩のみ寧ろ憐むに堪へたりと謂ふべし。

人生の行路固より平坦にあらず。殊に其の行旅の初に於ては青年の理想と相馳する所多く羈旅に馴れざる者に在りては蹉跎又決して少からざるなり。是を以て或は大望を抱いて失敗し或は撞着多き境遇の爲に身を誤り或は疾病の爲に妨げられ或は實際に當り破碎せらるゝ理想あり。或は水泡灰燼に歸する希望あり。或は寂寥を感じ或は落膽を生じ懊惱苦悶の襲來殆んど間斷なく殊に桃源を夢みたる青年の結婚は忽ちにして煩累苦悶を増し出でゝは意の如くならず、歸りては陰鬱慰むるに由なく志氣之が爲に沮喪し勇氣之が爲に挫折するは數の免れざる所にして寧ろ之を常態とす。是に於てか

神機一轉の要あり。煩悶苦惱を脱出して更に勇往奮闘の氣を起す能はざるものは則ち神機一轉の妙あるを知らざるなり。

亭々百尺の巨木は人以て偉と爲すも之をして斯の如くならしめたる盤根の功を思はざるべからず。即ち地中に在りて岩石を避け滋味を求めて曲折蜿蜒徐ろに深きに進み次第に大を致して枝幹を養ひ風雪に抗し巨幹一なるも無數大小の盤根は網の如くにして地盤を固め營々片時も止む時なし。

涓々たる細流の岩石を穿つて出づる既に點滴岩を貫くの功なくんばならず。而して盤根に遮さられ巨岩に妨げられ懸崖に激し而かも凹窪に停めらる然れども日々滾々々々綿々として遂に沼澤となり其の勢を蓄へて再び地を穿つて流出し沈々として養へ得たる勢は遂に滔々として大河巨江となり人は百年の功を思はずして徒に洋々たる雄勢と附隨の風光とを賞するに過ぎず。而して海に入るや滄波路を千里の外に通じ大船巨艦泛々として木葉の如きに至る。其の遅々たりしは勢を成さんが爲なりしなり。届し

たるにあらざりたるにあらざりしなり。

水の盤根に遮さられ懸崖に停めらるゝや、路を求めて方向を轉ずる是れ神機一轉の妙なり。凹窪に停められ勢を蓄ふるや路を開きて流出する。是れ神機一轉の妙なる所なり。故に青年は如何なる障礙に遭ふも屈せず。如何なる失敗を招くも驚かず苦悶も懊惱も皆是れ神機の一轉を必要とするを忘れず。其の妙用に依りて奮進勇闘を續けて遂に功を成すの覺悟なかるべからざるなり。彼の戦の狀を想見せよ。一軍必勝を期し力戦すと雖戦況意の如く發展せず非常の苦戦に陥ることあり。此の時に當り徒に戦を強行する時は將卒疲れて損失多きのみにして決して成功を獲る能はざるなり。故に斯の如き場合に於ては戦を中止し或は軍氣を新にし或は敵の弱點を觀破して攻撃の指向を轉じ或は銳を加へて勢を増し或は敵の不意に乗じて機先を制する等必らず。戦機一轉の方法に出でざるべからず彼の日露戦役の日本軍を視よ、又伊資利戦に於ける奈翁の統師を見よ。其の劣勢を以て常に勝を制したる所以のものは悉く此の轉機の妙用に

依らざるはなきなり。故に日本軍も亦奈翁も百戦して百勝を獲たる所以にして惜むらくは露軍も塙軍も之を知らず之を用ひざりしが故に常に失敗を重ねたる所以なりとす而して此の妙用を知る者は如何なる苦戦に陥るも失望落膽を招くことなく一瞬の間に神機を一轉して必勝の策に出で信じて之を斷行す。蓋し自ら必勝の路を造り必勝の機を生ぜしむるものにして其の來るを待つにあらざるなり。一青年あり高等學府を出で、社會に出づるや彼れ固く自ら信じて疑はざるも空拳にして志望の大を遂ぐる能はざるを覺悟し斷然身を下級に投じて巡查を志願し日夜刻苦して部長と爲り警部と爲り署長と爲り遂に郡長に進み單身無邪氣銳意其の職に精勵し縣の課長と爲り警察部長と爲り今尙其の奮闘を繼續す。而して人悉く其の將來を信じて疑はず此等は所謂其の實力を養ひ經驗を積み自ら其の運を拓き常に神機一轉の妙用に依り絶えず氣を新にして進む者にして青年の模範とすべきものとす。

一青年あり。相當の教育を受けて社會に出づるや知己親族の斡旋に依り某會社に職

を得たり。然れども彼れの發途既に斯の如く人の援助を恃み彼れ又奮闘の氣概なく隨て實力を増さず信用を得ず十年其の位地を同じうし常に其の不幸を歎じ不遇を啣ち遂に離職の悲境に陥りたり。蓋し此等は自ら風雲を起すの要を知らざるものにして固より言ふに足らざるも現今此の如き青年を見ること多きは誠に遺憾なりとす。

奈翁屢々死に頻して意を介せざるもの、如く忽ち氣を新にして勇戦奮闘を指導す。

彼のロヂの戦に於て一橋梁を突進せしむる際の如きは自ら軍旗を掲げて先頭に進み死屍累々彈丸雨飛の間に立つて平然たるのみならず。後將士の語る所に依れば彼れの士卒の間に交りて奮闘するの狀恰も兒童の無邪なる如くなりしと云ふは決して誇大の言にあらざるべし。即ち躬一軍の將帥として精銳撰抜の一隊の進む能はざるに當り馬を下り自ら軍旗を掲げて先頭に進むが如き又對岸に渡りたる後俄然敵砲兵の橋梁を射撃するものあるを見るや、忽ち之を粉碎し吳んと自ら砲の方向を轉じて之を覘ひ自ら砲手となりて發射したる如きは天真爛漫の無邪氣にらざれば能くし得ざる所にして恰も

童子の嬉々たるに似たるものありしは明かに想見し得べきことなりとす。要するに彼れ無邪氣にし陰影を顧みず常に赫耀たる旭日を望む是れ神機一轉の容易なりし所以なりとす。

勇奮一番せば如何なる困難にも打ち勝つことを得べしと雖人多くは先づ其の困難を思ふが故に勇氣を失ひ志氣挫折するに至る故に常に奈翁の言ひたる如く不能の文字は佛語の辭書中になしとの壯語を忘れず自ら信じて疑はず以て勇往の氣鋭を保たざるべからず。今青年富岳の山頂に達せんとし氣息奄々として高所に登りたりとせよ、青年の欲する所は山頂に在り此の際に於て千仞の谷を眺むるも何の益かあらん。益なきに止まらず之が爲に脚戦のき目眩暈を生ずるの害あり。而して山頂を望み山麓を顧み此所に至れる苦難を思ふ時は山頂の遙かなるは偶々失望落膽の因を爲すに至るも此等は山頂に達する爲何等の益なし。故に常に山頂を望んで銳意努力すべきのみ。是れ成功の捷路なり、若し夫れ疲れて苦痛を感せば休一息して氣を新にし更に再び進むべし富

岳の頂には黄金水あり。憩ふべき平坦地あり。萬峰を眼下に眺むるの偉觀あり。頂を望んで之を想ふ時は容易に氣を新にすることを得ん。

奈翁將校と爲り病痾に苦むや、屢々歸省してコルシカの故園に靜養せり。青年若し此の如き境遇に陥りたる場合には予は切に其の懐かしき家庭に歸りて愉快なる幼時を追想し當時親みたる山河森林沼湖に親まんことを勸む。何となれば親の家庭は吾人に取り最も愉快を與へ幼時の追想は言ふべからざる慰樂を感ぜしむるのみならず勃然として勇奮の氣を興し利する所極めて多ければなり。殊に田家僻諷の地自から都會輕浮の風なく親族故舊皆誠を盡して我を待ち我に接すべく隨て正を養ひ氣を新にするに最も適すべければなり。

予嘗て富士の裾野に滯留して演習に従事する間。登山に缺くべからざる強力を研究す。彼れ固より強健にして負荷を職とずるも其の最も重要なるは登山者の指導に在り故に彼れ登山に先ち必ず戒しむるに我より先に進むべからず我の爲す如くせざるべか

らざるを以てす。然れども血氣の青年は此の忠言を無視して先に進むを誇りと爲し之が爲常に苦き經驗を嘗めて初めて其の然る所以を了解す。要するに登山の秘訣は急かす初めより徐々に歩を運び而かも止まらずして其の進行を續くるにあり。僅かに一富岳の頂に到る一日の行に於てすら然り。況んや人の一生の行旅に於てをや。

失意落膽蹉跌に陥らば宜しく神機一轉して勇氣を鼓舞し元氣と恢復して再び奮闘を續くべし。見よ彼の關東の大震災に當り家を失ひ財を焼き親を失ひ子を失ひ眞に裸一貫となれる時神機一轉せるものは其の腕を扼し體を擦りて此腕あり。此體あり何ぞ屈するを要せん。唯奮闘あるのみと豪語して人生再度の戰に發途したるにあらずや。然るに薄志弱行の徒は之が爲に殆んど喪神して或は水に入り或は汽車に轢かれ或は毒を仰ぎ或は自ら絞りて無に歸し惜しき人生を消散せしめたるもの頗る多し。然れども裸一貫は人生發途の状態にして毫も悲むに足らず元來人の恃む所のものは其の財産家田にあらずして實に其の精神と體力なり。故に此の精神體力にして健全なる以上は世間

恐るべきものなく悲むべきものなきなり。而して厭世家は勇を缺き悲觀に傾き既往の苦心努力を啣つものなるも人生の努力は恨られたるものにあらずして其の生の續く限り之を中止すべからざるものなり。隨て失敗あるも尙平然として其の奮闘を持續すること恰も戰に於けると異なる所なし。戰の典則は敵陣に突入して成功せざれば至近の位置に踏み止り更に二撃三撃四撃を加へ其の目的を達する迄之を反復すべきを教ふ。是れ豈に獨り戰のみならんや。

満足する事を知らざれば常に失意の境遇を脱する能はざるべし。故に人は徒に其の慾望を誘ふが如き所に着目せずして已れより苦しき境遇に在る人の多きを察せざるべからず。不満は怨嗟を生じ怨嗟は其の精神を徒勞せしめ煩悶を増加するのみにして何等の益なきを銘心するを要す。羅馬人は其の初を忘れて國遂に滅びたり。青年は常に其の希望に輝き理想に躍りたる最初の愉快を忘れず常に勇躍の氣を回復して自ら勵ますべし。而して其の地位次第に高きに及んでは殊に當初の難戰苦闘したることを忘れ

ずして素朴純良に復歸し自ら戒しめて驕らず自ら勵まして勇往邁進の元氣を失はざることに意を用をべし。青年時代の雄大なる志望と高遠なる理想とを忘れざれば絶えず其の刺戟を受け常に其の鼓舞する所となりて不撓不屈の勇氣を維持することを得ん。

投げられて笑顔みせたる相撲かな

何たる好訓そや奮闘の青年須く此の度量なかるべからず。

第十九 四季の慰樂

人の慰となり樂となるもの頗る多し。然れども飲食は之を節せざれば身を害し一生を誤るに至るを以て慰樂の中に加ふべきものにあらず。富貴求めて之を得れば善を力め人を救ひ國家社會に貢獻するは是れ人生最大の樂にして其の心を慰むること頗る大なり。然れども望んで能ざる人あり。況んや青年の未だ志を得ざるものに於てをや。而して日々其の業に勵み其の分に應じて道を行ひ自ら慰め自ら樂しむは人の第一に精

進せざるべからざる所なるも其の勞を慰め其の心を樂しましむるものなくんば遂に疲れて倦怠を生ずるの恐あり。是に於てか天自然の慰樂を下して之に備ふ。而して此の慰樂は人の取るに委せて盡くる所なく三公の貴きも侯伯の富みも之に比する能はざるなり。取るに易く樂んで害なく眞に人の精神を慰め樂しましむるもの之を置て他に求むべからざるなり。

讀書に親しむ者は東西今古の英雄傑士を友とすることを得べく其の樂も亦頗る宏大なりと雖之を自然の慰樂に比すれば及ばざること遠し。自然の慰樂とは何ぞや。曰く天地の象四時の變態是れなり。人若し其の眼を放つて其の窮りなき眺望を探求せば其の慰樂は一生を通じて盡くることなし。今益軒の節序に従ひ一歲四季の樂を左に記述して之を樂むの助と爲さん。

一、春の景色

春は先づ一夜の程に新玉の年立かへる朝の空の光り心だらにやふる年にかはりて長

閑けし。睦月は事立つとて貧しき家にも春盤など設け又かはらけ取り出で大神酒勸めて父母に壽ぶぎし次に自ら祝し賓客をもてなす様常にかはりて珍らかなり。時今四の始なれば空の景色漸く換りこち風緩く吹て永解け遠き山邊に薄く霞のたなびけるなど物鮮かに見えて冬の空に代れる装ひ春の來れるしるしあらわなり。垣根隠れに冬より残れる雪の所々に見ゆるも名残惜むべし。待ち侘し梅の香百花に先ち春の消息を齎らすは喜ぶべし。谷を出で高きに移る鶯の春を迎へて若き初音の興に耳とめて嬉しく花をめで鳥を羨むは是れ春の賜なり。

行く先き遙に榮ゆる春の豊かなる恵み頼もし。千年を經べき緑の松も今一しをの色を増して珍しく韓文公が最も是れ一年春好の處と言ひしは早春の景色なり。きさらぎの程より冬の心盡きて空の色朗かに景色立ちて四方の山も霞こめたる装ひ殊に曙の景色譬ふべき物なく數ならぬ垣根の内も輝き草木皆顔色を生じ花待顔なる氣配嬉しく日蔭も漸く長閑かになりて人の業も暇ありて忙しからず日長くして少年の如く心靜かに

海の面日和よく裏山も朗かに霞渡り夕告げて日は既に入るも残れる光久しきは日の長きしるしなるべし此の比は陽氣の登る爲にや、童とも紙鳶を揚げ戯とすれば老若空を仰ぎ見るもおかし野には又陽烟の霞の如く地より立のほり莊周は之を野馬と云ひ老杜か詩に落花遊絲白日靜かなりと云へるも是れなるべし、

又垣根の草早くもえ出づるを見るにつけても春の氣は下より登る氣配明かにして花も漸く咲き續き梅花既に去り桃の紅なるはたなびく雲の面影あり李の白きは殘雪の梢にかゝるかと思えて麗し櫻の綻び初むるや、人の心を動かして得も言はれぬ眺なれ。我が日の本にては四時の花多き中に第一の見物なれば梅散りて後百花色を失ふ趣ありされど飽くまで見る程もなく疾く散るは又恨めし。

よしさらば散るまでも見ん山櫻

花のさかりを面影にして

と古人の讀みたるも情深し此の折より春雨の連りに降るに付けても我が宿の園の櫻は

いかにあらんと氣遣はる柳緑に花紅にして書き出せる春の色はいと麗しき眺なり。

春漸く深くなれば風和かに日暖く百草芳を争ひ群花艶を競ふ折なれば何れの所か春なからんや。斯る景色に觸れては人の心も浮き立ちて友を誘ひ春を尋ねてあくがれ歩き花を眺むるこそ目を擅にし心を快くする業なり。世の中のいみじく嬉しき事の一なるべし。我が心の樂を知らざる人は無頼の少年の閑を盗みてそゞろに行樂するに似たりと思ふべし。

芳草雨後に秀で好花風裏に香しきも此の折なり。杜甫の詩に鶯の歌暖かにして正に繁しと云ひ陳希夷か野花啼鳥一般の春と詠せしも皆此の時にして春霄一刻値ひ千金花に清香あり月に陰ありと云ふ詩を思ひ出すべし。又花を惜み春起早し月を愛し夜眠遅しと云へり。此の比の夕暮は遠き山邊の焼くるも見物の一なりされは春は焼痕に入りて青しと云ひ又野火焼けて盡ず春風吹いて後に生ずと云へるも焼野の草を詠ぜしなり古詩に池塘春草生すと云ひたるは眼前の景色を唯有の儘に言ひたるなるべし。

やよひも半なる頃八重山吹の風に翻へるは賑はしく厭かず眺め勝なり。春の花の多き中に唯山茶のみ榮り久しく橋の許のばらも夏を待顔なり九十の春光は長けれど何くれと紛はしく風雨も亦繁く果敢なく過ぎて今日の夕暮となり落花寂々たる黄昏の時は春の名残りいと惜むべし。蘇子瞻か青春還た一夢と言へる宜なる哉。吾が輩の浮世の塵も心のきたなきも花見る程に忘れしは今より後は如何にせん。老いぬれば今幾歳か花もあひ見んと思へば春の惜しさはいやまさりぬ。せめて樽酒餘春を樂みて此の憂を忘るべし。春の景色は四季の内すぐれて艶にして其の麗はしき様言ひ盡すべくもあらず。風雨に花は跡なくなり果て空しき枝を形見と見るも猶ほ春の色は空に残りて情深し。藤は獨り遅れて傍にならぶ花なければ偏に興ある様に見えて春に別れし物思ひも少しは忘るゝ心持するなり。

二、夏の景色

惜めとも止らぬ春既に去り呼ばねと來る夏衣の珍らしくあらたまれる空の景色心持

よげなるに青葉の梢若やかにいと目出度し緑陰晝寂を生すれども佗しからず。閑談に耽ける人は繁花にも優れりと爲す折待ち居たる時鳥の初音懐かしく鶯の鳴く聲既に老いたるに換れる心地そする唐の人は杜鵑の聲聞くことを嫌ふも我が國にては昔より之を憐みて歌にも多く詠めり。夜もすがら空もとゞろに鳴き渡れども聞く人皆喧すしとは思はず多からぬ所は今一聲だにきかまほし。又鳴き行く方の人も待ちなんと思へば過ぎ行くも更に恨むべからず。卯の花の垣根の雪にまがへるも獨り此の月の名を負ひて美しきを專にすと云ふべし。凡そ卯月の景色は清く和かにして空晴れ雨久しく降らず。日彌長くして暇多ければ出で遊ぶに良し。朝早く起きて園を窺ふにも風暖かにして草も木も皆緑の色を現はし各其の趣を爲せるは天地の恵み更に私なき證とす。さればにや四時の景初夏にしくはなしと云ふはことなり。卯月は空晴れやかなれど五月になればさみだれ久しく續き折々は雷轟き降らぬ時にも曇り勝にて園を窺ふ暇稀に常に閉ぢこもりて日數を経るも佗し。

夏漸く深くなれば木として繁らざるはなく草として榮えざるはなくひたすらに緑の色深き夏木立こそ花にも劣らじ。前裁の草木は雨を帯びて其の梢をあらはし所得顔に心に任せて生ひ繁れるも嬉しと見ゆ。昔覺ゆる花橋の香れる夜は追ひ風も懐かし早苗とる比田家は雨を待ち得て忙しく賑し。此の頃水の邊に飛ぶ螢の音もせですだくを見れば鳴く虫よりも憐むべし。夏山の景色青みわたりたる高き峰大空に連りて雲の外に聳えたるを飽くまで見るこそ殊に勝れて心を快くする眺め白樂天か眼をほしむまゝにし青山を見ると云へるが如しみな月の頃となれば端居の風涼しく心地よし池の心深く蓮葉の濁りに染まらずして夕風に匂ひわたるもすぐれたり。殊に花唇開き香り満ちて清らかなり。涼を逐うて木蔭に休らひ木々の下風の懐かしきに清き泉を掬ひ夏を忘るゝ心地するも潔し。光り明らけき夜半の月を清き水に宿して見るは更なり水の流るゝ音聞くもいみじく心ゆくばかりなり。暑堪へ難きに夕立のしぐれ渡りて名残り涼しきもいと心よし。清少納言は夏は夜と言ひたれど夕は蚊の人をさして殊更耐へ難ければ

唯朝の風の涼しき景色こそ清くして心に適ふを覺ゆるなり。

志士は日の短きを惜むと云ひ人は皆炎熱に苦み我は夏日の長きを愛すと云ふ宜なる哉。暮れ難き夏の日には學に従ひ業を勤むる人の爲に誠に愛すべし。去ど炎暑の盛んなる時は紅爐の中にあるが如く汗を絞り身の力弱りて堪へ難ければ夏の過ぎ行くは春秋の盡くる日の如く名残りを惜むの心持せず。唯年の半既に過ぎ行くはいと惜むべし。

三、秋の景色

秋となれば初風涼しく吹きて草木のそよぎ秋の聲の何所にも打ちなびきて聞ゆるこそ心を傷め身にしみて金氣の至れるしるべと覺ゆるなり。きりぎりすのすだくも時知り顔に聞え開花涼氣を兆し蟋蟀床帷に鳴くと云ひしも此頃の景色を詠みたるなり。大暑漸く退き新涼既に來れば恰も酷吏の去りて故人の來れる心地す人も再び力を得て燈も親しくなり讀書に時を得て萬つの樂に勝りこよなう面白し。萩の上風萩の下露様々の蟲の音皆秋の哀を催して身にしみ事限りなし。門田の稻葉朝露に濕ひ夕の風音づれ

てそよく氣色殊更早稻晚稻の穂に出でたる有様皆見るべき眺なり。秋の最中になれば待居たる月の明らけく此の夕此の景に遇ふこそ憂き世の中の面白さも悲しさも残らぬ時そかし。月毎に上の弓はりより亥待ちの頃まで空晴れ夜毎に心を樂ましめ目を悦はしむること窮りなし殊更三秋の間折々のいみじき光を年毎に心に任せて見る事誠に幸多き此の世なり。如何に賤しき身なりとも天つ御空に唯一つ懸れる月をおのか物として擅に仰ぎ見るはいとも賢く身に餘りていみじき幸なり。年々に月と花とを飽くまで見るは誠に思ひ出多き此の世なりと云ふべし。

惜しき夜の月なれど同じ心に見る人稀なれば西行が獨りぞ月は見るべかりけると詠めるも宜なり。唐の人も秋月は俗士と共に見るべからずと云へり。李白は今人は古時の月を見ずと云ひたるは昔世々の人の眺めし形見と思ふの意にしてしのばじ。古今の人の世を去り行くは流水の行きて還らざるが如し。唯月の光のみ古今變ることなきなり。

月の梧桐の上に到り風の揚柳の邊に来るは心を洗ひ興を催して快き折りふしなり。四時共に思出多き此世なれど取り分き『秋の月は見ざらん後の世の光までも思ひ遣らる』秋も半過ぎ行けば大空に初雁の連なりて鳴き渡るも亦珍し。花は春と云へども秋も亦花多く殊に野邊に立てる秋草の名も知らぬ花多く草むらに咲き亂れて錦をさらすが如し。秋は花女郎萩尾花葛花などでして藤袴朝顔桔梗龍膽などあり。

長月の頃は秋の花も過ぎ紅葉未だしなるに菊は百花に後れ獨り晩節を保ち霜に誇りて操の色を現はし此の花開き盡し更に花なしと云へるも菊を賞するの心尙薄し。牡丹は富貴の物なれば近俗の之に耽けるは宜なりと云ふべし。秋は陰氣の初めなれば空清く澄み渡り高くほがらかにして月日の光明らけく四望茫々として風冷やかに吹き人の心にしみて感深し。

陳眉公は世の人皆秋の月を賞して秋の日の妙なるを知らずと云へり。心を止めて秋の日の光り草木に耀きいさぎよく妙なる事を知るべし。殊に夕陽の西に傾き山に入り

海に沈まんとする様得も言はれぬ眺なり。又夕暮の景色は唯ならず薄霧の間垣に立ちのぼる装ひ風の音蟲のね何れとなく心にしみてあはれ深し。夜長ければ曉の鐘人を驚し易く寢ざめ勝なり。殊更老の身には懐古の心残夜に生じて行末の事など思ひ續け常に春の事のみしのぼる。

長月の末となれば秋の花皆衰へ蟲の音も鳴きかれて紅葉漸く色付き秋の暮れ行く思出深し。秋は唯今日ばかりそと眺むるも名残りいと惜し春の盡くるに比ぶれば草も木も漸く枯れ果て、行末の景色まで思ひやられて寂し。

四、冬の景色

冬來れば今朝より馴るゝ火の許漸く立ち離れ難く露は霜となり紅葉色濃く淺茅が原も冬枯れの景色となり秋に異なる眺なり。神無月の液雨も過ぎて日暖かなれば少し春の心地す。宜なり此の月を小春と云ふ。去れど日重なれば風愈々はげしく木の葉ふりて山もあらはに見え残るれ松も峰に寂しく雪降りて積りたる曉は山も里も銀世界とな

りて冬ごもりせる梢の枯れたるも再び花の咲けるが如し。殊更冬の夜の澄める月に雪の光りあびたる空こそ身にしみて哀も深し空晴れて後所々に消え残りたる雪もいと心にくし。

冬の末に至れば今年の日數残り少く春の隣既に近し齡の重なるは憂はしきも新らしき年を迎ふるは喜ぶべし。一歳は果かなき夢の心地して過ぎたれば後を顧みて名殘惜し。去れど人の世を経るは變多きものなるに一年の内災なくして過ぎたる人は復た樂しからずや。凡そ四季の移るにつれて感を起す人は情深し。愁人は之に依りて悲しみ達士は之に依りて樂しむ。景色同じくして唯見る人自ら其の趣を異にするなり。冬は陽氣悉く下り陰氣專にして止まり一歳の大きな功を成し終りて元氣を深く蓄へ隠して來ん春の本となる人も亦天の時に從ひ靜に精神を養ふべし。人の一生は年漸く重なれば老となり死に近づくこと遠からず。況んや人の命は朝夕を知らず少壯と雖老に先だつ人多く時の移ること速かなり故に時日を惜み空しく過すべからず。殊に冬藏むるの

基は青春の時に在るを忘れず陽氣の盛んなるに當り精進刻苦すべし。

第二十 青年修養の道 其二

貝原益軒五常訓を著はす解し易く青年修養の好訓たり。故に其要旨を摘譯して以て修養の資と爲す。

一、人たるの道

凡そ人は天地の大徳を享けて生る。之を性と云ふ。性自から五の徳あり。之を五常と云ふ。此の五の性に從へば五倫の道行はれて人道之に依りて立つ五常の性は體なり愛を仁と云ふ。憐れみなり。宜を義と云ふ。事物に相應するを謂ふ。理を禮と云ふ。人を敬ひ事に則ありて正しく筋目あるを謂ふ。通ずるを智と云ふ。道に通じ是非を知るを謂ふ。守るを信と云ふ。偽なくして道を堅く守りて變ぜざるを謂ふ。

仁義禮智信は又五性とも云ふ。此の五性を統べて言へば仁なり。故に仁は人心の全

徳なり。隨て仁の一理を以て義禮智信を兼ね萬善の根源なりとす。

仁義二理あるにあらず。仁の節あるは義なり。仁義の二を以て禮智を兼ね故に仁を言へば義は其の内にこもり仁義を言へば禮智は其内にこもる。仁は禮を兼ね義は智を兼ね春は夏を兼ね秋は冬を兼ねるが如し。何となれば夏は春氣の長ずるなり。冬は秋氣の隱るゝものなればなり。禮は仁の現はるゝなり。智は義の隱れたるなり。義の善惡を分つこと利刀の物を斷つが如くなるは智の明かなるに基く。春生じ夏長ずるは仁なり。秋收り冬藏るゝは義なり。之を四徳に別てば春は仁なり。夏は禮なり。秋は義なり。冬は智なり。

仁義禮智の四徳は生れながらにして人に備はる。何を以て知るや、四端あるを以て之を知る。四端とは惻隱羞惡辭讓是非を云ふ。物に觸れて心動き外に現はるゝを以て四端と名づくるなり。即ち仁は惻隱となり、義は羞惡となり、禮は恭敬となり、智は是非となる。

仁義の道は我が心の外に求むるの要なし。幼少の童も其の親を愛する事を知らざるはなし。其の長ずるに及んで兄を敬ふ事を知らざるはなし。親を愛するは仁なり。兄を敬ふは義なり。此の二つに基きて之を萬事に及ばさば仁義行はれて人道立つ。

五常の道に従ひ私欲の煩累なければ人の性の善顯はれ人倫の道行はる。中庸に性に從ふを道と云ふ是なり。此の性に従ふ時は親に孝に君に忠に夫婦正しく兄弟睦じくして朋友に信あり。國家を治め天下を平かにするも皆性に従ふの行より出づ。

人の心は仁義禮智信の性なり。人の道は君臣父子夫婦長幼朋友の行なり。

二、仁 愛

心の内にありて未だ外に現はれざるを仁と爲し既に現はれて情となり物に施すを愛と云ふ。

孔子曰く仁者は己れ立たんと欲して人を立つ己れ達せんと欲して人を達す。此の意は仁者は心に私なくして公なるが故に人我の隔なし。我が身を立てんと欲せば人をも

共に立つ。是れ萬物を以て一體と爲すの心なり。専ら我が身を愛して人を愛せざるは不仁なり。而して恕は仁に至る階梯なりとす。

不仁非禮を人の我に施すは我が嫌ふ所なり。之を以て人の心を測るに人も亦不仁非禮を嫌ふべし。故に之を人に施さず是れ即ち恕なり。是を以て仁は徳の名にして恕は仁を行ふ工夫なり。人須らく恕を以て私を去り仁を行ふべし。

仁の道を行ふには人を愛すべし。人を愛せんと欲せば先づ私の心を去るべし。恩を知るを人と爲す恩を知らざれば禽獸に同じ。

子曰く剛毅木訥は仁に近しと、是れ心剛毅にして物慾に屈せず容貌質朴にして飾なきは仁に近づくを云ふ。又曰く巧言令色鮮し仁と。言を巧みにして仁者の言に似顔色をよくして仁者の容貌に似たるも飾りて外に力め内に實なければ仁にあらざるを教へたるものとす。又曰く仁者は必ず勇ありと。是れ仁者は私に煩はされざるが故に義を見ては必ず行ふ。内に顧みて疚しからざるが故に事に臨んで憂へず怖れず堅く節義を

守りて身に私せず故に仁者は必ず勇ありと謂ふの意にして血氣の勇は勢に倚り節に臨んで身に私して道に背き節義を失ふ故に必ずしも仁にあらず。其の勇頼み難し。

孔子の弟子顔淵仁を問ふ。孔子答て曰く、己れに克ち禮に復するを仁と爲すと。凡そ人の身には耳目口體あり。故に其の心に私欲なくして禮を以て物を見、耳に聞き口に言ひ體に動くべきを戒しめたるなり。禮にあらざれば言はず禮にあらざれば動かす是れ己れの私欲に克ち道に歸るの方法に外ならず。

孟子は仁は人の心なりと説き學問の道は其の放心を求むるのみなりと爲せり。即ち外物に誘はれて放ち失ひたる人の心を收めて内に入るゝの要あるを教へたるものにして放心を求むるの工夫は敬に在り敬とは恐れ慎みて心を守り保つゝの道なりとす。

天我に財祿を多く與へて富貴と爲すは必ず我れ一人の爲に厚く惠むにあらずして我か力を以て貧に施し惠ましめんか爲なり。故に財は惜むべからず。財多くして人に施さざるは天に背くを以て禍を招かん。古語にも集まれば散す満つれば缺くと云ふ。隨

て人は我が身の俸食を儉約にし妄に費さず其の力に従つて人を救ふべし。凡そ吝嗇は仁の道を缺き吝嗇ならざるも不仁の人は人を恵むを好まずして無用の事に財を多く費すものにして必ずや天の罰を蒙るべし。

人は常に仁の心を存して忿を忍び慾を抑へて日々善行を力むべし。忿と慾を抑制せざれば善は行ひ難し。人の爲に益あるを欲せずして我が身に利ある事のみを思ふは小人の心なり。日々惡に習へば惡心日々に盛んにして日々に苦むも惡には赴き易く善には進み難し。故に愼みて善に赴き之を力めて日々に樂むべし。

三、義 膽

中庸に曰く義は宜しきなりと。故に朱子は義は心の制にして事の宜しきなりと云ふ。心の制とは心中に善惡を分つの理あるをいふ義の心にあるは利刀の如し。物來れば其善惡を分つこと利刀の物を裁斷するが如し。事の宜とは諸事に相應して其の理の宜しきに從ふを云ふ。是れ義の用なるも心の制なければ宜しきを得る能はざるなり。即ち

人を愛するは仁なりと雖父母兄弟妻子親戚朋友賓客の親疎貴賤の別あるを以て其の品に従ひ其の相應に愛するは宜なり。如何に人を愛するか仁なりとも親も他人も一樣に愛するは宜にあらず。義にあらざるなり。孟子は仁は人の心にして義は人の路なりと云へり。仁なければ人心を失ひたるなり。義なければ人道を失ふなり。

凡そ義は常に在りては理に従ひ欲に従はず變に居りては節を守りて利に走らず艱難に臨みては君國の爲に身を捨て、忠を行ふ。義なければ常に居りては理の宜しきを捨て、唯利の爲にす。變に臨みては恩を忘れ徳に背き利に就き害を逃れ命を惜み死を恐れ君父を捨て國を賣りて敵に降り其の醜行を恥ぢず禽獸に等しと謂ふべく皆義を失ふより出づ。

子を愛するは仁なり。子の惡を戒しむるは義なり。愛せざれば恩なくして他人の如し。戒しめざれば其の子不義に流れ惡に陥りて禍となる。故に姑息の愛は眞の愛にあらず君を愛するは仁なり。君に過あれば諫め君の爲に身を忘るゝは義なり。君として

下を愛するは仁なり。臣の惡を戒しめ其の才徳の高下貴賤の位に従ひて各相應に使ふは義なり又人民を愛し養ふは仁なり。法を立て罪あるを刑して之を戒しむるは義なり愛せざれば人民安からずして生養を遂げず。戒しめざれば惡人懲りずして人を妨ぐるが故に仁愛の道行はれず。文道を以て民を撫育するは仁なり。武道を以て人を威し敵を撃ち亂を鎮むるは義なり。故に文武の道も仁義より出づるものとす。

義は唯我が爲すべき道を行ひ爲めにする所なきも利を欲するものは之が爲にす。故に名聞利祿私愛の爲めにするは義にあらず。

善を見れば則ち遷り、過あれば則ち改む。義を見てせざるは勇なきなり。過を改むるは即ち善に移るの途なるを以て即時に改むるを要するも人の難しとする所なり。故に力行せざるべからず。

何をか人義と云ふ。曰く父は慈、子は孝、兄は良、弟は悌、夫は義婦は隨、長は惠幼は順、君は仁、臣は忠、之を人義と云ふ即ち人倫の道是なり。

四、禮 儀

孝經に曰く禮は敬のみと即ち禮は敬を専らとする外に道なきなり。

威儀を慎み衣冠を正しくし視ること聽くこと言ふこと動くことに過不及なく又人に對するに親疎尊卑の次第を考へ良き程にする是れ即ち禮なり。

人に血氣あり、身に耳目口體の欲あり、心に喜怒哀樂の情あり、若し禮を以て年節せざれば人事亂れ人道廢る是れ禮を以て欲を抑へ血氣を制するを要する所以なり。

耳に非禮の音樂淫聲を聞かず。目に非禮の物を見ず。口に非禮の事を言はず。身非禮の動作を爲さず。飲食を慎み節にして過さず。皆是れ禮の制する所なり。

禮記に曰く君子莊敬なれば日に強く安肆なれば日に怠ると。行正しく慎しみありて力むれば精力日に強く血氣運りて陽氣發生するを以て病生せず身を懦弱にして怠る時は元氣運らずして病を招く是れ養生の道に違へばなり。

少儀に曰く虚を執れども益を執るが如く虚に入れども人あるが如くにすと。即ち内

に物なき器を執るにも満ちてこぼれ易き器を執る如くに又人の居らざる家に入るにも人あるが如く慎むべし。是れ敬の心を存するものにて禮の本なり。

衣服は身の表なり、人に交はるには先づ形を見る。故に我が分に應じ年に應じ時に應ずべし。其の色彩は人の心を推し測らるゝものなるを以て之を撰ぶべし華美は之を禁ぜざるべからず。

飲食は身を養ふものなり。禮を以て慾を制し暴飲飽食を慎しむべし。

禮は未發に戒しむるを法とす。即ち慾の起らざるに先ち早く之を戒しむれば邪惡に到らず。視る能はざる所に益ありて善に移り罪に遠ざかる是れ禮の貴ぶべき所なり。

忠信は禮の本なり。義理は禮の文なり。本なければ立たず。文なければ行はれず。禮は謙遜を貴ぶ才力權位功名に誇ることなくへりくだり善事を人に譲りて自ら居らざるを謂ふ。是れ天下の美德なり。

禮至れば争はず、即ち才能勢威智力權位財利を争ふは小人の業にして禮讓の道にあ

らず、却て禍を招くの道なりとす。

五、智 力

論語に曰く智者は惑はず仁者は憂へず勇者は懼れずと。又中庸には知仁勇を三徳とす。道を知り理を辨ふるは智なり、故に智なければ心暗く道義行はれざるなり。

智は人の大寶なり。之を求むるには良き師友を求めて教を受け書を讀み廣く視多く聞き能く思慮して道理を尋ね以て心を開き智を明かにすべし。中庸の博く學び審かに問ひ慎んで思ひ明に辨ふるは是れ智を求むるの道なり。身を治め人を治むるの道に明かなるを大智と謂ふ。小事に賢く技藝に敏きも心暗くして身を治め人を治むるに疎きは是れ小人の小智なりとす。

學は自得を貴ぶ。之を頓悟と云ふ。自得せざるは眞知にあらざるなり。美味の味を知らざると同様とす。

天命を知るとは人の吉凶禍福死生皆定れる天命あるを知るを謂ふ。然るに小人は天

命を知らず禍あれば百方之を逃れんとし利を欲して人に諂らひ富貴利福を得んことを求む。是を以て義理を捨て利欲に従ひて恥ぢず。是れ君子の敢てせざる所なり。天命を知るを以てなり。

言語容貌を以て其の心を信すべからず。言語容貌君子に似たりと雖内心は奸曲なる者あり。是れ外に現はるゝ所を以て心を信する能はざる所以なり。

孟子は眸子を見るも人を知るの術なりと爲す。人の胸中正しければ眸子明かなり正しからざれば暗し。人の言の邪正を考へ又其の眸子を見れば概ね人を知ることを得べし。是れ言は猶ほ偽を能くすべきも眸子は隠すこと能はざればなり。人の智愚邪正貪廉才不才壽夭貴賤の相皆眼目に現はると謂ふべし。

六、信

信は誠なり。故に信なければ仁義禮智の四徳行はれず、天道誠なければ四時行はれず元亨利貞の四徳立たざると同様なり。

信は身を修むるのみならず。人を治め國を保つの要道なり。信なければ人従はず。心に誠あるを忠とし其の誠の言行に現はれたるを信と爲す。忠信は人の誠にして五常百行之を誠にするは人の道なり。

朋友に交るに愛敬を用ふべし。然れども信なければ誠の愛敬にあらず。信實を以て人に交らば互に感通して道行るものとす。

孔子曰く信なれば則ち人任すと。一たび約したる事を違へずして果たす、時人我を信じて事を打任かす。信なければ何ぞ人の信任を望むことを得んや。

自信とは自ら道を信すること厚くして其の守ること堅固なるを云ふ。即ち誹譽を以て遷す能はざるものにして我に過なければ憂へず恐れざるを謂ふなり。

第二十一 修養訓 其一

大江匡房座右の銘に云く、貧賤敢て屈する勿れ富貴敢て奢る勿れ。忠信以て國に奉

じ仁愛以て家を願ふ。將に秋竹の節を盡さんとす。誰か温樹の華を語らん。妄りに想ふ。水中の月浮き來る風前の花と貧にして志を下すは愚なり。富んで人に驕るは愚なり。榮華は夢中の春にして人は實あるを貴しと爲す。水中の月を思ふ勿れ。風前の花を欲する勿れ。

芭蕉座右の銘を記して曰く。

人の短を言ふこと勿れ

己か長を説くこと勿れ

ものいへば唇さむし秋の風

心邪なる時は人を損ふ。心に自慢ある時は人の長を知り、人の善を學ぶ能はず。心に迷ある時は人を咎め、宥恕の徳を失ふ。人の短を言はんよりは先づ己れの短を補ふべし。己れの長を説かんよりは先づ人の善を學ぶべし。

徳川光圀壁書の銘に曰く。

- 一、苦は樂の種樂は苦の種と知るべし。
- 一、主人と親とは無理なるものと思へ、下人は足らぬものと知るべし
- 一、捻に怯ぢよ火に怯ぢよ分別なきものに怯ぢきよ恩を忘るゝこと勿れ
- 一、欲と色と酒とを敵と知るべし
- 一、朝寢すべからず咄の長座すべからず
- 一、小なる事も分別せよ大なる事も驚くべからず
- 一、九分に足らず十分はこぼるゝと知るべし
- 一、分別は堪忍に在りと知るべし

其の言ふ所誠に平易なるも之を行うて誤らざるは頗る難しと爲す。修養は則ち之を實行して違はざるに至り初めて其の道を得たるものとす。吾人豈に努めざるべけんや嘗て青年の來つて意氣揚々として不善を懲したるを告ぐるあり。予其の故を問ふ。彼れ答て曰く同輩二三と共に電車に乗る中に相當の洋服を着けたる壯年あり。彼れ密

人に對し恰も我等を罵しるが如く盛んに學生の悪口を爲す。是に於て憤然電車の停車するを待ち彼を捉へて下り路傍に於て大に彼の非を詰り遂に彼をして低頭平身其の罪を謝するに至らしめ我が住所を告げ姓名をなのみ。彼の職業姓名を問ひ後日の證と爲せりと。予徐に之を諭して曰く、世間斯の如きもの尠からず。就中無智の輩に至つては恰も争鬪を挑むが如き勢を以て暴言を吐き狂態を演じて憚らず然れども此等は寧ろ憐れむべきものにして之を尋常視するが故に忿怒の念を生ずるなり。今假りに彼の如きものを屈服せしめたりとするも彼等は内心決して悔悟して改むるものにあらず。而して若し口論相ひ譲らざるが如きに至らば勢ひ暴力を用ふるに至らん。愚を相手とするの益なきは即ち之が爲なり。故に青年は耐忍自省すると同時に寧ろ之を憐むの情を起して其の無智を恕するの度量なかるべからず。將來深く自ら戒しめて以て怨恨を招き不測の災に陥ることなからんに注意すべしと。青年漸く其の輕舉を覺れるものゝ如し。下人の足らぬを知れば之を恕し之を憐むの情を生せん。分別なき者に怯ぶべきを

知れば危きに近づかざるべく常に堪忍の要を忘れずして修養に勵むべし。人は相貌を以て視るべからず。服装を以て推すべからず。常に其の心を洞觀して惑はざるを緊要とす。

中根東里壁書の銘に云く

- 一、父母をいとをしみ兄弟に睦まじきは身を修むるの本なり。本堅ければ末繁し。
- 一、老を敬ひ幼をいつくしみ有徳を貴び無能を憐む
- 一、忠臣は國あることを知りて家あることを知らず孝子は親あることを知りて己れあることを知らず
- 一、辭は緩くして誠ならんことを願ひ行は敏にして厚からむことを欲す。
- 一、怒に難を思へば悔に至らず欲に義を思へば恥をとらず
- 一、儉より奢に移ることは易く奢より儉に入ることは難
- 一、水を飲んで樂む者あり錦を衣て憂ふる者あり

一、出づる月を待つべし散る花を追ふこと勿れ

非道にして富貴となる者を羨み正路にして衰微する人を軽んずること勿れ。貧福は世の常にして喜ぶべからず。悲むべからず。謀計は一旦の榮花にして正直は後代の名譽なり。深く正道直路を嗜むを要す。

名利は皆人の願ふ所なるも利は一旦の利にして名は萬代の名なり。武士の一命を捨つるも名を思ふが爲なり。

士道に志して悪衣悪食を恥づる者未だ與に語るに足らざるなり。

喜ぶ時の言は誠少し、怒る時の言は敬少し、故に喜び怒る時は殊に言語を慎みて之が爲心を破らるゝこと勿れ。

善を行はず惡を去らざるは是れ自ら欺くものにして善を好み惡を嫌ふこと誠ならざるに因る故に誠ならざれば萬行皆僞となりて道行るべからず。道を行はんと欲せば先づ其の志を立て其の心を誠實にするを要す。

事必ず小を積みて大に至る。故に善は小なりと雖捨つべからず。惡は小なりと雖必ず之を斥けざるべからざるなり。

恩に報ゆるは人道の大節なり。恩を報ずるには誠を以てすべし。

父母に事ふるに能く其の力を竭し君に事ふるに能く其の身を致す。

孟子曰く志士は溝壑に在るを忘れず。勇士は其の元を失ふを忘れずと。

順境に居るは易く逆境に居るは難し。然れとも逆境に居れば人慎み畏れて過少く却て幸となり順境に居れば驕怠の心を生じて人過多く身の禍となる。例之高きに登る者は倒れ難し勢逆にして難ければなり。低きに下る者は倒れ易し。勢順にして易ければなり。是れ國家敵あれば隆となり敵なければ却て危き所以なりとす。人の知は眼の如し人の眼能く百里の外を見れども我が睫を見る能はず。人の知能く他人の惡を知れども我が身の惡を知らず。人を見ること常に明かなり。私なければなり。自ら見ること常に暗し。私あればなり。是を以て人の過を責むること嚴しく我が惡を許すこと緩か

なり。豈に慎まざるべけんや。

明日の謀は今日に於てせざるべからず。一生の謀は平生に於てせざるべからず。故に生前早く死後の謀を爲すべし。

努むれば貧に勝ち慎めば禍に勝つ努むる人は必ず富み慎む人は必ず禍なし。

古人言はずや天下皆非なるの理なしと。故に人若し天下皆非なる如く感ずれば其の人即ち非なるなり宜しく三省すべし。

臍下三寸を丹田と云ふ。人は一身の氣を丹田に藏め胸に集むべからず。是れ氣を治むるの良法なり。

家を治むるの教四あり。一には家業に勵みて生産に勸む。二には儉約にして用を充たす。三には慎みて我が身を保つ。四には恕にして人を愛する是なり。

仁にして人を愛するは文徳なり義にして正しくするは武徳なり。

第二十二 東北會津の豪族

一、會津の形勝

會津の名は今の四郡を包容せるものにて人皇第十三代成務天皇の時日本國中を三十三國に分ち第四十三代元明天皇の時更に之を六十六國に分たれ郡も頗る大なるものなりしなるべく此の時代に於ては單に會津郡なりしもの、如く會津四郡の數は國の私俗に依りて稱呼せられたるに過ぎず。然れとも第八十一代安徳天皇の頃に至りては會津と稱し或は大會津と呼び會津四郡のことも書籍に散見するに至れるを以て四分の實ありしと見て可なるべし。然るに元廣大なる一會津郡を割きて次第に郡を設けたるものなるを以て會津の耶麻郡會津の大沼郡會津の河沼郡會津の會津郡と呼び大會津の名稱は會津全士の稱號にあらずして反て小なる會津郡を呼ぶに使用せられたるは奇なりと謂ふべし。

土地の早くより開けたるは人の能く知る所なるも今其の例を擧ぐれば人皇第十代崇神天皇の時八角水精天より今の八角の地に落つ。故に祥と爲し以て伊舎須美神を崇め號して八角宮と云ふ。第三十代欽明天皇の時に至り大沼郡高田の伊佐須彌社創めて建つ。第五十代平城天皇の時大同元年猪苗代湖に水湛ゆ。水光激瀾として曠く山色糾紛として環る同二年弘法大師惠日寺を盤梯山に建つ。大師の楊津に法用寺を開きたるは此より先きなりとす。又第七十代後冷泉院天喜三年源頼義阿部氏を征するが爲奥州に在り。來りて塔寺八幡を勸請す。同五年義家塔寺八幡宮を建立す。

第八十一代安徳天皇養和元年越後太守城四郎長茂會津四郡及び羽越の兵を發し木曾氏を伐たんとし信州横田河原に敗績す。第九十一代伏見院永仁二年八月信州下宮を勸請す是れ若松の諏訪神社とす。

其他弘法大師の大沼郡の左下觀音（無頸觀音）の如き義家の耶麻郡新宮熊野社の如き大光禪師の實相寺の如き擧げ來れば名所舊跡算ふるに遑あらざるなり。而して盤

梯山は高く聳ひ滿山巉巖之より嶺稜相ひ連り平地を環りて四時鬱蒼猪苗代の碧水は渺漫として天に運る會津の城は鶴を以て稱し猪苗代の城は龜を以て呼ぶ。眞に其の風光と對應するを知るべし。

會津は一時惠日寺の寺領となりたる如きも葦名氏封を會津に受けてより爾來伊達蒲生加藤上杉の豪族相繼て其の領主となり徳川の世に至りて松平氏封せられて東北の重鎮たり故に古來尙武の氣象に富み常に雄武を以て著はる風俗素朴にして淳厚隨て義に堅く忠孝の顯はるゝもの頗る多し。故に維新の際舉國一致して義を守り天下の兵を受けて屈せず。勇戦奮闘し大に會津の名を成したる所以の者松平氏の教化の然らしむる所多きに困ると雖古來の習俗然らしむるものなくんば奚くんぞ能く斯の如くなるを得んや。而して今日に至る迄學者あり。外交官あり、博士あり、實業家あり、政事家あり、陸海軍人ありて、名を成せるもの尠しとせざるも其の剛健勇武の氣象を以てして軍人志望者の少きは寧ろ奇怪と謂はざるべからず。蓋し社會は日に物質的に傾き思想

自ら偏倚し復た他を顧みざるに至れる結果なるべしと雖人各特長あり、必らずしも悉く學者に適し實業家に適する者にあらず。諺に得手に帆を上げよとは則ち之を謂ふなり。故に資性剛毅にして體格強壯勇を好み武を喜ぶ者は宜しく進んで身を軍籍に委ね大に會津人の特長を發揮して古來の實を顯揚する所なかるべからず。

會津の豪族中葦名氏は鎌倉幕府の時封を此の地に受け最も長く之を領し累世其の恩を重ね勢を積んで盛氏の時に至り最も隆盛強大を極めたるも秀吉勢を成すの時代に於て伊達政宗の爲めに滅ぼさるゝに至れり。然れども政宗小田原に到り秀吉に謁したる後會津を捨て米澤に退き小田原陷るの後秀吉親しく會津の城下に來りて地勢民俗を視察し遂に蒲生氏郷を封して東北の重鎮と爲せり。而して葦名の興亡は之を國家の隆替に比較して誠となるもの多く殊に其の衰運の際に於ける戰跡に於て教訓尠からず就中最後摺上原決戰の際に於ける忠誠義膽は取て以て青年の龜鑑と爲すべき者あり。是れ予の特に豪族中葦名氏を説かんとする所以なりとす。

二、葦名氏の威望

佐原十郎左衛門尉義連鎌倉幕府の時始めて會津を領す。之を葦名氏の祖とす而して義連は桓武天皇の後裔三浦大介義明の七男なり。義連會津を領すと雖依然鎌倉に居住し直盛の時に至り後圓融天皇康暦元年會事に下り小館に住し後小田山に移り町を黒川と稱す。夫れより九代修理大夫盛氏の時に至り葦名の名遠國に顯はれ威力次第に近隣に及ぶ時正に戰國時代と爲り群雄並び起りて四方に割據し盛氏も亦仙道長沼を併合し爾來白河、那須、相馬、二本松、田村、須賀川、郡山、平、悉く其の麾下に屬し越後謙信の領を侵して遂に一城を奪ふ時として岩城佐竹の地に侵入して戰ふと雖會津に向ひ一矢を酬ゆるものなく威武四方に耀き北條氏康武田信玄も大に盛氏に敬服して交を親しうす。信玄評して曰く丹波の赤井、江北の淺井、會津の盛氏參河の家康を以て雄將と稱すべしと。

盛氏其の子盛興の年長ずるに及び家督を讓りて隱居したるも盛興大酒中毒の爲二十

九歳にして早世せるを以て再び政務を執り盤瀬郡二階堂遠江守盛義の子盛隆を養子と爲す。

盛氏六十歳にして逝去し盛隆繼ぐ田村清顯盛隆の若年を侮り盛隆の老母の須賀川の領を侵す。佐竹義重力を合せて先づ御代田の城を攻めて之を降す清顯敵し難きを恐れ押領の地を返し和を乞ふ。盛隆即ち守兵を置きて軍を收む時に信長勢を得て四方を平く盛隆使を遣はして款を通じ遂に勅宣に依り三浦介に任ぜらる。

信長の武田勝頼を伐たんとするや越後の景勝累の其の身に及ぶべきを察し大に領内の兵を催して戦の準備を整ふ。新發田困幡守同源太等景勝に背き盛隆に屬せんことを請ふ。盛隆隣國の好を重んじて之を許さず。景勝大に其の徳に感ぜりと云ふ。是れ武士の義を重んずるの本領なりとす。

松本、平田、佐瀬、富田の四家は葦名累代の長臣にして四天王と稱す松本太郎十六才にして盛隆を恨み叛を謀り笈川の栗村下總守を語らひ盛隆の城東羽黒山東光寺に舞樂

の覽遊を爲すを機とし其の勢八百人を以て不意に黒川の館を襲ふ。然れども守兵善く防ぎ戦ひ松本栗村相次で討たれ亂平く其の後盛隆寵臣大庭三左衛門の爲に弑せられ二十四歳を以て逝く。而して松本の叛大庭の弑逆は共に盛隆自ら之を招きたるものにして榮華に押れ驕りの心を生じて其の行を愼まざりし結果なりとす。是れ天正十二年十月の事にして諸臣遺子龜王を立て、主と爲す。

三、關柴の戦に於ける勇士の奮闘

大正十三年五月伊達政宗會津に屬したる四本松の大内備前か偽欺を憤り米澤より來り攻む。十日の夕伊達の侍十騎許關柴の館に忍び入り北方五十餘個所に火を放つ。葦名勢即ち黒川を發して鹽川に着し戰略を議す議容易に決せず。中の目式部大輔敵を目の前に控へたる慶徳五郎を見死にし鹽川の後に陣して敵の來るを待ち撃ちする能はずと爲し部下を率ゐて拂曉慶徳の館に到り其の勢を合し七百餘人直に發進し小荒井の窟を経て寺窪に達す朝霧の晴れ行く末を見渡せば伊達の新田常陸、原田左馬助三千有餘

の軍勢を二手に分けて原田は二陣に控へ大用寺川の彼方總社の原に陣し新田は遙に先陣に進んで土橋、瀧川を越え稻田の白山社の前に陣を取る。此の時式部大輔の弟佐瀨源兵衛鹽川に於て兄の小勢にて總社の原へ向ひたるを聞き己れの部下の足輕及び一味同志を率て勝の里に掛り白山社の前に達すると同時に新田常陸の軍を攻撃し其の勢頗る猛烈なり伊達信夫の者共山路の嶮難を越え疲勞したる所を攻められ潰亂敗走し常陸支ふる能はずして小田付に退き瀧川を前にして戦ふも亦支へず會津勢勝に乗して之を追撃す。

此の時頃中の目と慶徳は大用寺川を渡りて原田の陣を攻撃す。慶徳の旗新田の旗と同色なるを以て油斷し居たる所を不意に攻め破られ周章狼狽す。加ふるに敗走の新田勢後陣の勢と混し混亂益々甚だしく鹽川に残りたる葦名勢も之を見て總社の原に押し寄せ三方より関を作り合せ黒烟天に渦巻き電光地に散亂し縦横無礙に馳せ違へて敵を驅り立てたるが故に伊達勢崩壊す會津勢之を總社澤の邊迄追撃して引き返す。是れ勝

に乗じて失敗を招くを慮りたればなり。然れども伊達勢の逃ぐる者大佛山の麓にある樵の往來する道を街道と誤り山路に迷ひて餓死したる者頗る多く其の否らざる者は太刀武器を打ち捨て、漸く菅沼に逃げ込みたり。

伊達政宗十一日檜原より追手に向ひたるも其の日遂に檜原峠を越さず。原田の敗軍を聞くに及んで十二日の未明白石に先陣を命じ萱峠に退却す。時五月雨頻りに降り山路樹木茂り山隘の霧深し白石乃ち斯る細路に敵の追撃を受くるは甚だ危険なりとし意見を上申す政宗即ち再び檜原に引き返す。

政宗檜原に城を築きて滞留すること五十餘日隨て馬場を造り毎日自ら馬に乗るを例とす。會津の土穴澤善右衛門私かに以爲らく忍び寄りて狙はゞ一矢にて射落し得べしと。即ち遙かの岨より忍び寄り馬場の端なる草深き所に隠れて政宗の到るを窺ふ。此の日政宗馬場の半途より引き返し遂に目的を達せず。穴澤遺憾に思ひ矢立を取り出し一札を認め矢に付けて馬場の端に立て、歸る文に云く、

恐れながら某か鏑矢を一つ進らせんと存じ恐び寄り狙ひ申候へども御運強く仕損じて候斯く申す者は穴澤善右衛門と申す者にて候。政宗之より馬に乗らざりしと云ふ穴澤の大膽にして而かも其の辭の禮を缺かざる以て其の人物を推すに足る。

此の戦に於て松本備中二心を抱き沼澤出雲守の爲に討たる。察するに龜王幼にして重臣其の人を得ず殊に盛隆以來人心次第に離背し政宗又其の強を以て邊を窺ふ連りなり。葦名氏幸にして此の戦に滅ひさりしと雖既に危し。惜い哉。

果せる哉。政宗利を以て猪苗代盛國を誘ひ又刈松田の青木修理亮を内應せしめ逐次其の勢を殺き連りに兵を催して會津領を侵略するに至れり。之が爲小手森城先づ陥り四本松城小濱城相ひ次て敵手に落つ。當時伊達の強を以てして容易に葦名を凌ぐ能はざりし所以の者は兵強く四民其の恩を忘れず義連會津を領して以來の餘澤と盛氏の中興の功業大なるに依るは勿論なりと雖尙葦名の世臣義に堅く節を守る者多く殊に其兵

數代の育成訓練を受けて勇強比すべき者なかりし結果なり以下其の然る所以を明かにせん。

四、會津四天王の勇戦

二本松義繼形勢日に非なるを見政宗に屬するの利なるを知り伊達實元を頼み政宗を説く政宗肯んぜず義繼宮森の輝宗の陣に赴き嘆願せんとし謁を乞ふ。輝宗即ち義繼を座敷に請ず。偶々郎黨鹿子田の仲間何者か恐びやかに刀の刃を磨くを見何心なき様に其の故を問ふ。彼れ戯れて今日二本松殿を安々と生害すべき爲なりと答ふ。仲間私かに之を其の主に告ぐ是に於て義繼主従俄かに殺氣を生じ應對無事に終り。辭し去らんとする時輝宗續て庭に下りたる所を主従四人力を合せ輝宗を捉へて之を刺し共に提げて逃げ歸る。政宗之を聞き追躡したるも及ばず政宗令して銃を撃たしむ。義繼逃れ難きを察し阿武隈川弘中の瀬より七八丁隔たりたる權現谷地と稱する小高き所に輝宗を引き上げ散々に刺通し其の死骸に跨り割腹して死す誠に天罰と謂ふべし。若し義繼

にして節を守り飽く迄政宗と戦ひ其の終りを全うせしめば汚名を千載に残すことなかりしなり惜むべしと謂ふべし。

此の報二本松城に傳はるや、我れ先にと馳せ集り青澳川アツクマを渡り弘中の原を見渡する敵退きて隻影なし即ち歸りて防戦を議す。政宗果して軍を高田に進めて之を攻めんとす。城堅固にして容易に攻むべくもあらず。然るに時偶々暴風となり次て雪に變し三日の間風雪止まざりし爲雪降り積りて行動自由ならず政宗陣を引いて小濱に歸る。

是に於て會津四天王の徒大に慷慨し岩城石川白川の勢を合せ進んで伊達方の城寨を攻略し葦名の勢力を挽回せんことを欲し相期して安積郡に進入し先づ中村の城を取り次て本宮、高倉附近の域を陥れて小濱に向ひ政宗と雌雄を決すべきを定む壯なりと云ふべし。

政宗之を聞き小濱より岩津野に移り軍を諸方に分つ會津勢之を聞き敵の兵力を分つに乘し各個に之を撃破する爲軍を二手に分ち一は會津勢に岩城勢を合して高倉に向ひ殘餘は直に本宮に向ひ共に政宗を狭撃して一舉勝敗を決せんとす政宗之を聞き直に陣を本宮に移す。

十七日の未明會津勢前田澤を發して高倉に向はんとす政宗即ち其勢を二分し一は高倉道の山下に一は觀音堂を経て太田原に位置し狀況に應し高倉に應援せしめんとす。然るに會津勢頗る優勢にして毫も高倉を意に介せず直に本宮方向に前進す。高倉勢之を黙視する能はず勇を鼓して横より會津勢を攻撃す。岩城勢續て到着し竹貫參河守先頭に進んで指揮す。手利の弓勢六百人の射放つ矢音は恰も群鳥の飛び立つ羽音に似たるのみならず所を嫌はず中る所を射透して、敵の死傷夥しく伊達の勢度を失ひて潰亂す。會津岩城の軍勝に乗じて追撃し敵を山上に追ひ上げたり。此の時頃本宮より濱田伊豆守白石若狭守高野壹岐守等に鐵炮百餘挺を添ひ高倉に赴援せしむ恰も此時一方より向ひたる白河須賀川の勢之を見て追躡したるも其餘りに小勢なるを見て長追せず。引き分かれ太田原の敵を發見して直に之を攻撃す。是に於て濱田白石の兵其背後を斷

れ太田原の伊達勢防戦努むと雖支ふる能はずして観音堂を下り其本陣に向ひ退却す。

此の間會津勢は高倉の敵を驅逐し直に本宮に向はんとせるも途中伊達成實の勢あり小勢なるも侮るべからずと爲し先づ人馬を休め而して後互に衝突せりと雖伊達の勢遂に敗れて本陣の上の山に逃る。

太田原に向ひたる石川白河須賀川の勢は観音堂の敵を驅逐し政宗の陣を五六町前方に望み馬の息を静め士卒の渴を潤ほして直に之を攻撃せんとしたるも漸く夕陽の春くを見て時既に遅きを知り斷念して逐次に引き上げ政宗も亦岩津野に返す兩軍の決戦は實に明日にあり。而して其の大勢は會津勢に傾くこと過半以上士氣の盛んなりしこと推して知るべし。何ぞ計らん會津増援の佐竹の大將義政此の夕馬を勞はり下部に命じて四肢を洗はしむるに當り意に満たざることありて木履を穿ちたる儘下部一人を蹴倒せるに激し下部遂に義政を刺せるが爲に状況急變して勝利の期し難きを知り會津勢相ひ謀りて夜間直に軍を引きして黒川に歸る翌日に至り伊達軍初めて之を知り政宗も亦小

濱に歸る。

要するに此の戦は結局會津勢の勝利に始まり又其の勝利に終れり。當時伊達政宗次第に勢を得て米澤より東方に移り漸次葦名の領を侵すと雖之を葦名の大にして強なるに比すれば固より日を同ふして語るべきにあらず。隨て小戦に慣れて未だ大軍の操縦に熟せず徒に兵力を分散して敵に各個撃破の好餌を呈す。然るに葦名の四天王は戦場往來の古實を傳ひ其兵力を集結し僅かに二分して優勢を以て敵の分散に乗す是れ正に戦術の原則に合する者にして其の戦の勝ちたるは當然なり。而して佐竹勢の變に遭ふや即夜軍を返して敵をして啊然たらしめたるの機敏に至りては現今精銳の正規軍の行動と全く其の軌を一にす。若し夫れ此の時に當り關柴の戦の如く軍議容易に決せず。曉に及んで軍を返すが如きに至らしめば忽ち伊達軍の追撃を受け功を一簣に缺きたるや必せり。況んや一般士氣の沮喪せるものありしに於てをや。然るに決心敏にして行動速かなりし爲士心毫も墜ちず。後年再び勝を得るの機あるべしとの確信を以て

黒川に歸ることを得せしめたり斯の無形の功は葦名の運命を維持するに大に與つて力ありしと謂ふべし。

政宗伊達成實をして澁川に居らしむ。二本松勢義繼の靈を慰め恨を酬いんと欲し正月元日澁川を襲ふ。戰酣なるに及んで二本松勢其の退路を塞がれ遂に大敗す。既にして政宗に内應するもの續出し外には政宗の大敵あり。内には忠逆二黨の争闘あり梅王遂に堪へずして城に火を放ち弟七郎を伴ひ會津に逃れ二本松遂に伊達の占領する所となれり。

五、義廣挽回を策す

龜王三歳にして早世し佐竹義重の二男義廣養子となりて葦名氏を繼ぐ。

四本松の大内備前會津に來りしも重臣約に反きて彼を宿老の中に加へざるを以て遂に志を翻して米澤に赴き政宗に屬す。義廣大に怒り先づ備前の弟片平助右衛門を伐ち夫より直に本宮に向ひ一戰すべしとて會津勢に須賀川勢を合して安積郡に出陣す二本

松の伊達成實之を片倉小十郎に報す。小十郎即ち信夫郡の勢に馳せ集るべきを傳へ單身二本松に到る事急にして安積勢容易に來らす已むを得いす侍二十餘騎に鐵炮五十餘挺を添へ高倉に先遣して戰略を議す然るに會津勢は片平其の母を質と爲し堅く二心なきを誓ふが故に之を幸として深く戰を挑まんとせざるも徒に引くを遺憾とし本宮に推し寄せ一戰の後軍を返すに決し四月十八日の未明軍勢を觀音堂に向はしむ。然れども元來此の戰は伊達勢の劣勢なると會津勢の趣意前記の如くなるとに依り先頭一部の衝突ありしと雖伊達勢の退却するに及んで引き上げたるを以て大なる戰を見ずして終り軍を會津に返せり。

義廣葦名の勢力を挽回するに腐心し連りに政宗と雌雄を決せんと欲し天正十四年六月再び軍を催うして安積郡に出陣し佐竹義重岩城勢五百餘騎を率ゐて之を援く。政宗即ち宮森を發し二本松の杉田と云ふ所に陣を張る。兩雄將に戰はんとす。伊達葦名の興亡は正に此の一戰に在るが如し。然るに元來盛隆の後室は伊達輝宗の妹にして兩家

の間骨肉の好あり隨て雌雄の争は兩家に利ならざるを以て和睦すべしとの議起り義廣政宗二人を説き和睦遂に成り高倉の決戦を見るに至らずして兩軍互に陣を引けり然るに片平助右衛門陰謀を企て再び兩家の確執を生じ政宗連りに軍を催して先づ阿子島、高玉の二城を略し次て駒峯新地の二城を陥る。殊に猪苗代彈正盛國政宗に誘はれて謀叛し摺上原の決戦に義廣大敗して葦名家滅亡の因を招くに至れり。

六、義廣政宗の決戦に於ける忠臣義士の勇戦

政宗盛國を其味方に屬し義廣と決戦せんと欲し軍を阿子島に進む此の日伊達成實片倉小十郎盛國を案内者として摺上原に到り地形を偵察し敵の新橋を渡りて戦はんとする時密かに勢を背後に廻し猛烈に正面より攻撃して敵を川に追ひつめんとするの計略を定め猪苗代に歸る。此の時附近の民家に火を放ち戦の妨害となるものを焼き拂ひたるは用意周到と謂ふべし。

抑々猪苗代は會津の牙城に過ぎざるも之を有すると否とは實に會津の運命に關す。

即ち會津勢之を有すれば、伊達軍東方山地を経て盤梯山南麓に進出するは最も危険にして且進軍極めて困難なり。然るに伊達軍之を其の味方に有すれば容易に軍を進めて此所に兵力を纏め會津平地に進入するに頗る好都合となる。而して此の間敵の來り攻むるに遭ふも猪苗代を固めて之を防ぐ時は準備整はざるに乗じて敵の撃破する所となるを免るゝことを得べし。故に盛國の叛くや、直に之を討て猪苗代城を其の手に收むることは會津勢に取りて最も重要なりしも黒川より警固の爲に附せられたる二百餘騎盛國に欺かれ其の任を空しうして黒川に歸る。是れ葦名滅亡の濫觴なり。惜みても尙餘りありと謂ふべし。更に一步を進めて之を言ふ時高玉阿子島の諸城敵の手に落つるや、義廣何を以て勢を盡して自ら猪苗代附近に出陣し直に之が恢復を計らざりしや、若し果して斯くなれば獨り盛國をして款を政宗に通ずる隙なからしめたるのみならず早く決戦の準備を整へ敵をして山地の障碍を背にして戦はざる能はざらしめ我は交通自由の地に於て頗る有利の形勢を以て戦ふことを得、勝算隨て我に多かりしを見る。

蓋し油斷其の機を失すと云ふべきのみ。盛國の成實小十郎を其の館に入れ民家を焼き拂ひたるを聞きて倉皇夜に入り兵を出す如きは既に己に遅しとなす。

義廣其の夜普藤の高森山に陣す。拂曉西窪滑津櫻川の部落に敵の進入するに至れば味方の障得なりとて之を焼かしむ先陣富田將監湯田澤附近に在りて早曉より漸次陣を布く。

此の夜政宗暗を冒して石筵越を経て夜半猪苗代に到着し其の軍勢は坪下越を通過せしむ。朝に至り政宗出で、摺上原を視察し其の配備を定め盛國を先陣とし湯田澤附近に向はしめ小十郎成實之に續く。政宗乃ち盤梯山の麓八か森に位置を占む。

此の日の戦は兩軍の先陣たる盛國と將監との衝突に始まる將監年未だ二十一歳なりと雖勇壯剛毅にして殊に盛國の叛を惡み猛烈果敢に之を攻撃して、忽ち勝利を得之を追撃し遠く東方に進出す。時に西風烈しく砂塵を巻き鐵炮の烟と共に吹き掛けたるを以て、盛國兵を集むることを得ず。潰亂して第二陣の片倉勢に混す。是に於てか片倉

勢も亦混亂し敵と戦ふこと能はず。政宗八か森より敗戦の狀を察し太郎丸掃部に鐵炮二百餘挺を授け之を援けしむ。掃部乃ち馳せ出て横より會津勢を銃撃す。將監遙に其の太郎丸なるを認め怒り心頭に發す。以爲らく彼れ輩名累代の臣にして今や政宗に従ふ。憎みても餘りあり。彼を斬らずんば已まざるべしと。其の隙を窺ふ然るに掃部の勢悉ち突破せられて敗退す。此の時掃部唯一騎離れて逃ぐるを認む。將監即ち馬を驅り追ひ様に之を斬る掃部屈せず逃げんするを將監背より指物の根元を搦んで引き落す此の時味方の兵七宮木工助と名乗り將監に追ひ付く。將監機を失せんことを恐れ汝之を斬れとて掃部を放ち馳せて戦を指揮し掃部遂に七宮の爲に首を搔かる。

伊達勢の先陣二陣將監一手の勢に斬り崩さるるを見るや、成實及び白石若狹守の勢盤梯山の山際なる細道より七森の間に出で一面に大旗小旗を差上ぐ會津勢敵後へ廻ると見て遡巡す。此の時後陣に群りたる雜人見物の者なご一度に動搖したるを以て或は謀叛人の出來たるならんと周章遡巡せり伊達勢之に乗じて攻撃に轉ず。時なる哉風俄

に東に變じ炮烟砂塵會津の陣に吹き掛け唯馬の足音太刀の音のみ夥だしく情況全く不明となり遂に敗走となる。義廣之を見て今日を限りと思ひ定め混甲四百餘騎澤井越中が指揮に委せて太鼓を打ち旗を一面に進め疾風迅雷の勢を以て八か森を攻撃す政宗其の尋常の様にあらざるを見て諸勢に令を傳ひて待ち構へたるも會津勢忽ち突進し來り茲に兩軍の紛戦となる。是に於てか政宗義廣互に刃を合して戦ふこと七八度兩家の存亡此の時に在り。然れども會津勢味方少く唯其の本陣の勢のみにして或は隔てられ或は正に討たれ大將の前後殆ど兵なし義廣屈せず勇戦奮闘す此の時麾下の士勝敗は戦場の常なり多年の後の功を思はずして死を一旦に決すべからざるを諫め僅に三十餘騎馬の前後を取り圍み裕々として引く。敵連りに迫ふと雖悉く之を追ひ散らし大寺道を取る敵は既に新橋を落し人馬の渡るべき所なし、即ち遙に西に下り堂島の橋を渡り黒川城に歸れり。

其の後の摺上原は兩軍混戦亂闘の戦場となれり政宗大にあせりて軍を督す之が爲兩

軍摺上原の南北に入り亂れ東西に驅け散らし濛煙天に渦卷きて旗と旗往々に馳せ違ひ紅波地に漲りて死屍累々として充滿せり。佐瀬平八郎は富田美作の二男乃ち將監の弟にして年未だ若冠に至らず。浮き立ちたる味方と打連れて引き退かんとす。此の時其の郎黨渡邊伯耆平八に謂つて曰く御舍兄將監殿は先陣として伊達の二陣を打ち破り太郎丸掃部を打ち取り給ふ。御舍弟三郎殿は未だ幼き御身にて高名なされたりと聞く。何ぞ拔群の功なくして徒に引き給ふべきと平八郎之を聞き俄に顔色を變じ馬の頭を引き返し群がる敵中に突入して大に奮戦し遂に重傷を負ふ。仲間之を肩に懸け亂軍の中を済合村の東方迄引きたるも敵頻りに之を追ひ平八郎終に討れたり斯の如く屍は戦場の露と消えたるも今尙一基の石碑を存し名を後世に止む。故に梁川星巖は大楠公を賦して曰く

豹^ハ死^シ留^レ皮^ヲ豈^ニ偶^ナ然^ナ 湊^ハ川^ノ遺^ト跡^ハ水^ニ連^レ天^ニ
人^ハ生^レ有^レ限^ナ名^ハ無^ク盡^ス 楠^ハ氏^ノ精^ニ忠^ニ萬^古傳^ハ

實に人は一代にして朽ち名は末代に傳はりて滅せざるなり。

會津方河原田治部少輔益次は檜原方面の備として大鹽に向ひたるも敵一人も來らず。政宗猪苗代に進入したるを聞き大鹽を發し摺上原に向ふ。然るに味方敗軍の様を見て其の手勢を引き纏めて機を窺ふ。此の時伊達の陣より鐘の紋を書きたる旗を進め大勢の兵之に續く。是れ即ち片倉小太郎なり。盛次大に喜び之を突破せんと欲し靜かに令を下して進撃せしむ。而して盛次が郎黨伊南源助先頭に進み忽ち敵と引組み押へて首を搔き落せるを始とし互に入れ亂れて暫く戦ひ兩勢左右に引き分かる。盛次か勢首を獲ること七つにして我は僅かに足輕二人を失ふのみ。然れども大勢の挽回し難きを察し大寺附近に引き上ぐ。敵頻りに追躡す盛次が一族に左馬允吉次と云ふ者あり。年十七歳引き返して敵と引組み遂に其の首を取る盛次之を見て今此の敗軍の紛れに其の首を取りて何かせんと叱したるが故に吉次首を捨て分取りたる刀を從者に持せて靜に引き上げた。

又金上盛備は盛隆の三浦介に任せられたる時敎答の使として京都に上り其の際遠江守に任せられたる者なるが味方の敗軍を見遺憾やる方なく今は是れまでなりと決心し追ひ來る敵を逆撃して追ひ返し馬を駈け除けて見るに淺き傷を負ひ鎧の袖朱に染みたり。此の機に乗じ暫く控へ馬の腹帯を締め鎧の上帯を結び直し且つ郎黨に謂て曰く味方言ひ甲斐なく今日の一戦に敗れたり明日にもならば伊達信夫の奴原誇りて葦名一家の諸侍臆病風に誘はれて逃ぐるを追撃したる心地よさなと、惡口すること目に見る如く思ふなり。熟々今日の戦を見るに先陣の將監朝の間の一戦に盛國小太郎の勢を斬り崩して猛烈に之を追撃し剩へ之を増援せる太郎丸を討ち取り又本陣の戦も屢々勝つと雖畢竟富田平田等を始め宗徒の者共心々になりて協力奮進せざるが爲遂に敗軍となれり。而して味方の陣中に名を知られたる程の者は概ね彼等の親族なるを以て恐くは一人も討死するものあらざるべし。是れ葦名家累代の名を汚すに似たり。又摺上原の戦に逃げ崩れたるものは誰々なりと人に指さるゝは生涯の耻辱にして遠くは祖先に汚

名を及ぼすに至る。故に我れ討死して本意を遂げんとすと。此の時平八郎の郎黨二騎乗り疲れたる馬に鞭を當て、來り平八郎の戦死を告ぐ盛備即ち扱ては平八郎も討死したるか我も今討死せん、最後の様を見て目出度代に遇はは朋輩に語り傳へよと言ふ。二騎之を聞き某等は先刻如何様にもなるべき所なるに敵に隔てられ主の命の際にも供仕らず、残念に思ひつゝ、甲斐なくも是れまで落り來り今又御最後を目のあたりに見て素通りせば如何てが其の様を人に語らるべき。如何にも數ならぬ身なれども是非に死出の御供せんと馬を駐めて肯かず。盛備深く其の志に感じ追ひ來る敵を近づげ共に敵勢の中に突入し一步も引かず、奮戦し終に一人も残らず討死せり。盛備生前に於ては義士として敬まはれ死後の靈威も徒ならず。其の古墳に太刀長刀を竹にて作りたるものを供ひ賽する者今尙多し。是れ武士の魂を千歳に残すと謂ふべし。

政宗大事を取りて直に黒川に攻め入らず。窺かに情況を窺ふ。此の間東方に於ては佐竹、岩城と恨を結んで戦決せず。三橋に滞留するは恰も身を強敵の中間に置く等

し。然るに黒川に於ては富田美作守平田左京亮同周防守等輩名累代の恩を忘れ義に反き唯己れの利を計りて依然其所領を有するを得ば政宗に屬すべき條件を提出し遂に隱謀を企て政宗の同心を得るや、俄然義廣に對する態度を一變し反て諸士悉く政宗に心を寄せ穩かならざるを以て城を捨て、落去すべきを以て脅し又情況斯の如くに至れば頼むべき忠臣皆討死して存在せず。隨て四面楚歌を謠ふ者多く如何共する能はず義廣終に恨を呑んで六月十日の夕より黒川の城を出て葦原越より白河路を指して退去せり。河原田治部少輔は退て黒川に西方中荒井に留まる其の勢僅侍七八騎足輕八十餘人に過ぎず。義廣の黒川に退去せるを聞くや、其の領伊南に歸らんとし高田附近に到る。如何に思ひけん、伊南源助を政宗方に遣はし言はしめて曰く、盛次不肖と雖存命の間は當地は安々と御住居は案の外に候斯く申すを嗚呼がましく思召さは只今勢を向けらるべし。最後の戦に生涯の念願を懸け候べしと。政宗大に怒れるも諸臣の諫に依り怒を忍び餘りに不敵なるに感じ戦を催すことを思ひ止まり候とて使を返す盛次伊達の

者共さもあるべしとて伊南に歸る其の勇其の氣而も此の際に於て節を守りて變ぜざる志は感ずるに餘ありと謂ふべし。

政宗十一日遂に黒川城に入る。果せる哉盛次其の後會津の一角に在りて政宗と戦ひ大軍を受けて屈せず。大に伊達軍を苦め一方石田三成を頼みて秀吉の成敗を期し政宗をして再び米澤に退去するの已むなきに至らしめ其の大言壯語空しらせざりしは武士の意地武士の面目として大に賞揚する足るものと謂べし。

七、葦名伊達決戦の論評

摺上原に於ける伊達葦名兩軍の會戦は豫期の如く遂に兩家存亡の岐るゝ所となりたるも葦名家の爲には誠に惜まざるを得ざるなり。

今義廣を以て政宗と比較するに政宗は連続せる戦に於て大に其の戦術を錬り能く戦に熟するの點は義廣の及ばざる所にして其の老猾なる點に至りては豪族佐竹の家に育ちたる義廣の遠く及ばざる所なり。加ふるに會津は盛隆以來葦名衰運に傾き殊に離心

叛を起す者相繼ぎ就中幼主龜王の時に於て重臣の措置宜しきを得ずして著しく統制を缺く。此時に當り義廣他家より入りて其後を享けたるが故に其結束を鞏固ならしめ衰頹の運を挽回せんが爲には徐に小功を積んで漸次其の威望を高め信服を厚ふするの必要ありしと雖偶々伊達の勃興と其の野心とは義廣をして此の目的を達するの餘裕を得せしめず。隨て内未だ堅からざるに外に強敵と戦はざるべからざる境遇に陥りたり。故に恩を忘れ義を捨つるの徒は寧ろ強の伊達に附屬するの利なるを思ふ。是れ政宗の最も棄せんと欲する所の隙なり。然るに伊達に在りては其の一族郎黨擧つて強を爲すに努力するの時にして内に後顧なく外に力を専らにす。地の利も人和に如かすとは千古の金言にして摺上原の會戦は義廣既に六分の利を失ふ故に政宗をして義廣の位置に立たしめば伊達と好交を絶たざることに百方手段を盡し陰忍持久し内に統制撫育に努めて以て時の到るを待ちたるなるべく誠忠高潔の士を簡拔して之を用ひて誤まらざらしめば葦名の家は千歳に傳ふるに至れるや必せり。

然れども摺上原の戦跡を尋ね會津軍忠勇の士の奮戦を思ふ時は眞に血湧き肉躍るの感なくんばあらず。即ち將監僅かに二十一歳の若き身を以て何ぞ奸賊盛國を遁すべきとの義憤に勇氣百倍し其の一手のみを以て先づ之を突破し迅雷の勢を以て二陣に控へたる片倉小十郎の勢を崩潰せしめ老練の小十郎をして爲す所を知らざらしむ。而して戦況を讀む時は戦場全く將監の獨舞臺にして政宗の命じて増援せしめたる掃部の如きは將監に對しては恰も雀の鷹に於けるが如し。

凡そ人の勇氣に二つの別あり。乃ち天性勇なるもの及び義憤の力に依りて勇を生ずるもの是なり。而して天性勇なるも義憤の力なければ大事に臨んで節を變じ不義を敢てするに至るのみならず其の勇は狂暴に流れて國家社會を毒すること尠からず。然るに天性勇なきものも義憤の力あれば大事に臨み勇氣勃然として生じ能く之に依りて其の節を全うし正道を踏んで誤らざらしむ。之を是れ大和魂と謂ひ武士道と謂ふなり。蓋し我國の武士が潔く腹を切り君の馬前に忠義の戦死を喜び義を見ること泰山よりも

重く死を鴻毛の輕きに比するが如きは皆此の大和魂武士道より出づる所にして之を我が國民の精神とす。義憤の力は即ち此の精神の事に臨んで躍動するが爲に生ずる所に外ならざるなり。

今將監は即ち天性の勇氣と義憤の力に依りて生ずる勇氣とを顯はす。死何ぞ恐るゝ所ならんや。況んや伊達の軍に於てをや。予私かに思ふに當時將監は實に會津軍の先鋒たり。而して人期せずして此の一戦の兩家存亡の岐るゝ所なるを思ふが故に將監戦に敗れんか、啻に累を會津勢に及ぼすのみにあらざるなり。是に於てか益々勇氣の振ふを致す。此の勇を稱して責任觀念より生ずる勇氣と云ふも要するに義憤の勇に外ならざるなり。彼の將監の幼弟か十二三才にして人の注目を惹くの勇戦を爲し或は弟三郎の郎黨の言に激憤して死を賭して奮闘したるは家門を辱かしめざらんとするの勇と恥を知るより生じたる勇とを合せたるものにして皆義憤の勇に歸す之を稱して武士の意地武士の面目と云ふ。

此頃の戦は既に新に小銃を採用したるも未だ古の一騎打の習慣と刀鎗弓矢の時代の戦法とを改むるに至らず。随て多くは孔明八陣の法に則り勢を分つて配置し逐次に戦ふと例とす。之が爲屢好機を失して敗戦となる事あるを免れず。今若し會津軍をして其勢を分つも先陣の前進に従ひ後陣其配置を維持しつゝ之に續行し機を失せず。戦に入したりとせば如何然る時は恐くは政宗の手を出す能はざる間に其三陣を撃破して直に本陣を突き我の兵力の纏りて優勢なるに反し伊達勢は一部宛各個に撃破せられ其本陣も亦其一部に過ぎざるが故に忽ち突破せらるゝに至るべく大勢早く決して會津軍は其最初の勝利を全うし得たるや明かなり。是れ今日の戦法にして敵の一部宛を各個に撃破せん事を努むると同時に我は絶対に之を避け且一部の獲たる勝利は後續する主力を以て之を捉へて以て勝利を全うするに着意し常に孤立して戦はしめざらん事に努力す。敵と決戦を交ふる場合に古來必勝を期せんとして背水の陣を布く事稀れなりとせず。日露戦役に於ける沙河會戦の如きは日本軍に取りては背水の陣なり。即ち太子河

を直後に控へ近く其前方に於て敵と決戦する事を企て大勝を得たり。若し此戦に於て敗退せんか、一二の橋梁の如きは殆ど之れなきと同じく廣き正面に亘りて戦ふ各師團は敵の追撃を受けて河線に壓迫せられ殆ど全滅に陥る故に背水の陣は進むも死し退くも死せざるべからざるが爲勇氣百倍し寧ろ突進して敵を惱し潔く死せんとするの決心を鞏固ならしむ。是れ戦の勝つ所以なり。予私に怪しむ。義廣存亡を賭して決戦せんとするに拘らず裕々新橋を渡り然も橋の外渡るべからざる河流を背にして平然たりしは何が故なるかを。是れ千慮の一失か然らざれば戦の結果を察する能はざりし不明の結果なるべし。既に前に説く如く新橋依然として存在するも敗退して敵の急迫を受ければ流に溺るゝの外なし。現に此戦に於て水に溺れて死する者五百餘騎其後五十年を経て正保慶安の夏引續きたる大早魃に際し水浅くなれる時水底より朽ち残りたる鎧太刀長刀或は具足の實等を拾ひ上げたる者多かりしと云ふ。故に必死の決戦なるを以て敵の新橋を抜くを待たず全軍を渡したる後自ら之を撤せしめば富田平田の輩をして勇を

振つて戦ふの餘義なきに至らしめしのみならず全軍の勇を鼓して大に勝つ事を得たるべく縦令不幸敗戦を招きたりとも軍勢新橋に蝟集し陷溺斯の如き惨を極むるを免れしなるべし。何となれば橋なきを知る故に各途を山間に轉じて蝟集の禍を避たればなり。河原田盛次の特別任務を帯びて大鹽に赴くや敵の來らざるを見て摺上原に向ひしは之を本戦に參與すと云うて今日の戦法の最も重んずる所なり。是決戦を企つる戦場には味方の一兵たりとも多きを良とし之に依て敵に優る兵力を纏めて使用し必勝を期せんとすればなり。而して小支隊の他方に分離せる者が機を察して迅速に本戦に赴くは決して容易に非ず。然に盛次機を失せず、戦場に到りて戦に参加す、之に依て見れば獨り其剛勇なるのみならずして能く戦術に長ぜるを知る。斯るが故に彼れ會津の一角に據りて長く政宗と對抗し屢戦ひて敢て敗れざりしなり。其人格想見するに足るべし。勇將の下に弱卒なしとは千古の金言にして金上盛備の主従の如きは其好例なり。武士の典型なり。吾人は須く其精神を繼て以て今日の國家に盡さざるべからざるなり。

第二十三 奮闘の青年

説き起す時は是れ正に大正八年の半過ぎ炎熱焼くが如き日中弊衣を著け泥土に塗れ老若の男女に混して田に草を取る一青年あり。年は十九か二十歳なるべく色黒く肉締り骨太く丈高く容貌温和にして眼光清しく草取りなどをするには誠に惜しきの感あるも彼は黙々として而かも其の手は最も敏活に働き頗る熱心にして若き男女の俗謡に興しつゝ手を動かすを餘所に見て全く關せざるものゝ如し、此の青年は名を健作と呼び田川家の三男にして昨年既に縣立中學を卒業したる者なり。近隣の同輩悉く笈を負うて學途に志すに拘らず。彼は家に歸りて其の家業の農に奮勵す。田川家は地方富裕の一に算へられ彼の兄は今尙東京に在りて帝大法科に籍を有し長姉三人皆嫁して家に二人の妹あり。兩親健在なるも既に老齡然れども二人共に頑健にして往時と同じく雇傭人の間に交りて農に親みつゝあり。長子今在れば既に四十歳前後なるべきも彼は病の

爲帝大の半途にして死す。健作の家に歸りて學業を斷念せるは祖先以來の家業を繼か
んか爲なり私かに以爲らく兄は既に家業を放棄す。予にして業を繼かざれば誰か之を
能くせんと。斷然志を屈して復た他念なし。而して常に農家の子弟妄に利を逐うて都
會に業を求め或は學を修めて再び其の家郷を思ふものなく農村の疲弊日に月に甚だし
きに至るを慨く。彼れ未だ徵兵適齡に至らざるも一年志願兵を希望せずして兵役義務
を果すべきを公言しつゝあり。嘗て知人村役場の吏員たるべきを勧誘し村長も亦其の
人物學力才能を信じて之を採用せんとしたるも彼れ其の希望にあらざる故を以て謝絶
す。之が爲當初近隣殊に青年は其の愚直を笑ひ何を爲さんとするかと。多くは之を嘲
けりたるも彼は平然として畑に勞し田に疲れ滋々として倦まず又其の學力に誇ること
なく尋常小學卒業の青年に伍して青年會に加はり。殆んど其の牛耳を執り他の模範と
なり能く他人を指導し其の思想頗る穩健にして農村淳朴の風を養ふに與つてに力あ
り。即ち彼の常に着する所のものは紺布筒袖にして質素を守り粗食を厭はず遊怠に遠

さかり家に在りては親に従順にして妹を愛し人に接するに丁寧にして禮讓を重んじ殊
に老者を敬ひ幼をいたはり貧者に對し毫も倨傲の態度なく夜間は近隣の學ぶ能はざる
青年少年を集めて研究會と稱し自ら書算を授け種々の談話を試みて教導に力を用ひ之
を以て自ら樂み其の初め集る者少かりしも今や其の徳を慕ひ來る者四十餘人の多きに
達す。即ち之を三班と爲し小學校の教師二人を頼み自ら其の年少の一班を擔當し一定
の授業を行ひ之を終れば各班を合して農産の事日常の事等に就て談笑の間に智識を交
換し訓話を行ひ或は相撲を取り腕押しを爲す彼れ柔道に興味を有するを以て教師を聘
して一月四回衆と共に之を學び彼の家は恰も私塾と化す。

彼は一月二回の全休日を主張し其の他は凡て夜間を利用して用務を辨じ遊怠は人を
墮落せしむるのみにして勤勉にあらざれば高尚有爲ならしむるものにあらざるを信じ
て之を實行す。此等は皆彼れの學校に於て習得したる所を躬行するものにして常に同
輩年少者に語るに自尊心の必要あるも過度の自尊心は徒に驕慢の心を生ずるに過ぎざ

るか、故に不可なるを以て誠實勤勉唯其の職業に従事せざるべからざるを論ずを例とす。

彼れ嘗て懇話の席上貧家の少年に向つて語りて曰く、予農に精勵すと雖之を以て自ら満足するものと思ふ勿れ。奈翁伊太利軍司令官となり進軍の途次其の母をマルセイユの居に訪ふ。然るに母は曩に奈翁の不遇を聞き悲嘆したるも今や聲望赫々たるに接し大に喜び我が愛子よ御身は既に將軍に任せられたるやと狂喜感慨の語を放つや、奈翁怡然として微笑し母上よ願くは意を安んぜよ、兒は今や將軍なりと雖幾許もなく大元帥となるべしと答へたりと云ふ。故に佛國皇帝となるは初めより彼れの大理想として内心に抱きたるものにして此の理想此の抱負なくんば彼は恐く伊太利征戰の成功に甘んじて鴻業を成就するに至らざりしなるべく人に大なる理想大なる抱負なくんば其の人死すると同様なり。古來我が國の大人物を見るも又然り。即ち一代にして天下の財界を左右する富豪となり貧賤洗ふが如き者にして數郡一國を其の有と爲せる豪農あ

り。名もなき貧家の子弟にして本邦屈指の大工業家たり大商賣となれる者あり。給仕にして大將となり、寺の小僧にして總理大臣となれるの類極めて多く皆是れ其の理想其の抱負の大を保持して屈せざりしが爲遂に其の目的を達成するに至れるものとす故に予は大農大地主となりて數國の地を併せ有せんことを以て理想と爲し進んでは國富の本を固うし退ては貧を救ひ小を憐み地方の風俗を改善して國家の元氣を興さんことを以て目的と爲す。諸子も亦各其の志す所を定め大に奮勵すべし。然れども人未だ獲る所なくして徒に妄想に耽けるは最も不可なり。隨て今日吾人の師範となすべきは成功者の其最初に於て如何に勤勉努力したるかの點なりとす。予敢て富を欲する者にあらざるも志を成さんとせば富も亦必要にして業の大なるに従ひ益々可なり。人若し富を得て其の我慾を飽かしめんと欲せば寧ろ富を獲ざるの安全なるに如かず。秀吉は貧しき農家の子弟にして位人臣を極めたるも彼れに最も學ぶべき所は其の卑しき職に在りて熱心誠實毫も倦怠することなかりし點なりとす。吾人は其の職業を尊重して決し

て自ら卑下すべからざるなり。殊に農業は勞苦多しと雖實に國民自活の大本にして之に従事する者は即ち國民を養ふ最も重要な任に當るものとす。換言すれば職業には各其の職業の精神あり。而して能く此の精神を知る者は自ら自重の念を生ず。昨今の如く唯利あるを見て商に走り工に轉じ妄りに其の家業を放擲する者は一たび經濟界の不振に遭過せば忽ち路頭に迷ふに至るべく、畢竟するに其の職業の精神を解せずして泛々たる浮草を追ふと毫も異なるなし。殊に其の家郷を捨て、都會に蝟集し懦弱の風に染み華美の惡習に沈み其の病を得て歸るや、殆んど不治の状態に陥り頑健剛壯を以て誇りと爲したる農村の元氣を衰亡せしむ。是れ國家の爲最も憂ふべきことなるのみならず。前途尙長き青年の生涯を破滅す。斯の如くなれば如何に大なる理想を有し如何に大なる抱負を抱くも何の益かあらんと。

今年を経ること正に六年彼れ依然として其の歩を進む將來眞に望ありと謂ふべし。知人の報に依れば彼は豫期の如く徵兵に應じ甲種合格者の筆頭として砲兵に採用

せられ學術優秀品行方正勤務精勵成績最も優良にして上等兵となり下士適任證を得て歸郷し今や村會議員として公共事業に盡しつゝ家業を勵むこと元の如く聲望益々高く其の私塾は愈々盛にして新に文庫を設け一村の青年讀書の良風を生じ修養自から誠實勤勉の勢を成して元氣旺盛一村之が爲に益々繁榮し愈々活氣を帯び近郷皆其の風を望んで覺醒の色ありと云ふ。眞に國家の慶幸と謂ふべし。

大正九年の初予の知る製材工場に勤むる一青年あり。彼は高等工業の出身にして其の兩親及び青年共に工場主と知己の間なり。工場は一私人の經營に係るものにして敢て大なりと云ふ能はず。而して學校卒業の期近づくや青年自ら諸方の招聘を辭して此工場に雇はれんことを希望す。兩親固より之に同意し工場主は過望の工手を得るを喜び快諾せり。然れども其の報酬の如きは殆んど一般の木工労働者と異なるなく將來は相當の待遇を豫定するも小工場なるを以て意の如くならざるべく暫時にても可なりとの工場主の熱望を聞き、彼は業を卒へ直に歸還して其の家庭より日々工場に通ふに至

れり。然るに此の青年の業に従ふや頗る熱心にして精勵朝は定時に先つこと常に三四十分に於て他の職人の來る頃は工場整然として唯其起工を俟つのみと爲し夕は人の退出を待て器材を整頓清掃し工場を閉鎖し周圍を掃除し日全く暮るゝの後にあらざれば歸還せず。寡言にして親切温厚にして丁寧而かも學校に於ける彼れの成績は優等なりしを以て技能卓越なるが故に半歳ならずして工場主任となる。

當時經濟界は益々好況を呈し工と商とは非常の活氣を呈して一職工と雖大工場大會社に職を求めて轉じ會社工場も亦報酬を多くして人を招くこと盛んなり。隨て此の製材所の如きも屢々人の出入あり出づるものは多少の經驗を有する者なるも入るものは人を得る能はずして無經驗の者ならざるはなく皆之を教育せざるべからず。然るに主任の青年は出づる者を迫はずして入る者を導き彼れ遂に時の利用を考へ夜間の一部を以て正則工手學校の課程を定めて此等の新入者を教育し自ら工場の一隅に起居して滋々として奮勵す。此の間屢々友人の勧誘大會社大工場の招聘に接すと雖毫も其の心を

動かさず寧ろ利を追ふて轉々する者の陋を憐むの狀あり。

彼れ嘗て其の父母に語つて曰く、徒に利を欲する者は義を忘れて其の節を失ふ。誠に卑むべし。徳川の臣成瀬正成祿二千石を食む。大坂馬揃への時秀吉其の尋常の士にあらざるを見て我に事へは五萬石を與ふべしと言ひたるを以て家康之を正成に語る正成之を肯んぜず家康其の秀吉に事ふるの我か爲にも可なるを説く。正成涙を流し不肖の身祿を貪りて主を捨づるものと思はれたるを遺憾とし唯自害して心を明かすの外なしと言ひたるを以て家康之を秀吉に語る。秀吉益々之を惜み家康深く其の節義を守り忠誠の志厚きを感じ長臣を集めたる時古に聞きし三尺の孤を托すべき者は正に成瀬なりと言ひ大に之を信任したりと云ふ。成瀬二十五倍の大祿を見ることが塵埃と等しく今の人は僅かに拾圓二十圓の増加を喜んで恩を忘れ義を捨て、顧みざるは實に天壤の差のみにあらざるなり。元來今の人は多くは人に依頼して獨立獨歩の氣概を缺く。吾れの小工場に刻苦精勵する所以のものは職に依て報酬を得んが爲にあらすして他日獨立

して工場を經營する際の基礎を成すにあり。我が家今日貧しくして固より資なきも少を積んで大を致し得べく又充分なる經驗と自信とを得は世人の信用自ら加はり工場經營の如きは之を現實する敢て困難にあらず、見よ、今より十年の後我は徐に獨立の業を始めて幾多の人を使ふに至るべきも同輩は皆他人の使用人となりて多くの報酬を得るに過ぎず。而して大工場を經營するに至れば今の夜間の工手教育は之を純然たる工場附屬の學校となし自ら校長兼工場主として育成したる近隣の子弟を工場に收用して次第に大を致さんことを企圖せんとするなり。是れ自ら進んで小工場に勤むる所以にして抑々報酬を目的とするにあらざるなりと。彼の抱負は斯の如く大なるが故に目前の利に迷はず。彼の理想高きが故に刻苦精勵を厭はざるなり。

此の製材場は元小船を造るの傍遂に製材の業を始めたるものにして稀に帆船發動船を製造し工場主は大に其の經驗を有す。而して青年の工場主任となるや。小蒸汽船の建造修繕を始め業益々盛んとなる恰も良し海運の業經濟界の好況に伴ひ非常に發展

し工場の位置海に臨むの便あるが爲逐次其の區域を擴張して汽船の修繕新造の注文多く予の知れる大正九年の中頃は宛然造船所の如き觀を呈し製材の業愈々隆昌を極め職工服を着けて活動する青年の風貌頗る勇壯なるを見る時に彼れ年正に二十七歳既に適齡の時徴兵検査に應し合格したるも抽籤に落ち其の事業に依りて國家に貢獻すべきを誓ふと云ふ斯の如き奮闘の青年あるは國家の幸福にして吾人の最も欣快とする所なり。

予の少尉任官の頃十八九歳の若き馬丁あり家貧しくして中學に入る能はず小學卒業後勞役に服しつゝ獨學を止めず彼れ遂に陸軍將校となるの志望を抱き將校に就て學ぶの便益を考へ遂に馬丁を志願して將校に事ふるに至りしなり。隨て彼は常に書を手にして放たず。往復扈從の時と雖忽にせずして讀書し夜は主人の許を得て其の教授を仰ぎ時を惜むこと千金に優るも其の職には殊に熱心奮勵して誠實朝は早く起きて家の内外を清掃し勤めて到らざるなく大に主人の愛を受く。而して超然として馬丁の仲間に

入らず。其の怠惰の風に染まずして陸軍士官學校の試験に應じて合格し士官候補生として歩兵隊に入る。其の後予彼を忘るゝこと數年陸軍大學卒業後同校に在るの日歩兵中尉の予を自宅に訪ふ者あり。遇へば則ち當時の彼にして陸軍大學再試の審査に合格して上京したるなり。予自ら顧みて大に恥づる所なき能はざりしなり。

斯の如く刻苦精勵する彼れ豈に小成に安んずる者ならんや。是を以て彼れ益々奮勵努力するのみならず。志操堅確にして誠實業を卒へて常に良好の成績を擧げ累進して大尉となり。少佐となり參謀官となり中佐となり大佐となり遂に師團の參謀長に補せらる。彼れ若し往時の氣概を失はず苦學の當時を忘れずして孜々として進まば誠に望を將來に屬するに足る。元來斯の如き人は其の境遇自から心身を鍛鍊して意思隨て剛健なるを常とするが故に勞苦を意とせず艱難に屈せずして普通の人の能はざる所を能くす。是れ其の成功する所以にして之も亦奮闘的青年の好模範なりとす。

フアラ「博士實業界に於ける青年の成功の要素として勤勉と献身的精神の最も必要

なるを説き且つ世人の尊重愛敬を受け爵位を有し國家に重きを爲せる富豪の談を掲げて青年を戒しむ。曰く某富豪予に語りて曰く予が人生に成功したる故を以て青年の來りて人生の出發點を與へんことを求むるもの多し。然れども彼等は多少予が社會に於て望を達するに至れる頃の地位と情態とを以て出發點と爲さんことを欲し予が社會に出でたる時の地位と情態とを以てせんことを希はず。然るに予の閱歷は實に次の如くにして世の青年の意外とする所なるが如し。即ち予は貧家に生れ修め得たる教育は僅に小學校に過ぎず。而して十四歳の時には既に之を廢して直に或る職業に就けり固より全力を盡して働さしと雖向上の念更に止み難く予の職業の道に於て最も秀でたる某氏に一日の業務を終りたる後無給にて使用せられんことを請ふ。是れ唯予の職業に通曉せんことを欲したるのみ。某氏之を諾す。乃ち夜間粉骨して勞働し其の年の末頃迄には希望せし所のものは悉く學び得たるを以て忽ち必要缺くべからざる身となり、此の偉大なる主人は高給を拂つて予を聘したり。是れ實に予が今日の幸運を來せし基礎

にして敢て秘訣あるにあらざるなりと。實に然り。而して此の如き類例は我か邦に於ても頗る多く今日に於ても目前に之を認むることを得べし。然るに世の青年多くは其の學ぶ能はざるを歎ずるは抑々誤れるの甚だしきものとす。相當の素養を得るは便は則ち便なるべしと雖職業に従事するの故を以て學ぶ能はずと爲すは予其の何の故なるやを了解する能はざるなり。青年にして確乎たる精神を有せば書を讀む暇を求むるは誠に易々たるのみ。而して職業に關する智識は長く之を專攻するに依つて進歩發達して窮りなかるべく人の人格の大を致すは日常の實踐に依り初めて之を望むことを得るなり。然るに今日の通弊妄りに職を轉じ業を換へ唯一躍して高きに登らんとするが如き傾向著しく一の職業を專攻して其の一身を磨かんとするの著意を缺くを以て焦慮悲觀を事として自から其の職に熱心なる能はず、精勵努力之が爲に鈍り勇進の志氣遂に沮喪して奮闘努力の氣魂を失ふに至る。彼の高等學府を出で堂々たる肩書を有する學士の中には殊に其の志線の陋劣なるものあり。今日職を求めて漸く望を得るや、翌

日は既に他方に運動して高給の位置を探索し毫も恥づるの色なし。是れ其の信用の薄き所以にして斯の如くなれば學は寧ろ自負の心を増長せしめたる害ありて生涯の妨となるに過ぎざるの感なき能はざるに至る。是れ所謂學問の爲に倒るゝものか。

フ博士其の語を續けて曰く、此の富豪の青年時代に於ける行動は畢竟己れの能力に適する職業を選びたるに過ぎざるも自己をして缺くべからざる人物となすは成功上確乎たる秘訣なると同前に傭主の利益を増進せんとする努力は十中の九まで畢竟自己の利益を増進するものなることを確知するに足らん。多くの商店書記の中に於て英國の青年は獨逸の青年に壓倒せらる。凡そ最も勝れたる事務は之を得んとして最も充分に準備したる者の手中に落つるものとす。嘗て樞要の地位を占むる一富豪にして下院議員たる某氏外國語に熟達して廣き商業上の通信を行ふに足るべき書記を求めたるに採用に値する者は獨逸青年なるを例とするを發見したるを予に告げたり。蓋し彼等は英國に渡來し先づ英語を學ぶを目的として給料の爲に働かず薄給を以て甘んずる間に三

四の國語を語り且之を綴り得るに至り遂に之を修得す。之に反し英國の青年は英語の外殆んど何物も知らず。是れ獨逸青年に及はざる所以なり。而して獨逸人の書記は英國人の定時を報ずると同時に椅子を蹴つて立ち急遽帳簿を閉ぢて瞬く間に遊戯場に赴き或は自轉車に跨りて逃走するに拘らず。尙依然として事務を執り其の掌る特殊の事務を果し終りたる後にあらざれば退去せず。之が爲吾人は總ての同情を英國青年に傾くと雖遂に拔擢せられて高き給料を得必要にして缺くべからざる人物となるは獨逸青年なりと。抑々此の紳士は最も卑賤の家より起りて議會の一員となり工業界の泰斗と仰がるゝに至りしは全く彼れの精力に富めると誠實にして敏捷なりしに基くものとす。嘗て船積荷物の信用覺束なき外國の會社に委託品として送られたる事あり。然るに速に五六百哩の旅程に旅立つ者あらば其の荷物の手渡しを妨げて目前の損失を免れ得べきを以て店主は平素信用せる重なる店員を集めて誰か此の任に當る者なきやを問ふ。一店員其の任に當りても良し明日を以て出發の準備に着手せんと答へたるも一青年は

今より直に出發して命を果さんと答へ遂に其の任を受け日夜兼行して能く其の目的を達し店主をして數百磅の損害を免れしめ歸來直に拔擢せらる。此の青年は即ち今の富豪にして彼は中年に達せざるに其の商會の主任となり。今や顯要の地位に立ち斯界の重鎮となれり。

青年にして大人物となり大事業家とならんと欲せば男らしく正義を行ふの勇氣と獨立心とを養はざるべからず。同年輩の者と伍して常に自ら守りて人と等しく凡庸となるを避け苟も其の信ずる所は斷乎として奪ふべからざるの勇氣を鼓舞し薄志弱行に陥らざるを肝要とす。偉人ベンジャミン、フランクリンは青年の時活版所の職工たり。當時青年一般に酒を嗜むの習慣あり。同輩隨て晝食の際麥酒の一杯を傾くるを例としたるも獨りフランクリンは嚴に禁酒を守りて他人の例に倣はず。之が爲彼等の爲痴漢臆病者と嘲られたるも彼は心怡々として樂み其の業に勵み遂に偉大の人物となれり。然れども同輩悉く匹夫として世を送りて死し其の跡を留むる者なし。之をフランクリ